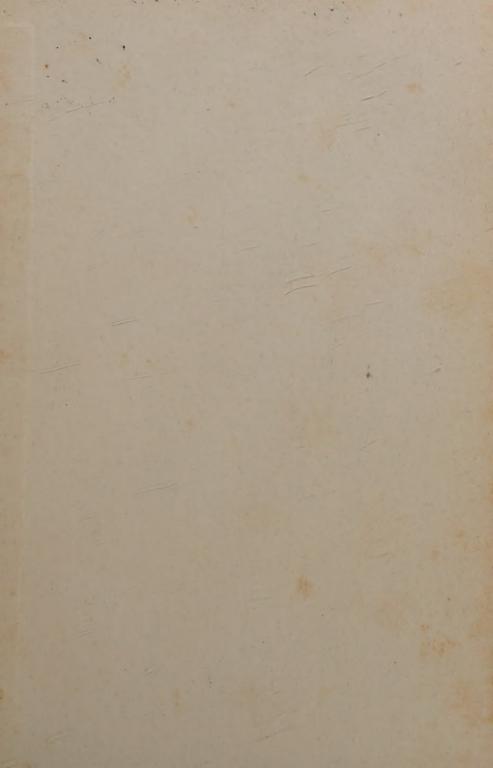


PQ 4322 J3 A11 1917 v.2 GTU Storage AAN amilanta, 918 mu at Miller Cal.



テンダー

篇試煉

譯樹昌山中
版堂陽洛





あっ を求めんか、 2 烈莊美なる英雄的戰闘詩である。 たのは即 りも巡禮といふよりも質に戰士である。 K 楠 E. 曲 たからである。 ス 煉獄篇を讀み終るものはないであらう。 0 地 獄篙が人類罪惡の奥底を窮めし畏怖戰慄すべき劇詩であるやうに、 ちてゝである。 「基督の模倣」 それ は煉獄篇ならん」と云ったやうに、 ダン と共に神曲の一曲を靈的修養の日讀祈禱書とせよと云つたのも此煉獄 ラが自由意志を翳して歩一歩淨罪山の嶮峻を踏破し行く姿は詩人と云ふよ ディン・スタンレ カライルがダンテには一種 かの人道教の開祖アウギュスト・コ イが 何人も意志の威力に對する確 「余の嘗て讀みし書のうち最も宗教 military な音調があると云 煉獄篇は L トが 信を増すてとな 人間 1 的 意 志 0

ない。 テは煉 をらぬ。 21 工 デ 獄を地下より救ひ、これを碧空に聳ゆる淨罪山となして地獄の正反對面に屹立せしめ、絕頂 1 ス・アク*ナス乃至ボナビントゥラの教義にあつては煉獄は殆んど何等の道徳的意義を有して それは方に道徳的體操場(moral gymnasium)である。傲慢者はその傲慢性を全然屈伏せしむ 煉獄は地 の樂園 を置いて天に接觸せしむ。 獄に隣りして、地獄の亡靈を苛責する火は即ち煉獄の靈魂を淨罪する。 ダンテにとりては煉獄はたい受働的に 刑罰に服 する處で

PQ4322.J3 All 1917 V.Z

術に渾 ず、 拉 術的感激のうちに酷烈悲壯なる道徳的戰鬪をすることが能含るのである。 する莊麗なる行列、 3 天使が船に乗じて來たり、淨罪の靈魂を渚に運べば、諸靈一齊に「イスラエ 甸 > 傲 童貞マリア 0 慢の 聖歌 一融合せしめられたことがなかった。 範例を踏みつく傲慢者が岩石を負ふて行く狀、 を誦唱するあたり、 の聖歌 ~ アトッリチェの降下等、 を誦唱する處、 また山腹の純白な大理石に刻まる、謙虚の範例を見、 殊に淨罪山の絕頂なる地上樂園の叙景、 我等は玆に始めて凡そ人類の抱きうる至聖至美なる藝 未だ嘗て斯くまで峻嚴なる道徳の 或は邪淫者が火中に接吻し合ひて止まら ルの民エヂ 斯くまで瑰麗なる藝 教會と帝國とを表象 プトをいで」の 路の上に刻ま

九一七年一月二十二日

譯

獄篇の美は彫刻に天國篇の美は音樂に而して煉獄篇の美は繪畵に比へられる。 煉獄篇はその道徳的思想に於て斯くも崇高なると共にその藝術に於ては又華麗を極めてゐる。 朝霧を破って白衣の 地

り神

の幻影に接する自覺と確信を獲た。

1)

チェの前に

眞の懺

悔の涙を流し、レエ

テ及びエウノエ

の清流に清められ力づけられ、途に天に昇

目

第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第
+	+	九	八	七	六	五	四	=		
曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲
同 上	石を背負へる傲慢の徒	天使ダンテの額に七罪の印を刻む	緑衣の天使蛇を驅逐す	信仰を蔑せし王者達の谿	同上、ダンテ故國を慨嘆す	横死せし改悔遷延の徒	蹲踞せる改悔遷延の徒	流浪せる教會忌諱の徒	白衣の天使淨罪の靈魂を運ぶ	ダンテ碧空に淨罪山を仰ぐ
2	ブレ	之	屯	六	光	in O	=	0	=	11



ダノテク (E) と う (記)	第三十三山
教會と帝國の表象	第三十二曲
ダンテの懺悔	第三十一曲
ベアトゥリチェ天より降る	第三十曲
神巌莊美なる天來の行列	第二十九曲
地上樂園に到りてマテルダと語る	第二十八山
火焰を胃して地上樂園に向かふ	第二十七曲
邪淫の二種類	第二十六曲
靈體論、 灼熱中の邪淫の徒 ····································	第二十五曲

十三曲 鐵線に瞼を縫ふ嫉妬の徒													
慢の範例路上に刻まる	干四四	第二十三曲		十	_ +	すり	十八八	十七七	十大	士五	十四四	+ =	
	£	悴枯槁せる饕食の徒	タッィオ改心の次第を物語る	聖スタッィオの出現	上、淨罪山の	に俯伏せる貪婪	驅せる懶惰の	ルヂリオの罪惡論	霧に鎖さるト忿怒の	妬を論じつく忿怒淨罪地に登	靈人民の墮落	線に瞼を縫ふ嫉	上に刻ま

煉

獄

篇

挿

ベアトゥリチェとダンテ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	エデンの樂園	坐母受胎告示	エステルとアハシュエロス王	戸殿に於ける十二歳の基督 ──	而伯來の處女ユディトゥ	自天使ミカエルと魔王	耐篇者ダビデ王	カイザルの物はカイザルに」	F ダムとエザ····································
ベアトゥリチュとダンテ・ ボッティチェルリ・三七	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	アンドゥレア・デルラ・ロッピア宝五	ス王 コ イ ペ ル一室	竹 デュ レ ル一回れ	7.4		ツ		
ルッティチェ エ	ベン	ラ・ロッド	オペ	v	17	ノファエル	アムピエ	イツィア	キ
ツリーニー	ルベンス言七	ピア・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	ル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	ル 四九	y … 五	п 	ツァムピエリ九六	ティツィア ノ	才卷则

第一 曲

己が後に斯くも酷き海を殘し 今やわが天才の小艇は帆を舉げ 幸まさる水を駛せんとて

人の靈の潔められて

天に昇るに足るものとなる

第二の王國を私は歌はんとする。

されどおう聖さムウゼよ、我は

また玆にカルリオペを暫し起こし 汝等の者なれば、死せる詩才を再び玆に起こし

10かの惨ましきピケが强き打撃を

身に覺えて容赦の望みを

失ひしといふ響きをわが歌の伴奏とせよ。

わが限と胸とを悲しましめし

造にくだり、露に顔を洗ひ、謙虚の印たる蘆を腰に帶ぶ。 星を見る。やがて白髪長髯のカトネの立てるを見、彼の命によりて ダンテ復活日の曉に地獄をいて、遙かに碧空を仰ぎ、南極に**四つの**

2地獄: 'Currere aequora' (酷き水)ギルデリオ。 1 南半球の海上。 地獄を去りやがて天國に昇る階段 40 といへるなり。この起何と天國篇二の七とな對照也 たる燥然浮那山に一歩々々近づくゆるに「幸まさる」

京康献:

4 詩音樂の藝術の九女神。 地、二の七註。

5 死の王國即ち地獄を歌ひし詩才。

Cムウゼのひとりにして叙事詩の摩美しき女神。

7マチェドニアのエマティアの王ピエリウスの九人の 下の彼等がピケと呼ばる」は生地ヒエリアに因る。 れたりつオギディオ「メタモルフォシ」五の二九三以 はムウゼと音樂の争ひをなせしため鵲に變ぜしめら 王彼等にムウゼ九女神の名を與へたり。彼等

はれて天國に向かる。 獄に二日、 共督復活の聖日曜日に煉獄淨罪山の麓に着き、前煉獄に となり、 園あり。 順次下より上に淨罪さる。頂上に嘗てアダムとエザの住 臺地七個あり。傲慢、 に聳ゆる一の高さ山なり。教會の忌諱に觸れ、改悔を遷延せし者等 の罰せらるゝ前煉獄を過ぎて本煉獄に入れば山を繞りて環狀をなす 煉獄 は全面海なる南半球の中央にありて聖都エルテレムの裏蹠點 前煉獄と本煉獄の七臺地と地上樂園とを合すれば九區劃 方に地獄の九環と天國の九圏に照應す。 地上 樂園に一日、 嫉妬、忿怒、懶惰、貪婪、饕食、邪淫の七罪 合計四日を費し、後ベアトッリチ、に伴 千三百年四月十日 日、 みし地 本 煉 上樂

子の父に拂ふにも優つて

彼は長く又その髻とちなじく 獨り私の近くにゐるのを見た。

四つの聖き光の光線は彼の顔を二すぢとなつて胸に垂れてゐた。

白い髪のまじる髯をたくはへ

前にあるかのやうに私は彼を見た。

「盲目の流に並ひ永遠の獄より のかなる羽毛を動かして彼は云つた

逃れて來た汝等は誰か。

誰が汝等を導いたのか。又は誰が燈となって

中ティカの小カトネ(カト)。 前九五年に生る。ストア派の大家にしてファルサリアの敗戦後チェザレトア派の大家にしてファルサリアの敗戦後チェザレトア派の大家にしてファルサリアの敗戦後チェザレトア派の大家にしてファルサリアの敗戦後チェザレーにある Secretosque pios, his dantem jura たし、靈魂不滅を論ずるプラトネ(プラトオン)のたし、靈魂不滅を論ずるプラトネ(プラトオン)のたし、靈魂不滅を論ずるで自己でした。」、解して、正然の警護者とせしは「エネアの歌」八の六カトネを煉獄の警護者とせしは「エネアの歌」八の六カトネを煉獄の警護者とせしは「エネアの歌」八の六カトネを煉獄の警護者とせしは「エネアの歌」八の六カトネを煉獄の警護者とせしは「エネアの歌」八の六カトネを煉獄の警護者とせしば「エネアの歌」八の六カトネを煉獄の大家にしてファルサリアの敗戦後チェザレトア派の大家にしてファルサリアの敗戦後チェザレートア派の大家にしてファルサリアの敗戦後チェザレートア派の大家にしてファルサリアの敗戦後チェザレートア派の大家にしている。

16

知らる 流。 知らる 流の 限にては分からず響きによって

遠く第一環にまでも澄む中天の朗かな面に聚積して中天の朗かな面に聚積して

東方碧玉の甘美な色が 東方碧玉の甘美な色が しが眼に喜悦を再び始めた。

0

本 > 寡婦となりし北方の地よ 本 > 寡婦となりし北方の地よ 本 > 寡婦となりし北方の地よ

これらの星を汝見るを得ざれば。

彼等を觀ることをやめて

異本、「澄める空の」(dell'aer puro)。

り地平線。 或は最高天とも月天とも解せらる。

1年分には呈す、大四の明星たる金星。

11 春分に金星は、太陽の位する白羊宮の直ぐ前なる雙魚宮にあり。故に今は四月十日復活日の日の出前約一時間の頃なり。一三〇〇年に金星は實際雙魚宮にあらざりしも天地創造の際とゝにありしとの傳説にそれてダンテは斯く云へるなるべしと。

13 この四星はダンテの創意によるものなりや故は航海者より聞きしものなりや将またトレムメオの天文學より識りしものか不明なるが、何れにしても四元徳民」とはアダモ(アダム)とエザのことならん。南半球は「人なき世界」なりき(地・二六の一一六)。これには超細距も距離和加も全部北学球にありて南半球はは四元徳度たま黄金時代にのみ見られたりとの意味ならん。活動的四元徳を見るためにダンテは右に向けの(三面)の四星はダンテの創意によるものなりや故は航海ならん。活動的四元徳を見るためにダンテは右に向けの一十六)。

合

歸るにいと些かな時しかなかった。

彼のもとに俺は遣され、俺が自ら 既に云つたやうに、彼を救ふため

辿り來たこの道のほかに道がなかつた。 俺は罪ある民を凡て彼に見せた。

そこで今俺は汝の警護のもとに

自らを潔める諸靈を彼に示さうと志す。 かに俺が彼を率ねたか、汝に語るには

長くあらう。高さより力が降り

俺を扶けて彼を導き汝を見汝に聽かしめる。

さのされば汝彼の到來を嘉みせよ。

良くそのため生命を拒む人だ知る。 彼は自由を探りゆく。その尊さは

汝はこれを知る。蓋しそのためい

21帝政論二の五0

20地獄篇第一曲参照

5

汝等は地獄の谷を永久に

かくして深淵の掟が破られたのか。

それとも天にて新しい企てが事を變へ

そこでわが道者は言葉と手と

汝等は罰せられながらわが巖窟に來たのか。

西 相圖とにより私を捉へ

わが脛と眉とを悲しからしめ

ひとりの貴女が天より降り、その求めによつてかくて彼に答へた「俺自ら來たのでない。

俺はこの者の伴侶となつて扶ける。

うち披くことが汝の意であるゆゑ然し真實あるがまゝに尚も

これを汝に拒むは斷じて俺の意でないっ

18ペアトッリチェの地、二の五三以下の

19或は「この次第の異なることか」

咨 彼女は既早や俺を動かさない そこから俺が出て來た時に受けか掟。より

汝を動かし支へるとせば、諂ふに及ばず しかし汝の云ふごとく、天の貴女が

されば行つて良くこの者に

宜しく汝は彼女によって俺に願へば足る。

滑かな蘆を帶びし、また彼の顔を

洗って一切の汚れをこれより消せ。 蓋し天國の司達のうちなる第一の

司の前に、眼を少しの霧にだに

覆はれて行くべきでない。

100 ての小さき島をめぐつて低く低く

蘆が軟き泥のうへに生える。 彼方波うの下のところに

他の葉を生じ又は堅くなる

31教はれし者は天上の愛情のほかに心な動かされず。 二の九三註っ

32 謙虚の妄念。

33本煉獄の入口にゐる天使。

輝くべき衣をウティカに汝は脱ぎ棄てた。死も汝に苦からず、大なる日にいたく

永遠の定が我等のために荒らされたのでない。

顔にあらはして今なほ汝に祈る汝がマルツィアのおゝ聖き胸よ、俺は汝のものとして汝の抱かんことを

)、貞潔な眼のある環のものである。

われらに汝の七王國を廻りゆかしめよ。されば彼女の愛ゆゑに汝を我等に傾けよ。

もし下の彼方に語るを許せば

すると彼は云つた「俺が彼方にゐた間汝の惠みを俺は彼女に齎らさう」。

マルッパアはいたくわが眼を悦ばし

今や彼女は禍の流の彼方に住むので彼女の俺に願ふものを悉く俺は果たした。

23地、五の四以下の即ち自殺せりの即ち自殺せりの

28 東第四の五。 sucralissimo petto(いと聖き胸)。
25 ウティカのカトネの後妻(地、四の一二八)。カトネは三子を生みし後彼女を友人オルテンシオ(ホルテンシカス)に譲りしが、その死後彼女は再びカトネと婚せり。饗宴篇四の二八にダンテはこれを高貴なる驚魂っ神に歸る朕になぞら(たり。
27 煉獄淨罪山の七豪地。

yo 以下做之っ り。以下做之っ

30アケロンテン、地、三の七一以下の

徒らに行くと自らおもふ人のやろに

〒10 我等は淋しい野を越えて進んだ。

あったため薄れゆく間も

わが師は兩手を若草の

そこで彼の技を識って私は

5~

に柔らかにひろげた。

涙に汚れた頰を彼の方に差しのべた。

私の色を、全く露はにした。

見たことなき荒れた岸邊に來た。 よく後に歸り得た人を

てゝに彼は『彼』の意に從って私に帶した。

37ダンテは地獄にては縄を帶び(地、一六の一〇六)、36神、或はカトネ。

煉獄にては蘆を帶ぶ。九十五行を見よ。

在物は、打たれて靡かぬゆる

その後汝等の歸りは此方でなく

なほ容易かに上る道を示し辿らすであらう」。いまし昇る太陽が汝等に山を

110身を起てし、全くわが導者に

かくて彼は消えうせた。私は物云はずに

ての野は此方へとその低い際へ 彼は始めた「子よ、わが歩みに從へ

曉は前に逃げる朝の をだるゆゑ、我等を振り返へらしめよ」。

時に膨ら、かくて遙かに

失はれた途に歸りくるまでは

34ダンテは山の北方を東より四へとめぐり登る。

35's; lendet tremulo sub lumino pontus' (海波の顫

ルサレムメを蔽ふ地平線に 子午線の環のその最も高き點にて

既に太陽は達してゐた。

T

またこれに對ってめぐる夜は

伴ふてガンデーより出てゐた。 己の優さる時手より落ちる「天秤」を

かく私のゐた處には

美しきアウロラの白く朱き顔は いるでで、 という になってるた。

たのが道をあるひて心は行きつい 體は佇ずむ民のごとく

70

すると見よ、朝が近づくや 我等は尚も海のほとりにゐた。

> 山に登るべき鎭魂渚に下りて聖歌をうたふ。諸靈そのうちの一人な紅の朝霧を破つて一隻の船自衣の天使に導かれて來たる。煉獄淨罪 るカセルラの戀歌に聞き惚れをりしが、カトネの叱責に山へと急ぐ。

1 エルサレムを頂點とし西班牙と印度(恒河) とする地平線。 地。こ〇の一二五誌の

2夜とは太陽の正反對點なり。 地 二四の三の

3夜が長くなり始むる時即ち秋分以後「天秤宮」は謂は 用なりとなり。 れば夜は天秤宮にあるなり。以上の六行の意味は、 エルサレムは日没、 ど夜の手より落ち、太陽これに入る。然し今は春な 恒河(印度)は中夜、煉獄は日の

▲曉の女神○ 彼女は米明におのが情人ティトネの寢 床より起きいで験馬の曳く車に乗じてオチェアノの 九の一参照の 河より天に昇り、太陽の光の來たることを告示す。

5 vermilio. 元涨は朱のことにして現今の紅に等し。

忽ちまたもや生えいでんとは。 摘むや、彼の抜きしところに った。

38 'Primo avulso non deffeit alter' [エネア]の歌六 でることによつて減

見よ、神の天使を、 合掌せよ

3 この後汝は斯かる仕者等を見る。 見よ、いかに彼が人間の手段を蔑みし

権をもまた帆をもねがはない。

かく距たる兩岸の間、むのが翼のほか

見よ、いかに彼が翼を天の方に向け

人間の毛のごとくに變はることなき

永遠の初に空氣をひき寄せるかをし。 やがていよー〜我等の方に來るや

ますく一神の鳥は輝いて見えた。

私はこれを垂れた。彼は又小舟を率ゐて そこで眼は近く彼に堪 いへ得す

岸に來た。

舟は迅く軽くして

水は少しもこれを吞虫なかった。 天來の渡守は艫に立ちて

9船に乗れるは靈魂のみなる故に水中に船は沈まず。

r argomento. または器具の意。 拉句語の argumentum にして機械

8天使0

濃さ水蒸氣を貫いて火星が

海面のうへに低く西に赤らむやうに。

一の光が海を越えていと迅く私に來たり

(願くは再びこれを見得んことを)

いかなる飛躍もその進みに傷ぶべくもなかった。

わが導者に訊ねやうとして暫し

一の眼をそれより引いたが

その輝きと大さとを優したのを再び見た。

やがてその兩側に何とも

知れぬ白いものが見え、また一つ

その下より徐ろに出た。

初めの白きものが翼として現れたまで

わが師はなほも物を云はなかつた。

やがて良く艪手をみとめて

彼は叫んだ「いざ、いざ膝をかいめよ

く或は弱く燃やされて見ゆ」饗宴篇□の一四。
6「彼(火星)は彼に從ふ水蒸氣の濃淡に準じて或は點

我等に云った「汝等もし知りをらば

さ

汝等とおなじく我等は巡禮である。 我等が識つてゐると汝等はおもよが 我等が識つてゐると汝等はおもよが

汝等より少しささに我等は他の道より

比べては、此後の登りは我等に戯れと見える」。今し來たばかりにて、その凄く峻しかつたに

なほ私の活きをるを悟り 諸の魂はわが呼吸によって

ものまた報知を聞かんとて民が愕いて蒼白になつた。

凡て幸運の魂等は悉く私の貌を眴めて何人も踏みあふて臆しないやうに椒攬を携ふ使者に壓し寄せ

14 perigrino. 或は他國人。「新生」四一の註參照。

ダンテは他の道即ち地獄を通りてとるに來たれり。15鐶魂はアエレ何日より船に乗じて煉獄に來たるに、

16地、二三の八八。

祝福身にしるさるると見え10

Tn exitu Israel de Aegyptoと
この詩篇の後にしるされるものを
...

吾 そこで彼等は背身を潜に投げ

やがて彼は聖さ十字の印を彼等にした。

彼はまた來た時のごとく迅く去って行った。

探る人のやうに周圍を眺めた。慣れぬと見え、目新しきものを

灼く箭にて「磨鍋」を

到る處に日を射放つ時に中天より逐ふた太陽が

新しき民は我等の方に額をあげて

10異本「記されしのみにて人を説漏する」(faria teato)の異本「記されしのみにて人を説漏する」(faria teato)の

13 教會の忌諱に觸れこれを僻かれずして死せる人々のり。 即ちこゝにては日の出のこと。り。 即ちこゝにては日の出のこと。

汝を愛したやうに、此より解かれても汝を愛する。

私は云った「わがカセュラよ、私は此旅をするがされば俺は止まる。然し汝は何の爲に行くのか」で

然し斯く長き時が汝より奪はれたのは何故ぞ」。他日また今私のゐるこの處に歸る。

選ぶものが此徑に尚も屢俺を拒んだとてもすると彼は私に「意のまゝに時と人とを

げに三月の間彼は入らんと願ふ者を 蓋し彼は義しき意志を己が意志とする。

全く安らかに取り入れた。

TOO そこでテェレ河の水の鹹くなる處に

今し向かった俺が

アケロンテさして下らの人々が 慈悲ぶかく彼に刈り入れられた。

19 既に死して久しくなるに漸く今頃こゝに着きしは何はスカルセルランデ・フロレンティアなるもの夜(或はスカルセルランデ・フロレンティアなるもの夜(或はスカルセルランデ・フロレンティアなるもの夜(すた十三世紀の終りに住みしレムモ・ダ・ピストイアの詩に Casalla diede li sono (カセルラ作曲)と録さる」ものプティカノ 圖書館にあり。と録さる」ものプティカノ 圖書館にあり。

20 茂ぞ。、

21神の意志。 然しダンテは延引の動機如何の説明を

23教會の坐所たる羅馬への門戶たるテゴレ河口。 数十分にいます ではし、二九九年の基督降誕館より向かふ一ケ年間の大會式の特別赦罪には死者もその特典に預り得しと見ゆ。地一八の二八註。

24地獄の河。 地三の七一。

濟はたぐ教會にありとの教義を示す。

宛ら自らを美しくしに行くを にれるもののやうであつた。 そのうちの一人が前に出て なと大なる愛情に私を抱いたので 私も動かされて同じく彼を抱いた。 もゝ姿に過ぎざる虚しき影よ。 私は手を三たび彼の後に結ばうとして

증

17 潜白に0

愕さにわが身を彩ったこととももふ。

1

彼は私に答へた「死すべき體にあつて

私と語るため暫く止まるやうに彼に求めた。

そこで私は彼が誰であるかを知つたので

柔しく彼は私に停まれと云つた。

私は彼に從ふて身を前に突き出した。

そこで影はほうえんで退さ

1三0 叫んだ「これは何ごとぞ、緩き靈どもよ心をとめた。すると見よ儼かな老人が

これは何たる怠慢、何たる佇立ぞ。

痂を剝ぎに山へ走れ」。 汝等に神を見せざらしめる

常の誇りがな外飾もせずに穀物や莠とあつめる時

鳩が静かに食物に集まりをるが

恐るべきものが現れんか

忽ち餌を残し置くやうに優る配盧に襲はれて

1三0 新たな一隊は歌をやめて

恰も歩みつく脱けいづべき處を

我等も劣らず速かに立ち去つた。

20「新生」110

28 scoglio. 蛇の脱殻

29 或は、

穗。

常に鎮めた戀の歌の記憶と慣ひとをいま彼はその河口へと翼をむけた」。

110 てゝに來たり、かくも患むわが魂を

Amor che nella mente mi ragiona とその時いかにも甘美に彼は始め

いと滿足げに見え、他のことが

我等は皆踏みといまつて彼の節に 何人の心にも觸れぬほどであった。

25煉獄にて受くる。

新たな掟が汝より奪はぬならば

26「心のうちに我と語らふ戀」。「饗宴篇三の短詩の起

聳える小山へわが顔をむけた。

うしろに赤く燃えてゐた太陽は

進られて私の像を作つた。 私の前に破られ、 その光線は

見た時、 棄てられたのかと

10

わが前に

のみ地の暗くなったのを

するとわが「慰藉」は全く振り返って 恐れて私は身を側にむけた。

私に語り始めた「何ゆゑ尚も不信なのか。

俺が汝と共にゐて汝を導くとを汝は信じないのか

俺が影を作った肉體

埋められる彼方は既に夕である。

今わが前に影が少しもないとても ナポリが此を保つ。プランディツィオより移なかある」

P.rtbenope; cecini Pascua, 10ra, duces,—

Mantua me genuit, Carabri rapuere, tenet

nunc

我を保つ。我は牧歌農歌「エネアの歌」を遣けりの マントが我を生み。カラブリア我を殿ち、今ナボリ 6天、二六の一四〇0

8 ギルヂリオロ 7 ボルデリオは霊體なる故に太陽の光線を遮らず、從 のみを見てギルデリオ法りしならんと思ひしなりの つて影を投ずるととなし。ダンテ地上にたい己の影

出)は正反對地點なるエルサレムの日後なり。而しりvespero(午後三時一六時)。 煉獄の午前六時(日の てエルサレムより西方四十五度にありと考へられし 伊太利亞は午後三時なり。

10 傳説によればヸルヂリオの墳墓はナポリ灣を瞰下す はと、に死せり。 Suctonius によれば古碑に左の銘 て前一九年九月二十六日希臘よりの帰除ヸルヂリオ 希臘及び東方諸國に向かつて乗船する古代の港にし りと。七の六。プランディツィオ (Brundusium)は て彼の遺骸はプランディツィオより此虚に移された るパウシリッポ卵にあり。 アウグスト帝の命により

21

第二曲

理性の我等を追ひたてる。

III

へと振りかへつたので

被なしにいかで私は馳せ得やうぞ。 私は賴もしき伴侶に身を寄せた。

彼は自ら悶えをるやうに私に見えた。誰が私を山の上に曳きあげ得やうど。

なく崇高のも清き良心よ。

凡ての擧動より床しさを奪る躁急を小さき過もいかに苦く汝を噛むことぞ。

彼の足が棄てた時

0

恰も慕ひねがふでとくはを豁くしる

おのが戦死の模様を語り、娘コスタンツァの祈禱をねがふっ世を去りし魂の群の遺迹に遇ふっその中美日秀麗のマンフレディ王ダンテ爨體の神秘を語らひつょ山の麓に到り、教會の忌諱に觸れて

1二一の六四と對照せよ。

2ギルデリオ0

チリオは自らの怠慢を叱責せしなり。 されど

4躁急は威嚴を損ふの

5カセルラの歌またばカトネの叱責に緊張しを**りし**

人々のことをいふ」。かくて弦に

額を垂れて又語らず、彼は惑ふてゐた。

てゝに巖のいと嶮しく

脛迅くも益なさを我等は見た。

50 いと淋しき道も、これに比べてはいたく荒れたレリチとトゥルビアの間の

易くして開かれた階である。

ての崖がいづれの手の方にくだるかを「翼なしに行く者の上り得るやう

誰か知るか」と足を止めてわが師が云つた。

かくて彼は顔を垂れて

左手に魂の一群が現れて 場の周圍を仰ぎ見てゐた間に いている。私はまた。

19 ギルヂリオは自らの悲しき選命即ちリムポに止まる

20レリチは地中海に濱してスペッツィア灣の古におりし古城。 トゥルピアはモナコに近き一村。この兩地の間は海に臨めるリグリアの地にして鹼しく海岸に傾斜しダンテ時代には道路あらざりしと。異本、いたく碎かれし脳響(pià retta ruina)。

公教會の忌諱に觸れてそのま」世を去りし魂の一群の

いづれの光線も互に妨げない

諸天とひとしく此を怪しむなかれ。

3

その働く狀を我等に露はさうとしない。 『力』は斯くのごとき體を與へたが

三位一體の含む無窮の道を

われらの理性が越えらると

望むものは狂人である。

人類よ、quia に滿足せよ

蓋し汝等一切を観じうるとせば

悲嘆として與へられたその願望のかくてはまた望みて果を得ない人々に

問

俺はアリストテレ、プラト、そ他多くの 鎮められるを汝は見たであらう。

11 當時の天文學によれば九天は透明なる環にして光を

12神

人智には識り得ず。 この神秘は三位一體の神秘のごとく 最繁冱寒を感じうる一種の この神秘は三位一體の神秘のごとく 暑繁冱寒を感じうる一種の 一番 はいかい かんぎ

14 アリストテレスは智識を二分して sciro quia 即ち事物ありのまムの智識と scire proter quia 即も事でその理由如何を聞ふ勿れとなり。 この一行の意味はかんる不思議なる體の存在を事實として受け容れずでその理由如何を聞ふ勿れとなり。

に活」く。地、四の四二。 は等は「希望なく顧望のうち

18 プラトオン0

なく既に選ばれし諸靈よ、汝等凡てが

俟つとわが信ずる平安によって

告げよ、攀ぢ登りうるやう

山の傾くはいづこぞ

蓋し時を失ふは智者のいよく好まぬ處である」。

たとへば一疋二疋三疋々で羊が

24 「蓋し我等の悲哀は凡て……時の用法を知らざるよ り出づ」饗宴篇四の二。

檻から出て、他のものらは また初めの者のすることを他の者等もなし 限と鼻端を地につけて怯え立ち 彼が止まればてれにのしかゝり

愚鈍に静せってその故を知らぬやうに

その時での幸運な群の頭が

顔恭しく歩みおごそかに

進みくるのを私は見た。 わが右側の地に光が破られ

> 25 「嘗て私は多くの羊が池に飛び込むのを見たっ らてあった」饗宴篇一の一一。 れ一疋恐らく障壁を越える積りで先づ飛び込んだか

足をわれらの方に進めたが

*O 歩みいと綴うして動くとも見えなかった。

私は師に云った「汝の眼をあげよ

汝もし自ら爲し得ずば

見よ、我等に教へ得る者が此方にゐるであらう」。

また汝、愛しい子よ、望みを堅うせよ」「彼等の歩みが緩きゆゑ、我等は彼處に行かう。彼等を看、安んじた氣色して彼は答へた

げに我等が千歩した後

省もこの人民が善き 投手が手にて

投げてといく程遠くにゐた時

惑いつゝ行く人の止まつて眺めるやうに彼等は一齊に高い堤の堅い岩塊に

ザルデリオは始めた「おく終極善さもの踏みととまつて寄り添ふた。

23 煉獄の道は常に右方に進む。 これ善に於ける進步の表象だり。然るにヸルヂリオとダンテとはこれにしなり。地獄にては悪より悪に進む表象として左方しなり。然るにヸルヂリオとダンテとはこれに

かく歩みながら顔をむけ

彼方にて俺を嘗て見たか否やを思へ」。

彼は金髪青眼にて美しく容は優しかつたが身を彼の方にむけて私は恥めた。

打撲が一つ眉の片方を裂いてゐた。

彼を見たことがないと謙虚つて私が

胸の頂にある一の傷を私に示した。

云つた時、「されば見よ」と云つて彼は

皇后コスタンツァの孫マンフレデュである。かくて微笑みつゝ彼は云つた「俺は

響の生母なるわが美しき娘のも、に行きされば汝が歸った時、シチリアとアラゴナの

もし他に語ることがあれば

彼女にこの真を語るやう汝に求める。

俺の身が二つの致命の刺傷に

材たるに過ぎず。 23致命的傷も敵人に對する忿怒も今はたゞ一片微笑の27 Hon J. 白而金髮青眼。 八の三四。

30コスタンツァの彼女は一二六二年アラゴナのピエトウ

口第三世の妻となれり。その子アルフォンソはアラ

ゴナの王、ジャコモはシチリアの王またアラゴナの

前にゐたものらが見るやかくて私より影が岩にさしをるを

かとよら來たものらも皆かとなって彼等は稍身を後にひされる。 前にゐたものらが見るや

「訊ねねざさに俺は汝等に告白する。何ゆゑかは知らずに同じく退いた。

これを怪しむことなく、彼が

天來の力によらでこの城壁を

100かく師が云つた。するとこの尊ら民は越えやうと努むるにあらざるを思へ」。

手の甲にて記號をして云つた

またその一人が始めた「汝何人にもせよ

「永遠の愛」は全く失はれはしない。

聖き教會に遊いて死れるものは

たとへ臨終に悔改めるとも

180 凡て三十倍を、外のこの堤に縮められぬかぎり、その不遜なりし時の

されば今汝の見たわが狀と更に止まるべしといふは真である。

この禁制のことをわが善きコスタンツでに

蓋して、に我等は彼方の者等より獲るとが多い。

35 法王乃至僧正の。

36 前媒獄。 聖さ教會の忌諱に觸れて世を表りしものは木煉獄に入る前に先づ其期間の三十倍を前娘獄に

37本煉獄に直ちに入るべからずとの0

多減ずる効ありとはダンテの獨創と見ゆ。

破られた後、喜びて赦したまふ神に

110 泣きながら俺は身を委ねた。

わが罪は怕るべきものであつたが

己に歸るものを凡て容れたまふ。

然し「無限の善」の腕はいとも大にして

クレメンテに遣されて俺を逐ふた

コセンツァの牧者が、その時もし神にあって

この一枚をよく讀み得たならば

俺の體の骨はベネヹントに近さ

橋の袂にいま尚ほ

今や雨が骨を洗ひ、また風が王國の外重い石塚の葢の下にあつたであらう。

消えし燈を携へてこれを彼が

望みが一朶の緑だにつなげば移したヹルデ河畔に散らす。

32「彼もし親てその行ひし諸書一八の二八。

33ナポリ王崎。

84 破門者の葬式には火を結ぜられざる蠟燭を倒にして

私はこれを識らず、やがて諸の靈が即ち太陽が五十度を昇りつめてゐたのに

一齊に「汝の訊ねるのは此處である」と

しばく寒く開き口も

一隊が我等を去つた時

のぼった隙間よりは大きい。

サンレオに行き、またノリに下り

ビスマントザの頂の上にのぼるは

即ち私に望みを與へて光となりした。足に據る。しかし此處にては人は

3太陽は一時間に十五度進む。 故に五十度を昇るには三時間と二十分を要す。日の田を六時とすれば今

4三の七六、七〇

5 秋 0

の 知らるゝ巨大なる半圓形の嚴今尚殘存せり。 を おりて接近し離かりき。 Pietra (it Bismantova (ビスマントプの嚴) として Pietra (it Bismantova (ビスマントプの嚴) として として があるゝ巨大なる半圓形の嚴今尚殘存せり。 知らるゝ巨大なる半圓形の嚴今尚殘存せり。

臨終まで懺悔を遷延せし由を物語る。に蹲踞る。そつうちの一人ベラックッ 物倦しげにダンテと語らひ、ダンテいよ (~淨罪山の險峻を攀ぢて臺地に着く。怠慢の諸鸞岩隆

快樂により、または苦痛により

もはや何の能にも心をとめぬと見える。

これは我等の裏に魂が魂のうへに

燃やされると信ずる誤にたがふ。

されば魂を强く己に向けしめ置くものを

聴き又は見る時

即ち聽くは別の能であり
はないを識らずにゐる。

總べおくはまた別の能である。

0

此は謂はど縛られ彼は弛められる。

私はこの靈に聽いて愕さ

1プラトネ(プラトオン)の謬説。 彼は人間に三つの異ないる震魂のり即ちずラトオンの説は誤りなりの異ないる震魂のしつに心を注ぎらる筈なるに事質は然らずして、一官能に心を注ぎらる筈なるに事質は然らずして、一官能に心を注ぎらる筈なるに事質は然らずして、一官能に心を注ぎらる筈なるに事質は然らずして、一官能に心を注ぎらる筈なるに事質は然らずして、一官能にあるとの。

2「且つ音樂は、日に人の諸の靈をひきつけ、靈は謂はと眺せたの靈の力は響きを受ける感覺の靈に謂はと眺せたのの靈の力は響きを受ける感覺の靈に謂はと眺せたの情が表現の本うになつて殆んど凡ての作用といい。

「おゝ慕はしき父よ、汝止まらねば

ひとり私の殘されるを振返つて見よ」。

この小山をその側に汎くめぐる少し上の「わが子よ、そこまで身をひけよ」と彼は

断崖を私に指ざして云つた。

身を押して彼の後より摑みあがり彼の言葉にいたく勵まされて私は

惠

つひに環道を脚下にした。

そこに我等二人は坐して、我等の

登つて來た東方に向いた。

蓋し川顧は常に人を歡ばす。

てれに左を打たれるを**愕いた。** やがて此を太陽に舉げて我等が

我等とアクサロネの間に入らうとする際の

12北、元來は北風のことなり。

りの三の八九の

10山を纏れるも臺地の一にして路盤の浮罪する處。

11 北半球にあつて東に面する人は太陽を右に見る。

三 大望の羽とにて飛ばねばならね。

端はいづれの側よりも我等に迫り 我等は裂けた岩をつたふて登り入ったが

下の地は足と手とを要した。

「わが師よ、何れの道を採るべきか」。高い堤の縁の上、うち開かれしてい場の縁の上、うち開かれし

すると彼は私に「汝の一歩をも降らさず

頂はいと高うして眺めを超えた。現れるまで專ら俺の後より山の上に進めよ」。ひとりの賢き護衞者が我等のために

崖はまた半四分圓の中心に向かる

5

やがて疲れて私は始めた。

9四分圓(九十度)の半分即5四十五度よりも鋭き傾り四分圓(九十度)の半分即5四十五度よりも鋭き傾

かの側を過ぐべきを汝は識るであらう」。
この側を過ぎ、同時にかの山の

缺ぐると見える處を、いま認めたやうに私は云つた「げにわが師よ、わが才の

即ち天の運行のうち、ある學術にてはかく明かに私は見たことがない。

冬の間にといまる中央の環は の 赤道と呼ばれて永久に太陽と

汝の云へる理により此處より出て

北方におよび、エブレイ人は 北方におよび、エブレイ人は

行くべき道程を私は知りたく思ふ。さて汝の意に適はい、我等の

すると彼は私に「初め下に常に嶮しく蓋し此小山は眼の攀ぢ難き程いや高く聳える」。

21 arte. アリストテレスのでfXビ7にして墨鸛の總稱

故に赤道を中央にとざまる環と云へるなり。 は夏なり。 即ち赤道を中央にして太陽は上下す。 22太陽が赤道を下る時は北半球は冬にして此を上る時

光の車にむかひ私が茫然として

30 30 異にして地上にあることを想像せよ。 立ちをるを詩人はよく認めた。 不幸にも馭す術知らざりし かくて汝の智性がよく明かに究めんか いづれも地平線を一にし半球を その譯いかんを思ひ得んと願はゞ 追ってめぐるを汝は見たであらう。 外づれねかぎり、熊星に尚 紅玉色の獸帶がその古き道を 傳へる鏡と伴なってゐたならば ていろを潜めてシオンがこの山と ボ そこで彼は私に「もしカストレと ルルチェとが上に下に己が光を कु

14

で、大型の中な易の重要でなく軍におう。 後までからで、大型の中な易の重要でなく軍におう。「上に下に光を傳へる」とは太陽が南北兩半球を交互に照らす意とも解せらる。 交互に照らす意とも解せらる。 交互に照らす意とも解せらる。

16 獣帶の中太陽の輝きて赤く輝く部分。 或は rubec-でhio. とはトスカナ語にては 鋸齒形の水 車のことにて獣帯の宮は謂はヾ歯車の輪齒のごときものなる故で獣帯の中太陽の輝きて赤く輝く部分。 或は rubec-

18シオン即ちエルサレムは正確に煉 獄の裏 蹠點にあしならんとなり。熊星とは北極のこと。しならんとなり。熊星とは北極のこと。

り。故に地平線は雨者に共通なりの

9 地、一七の一○六註。 ダンテはフェトンテの傳説の 地、一七の一○六註。 ダンテはフェトンテの傳説

フェトンテの途がこの山の

岩のうしろ蔭に人々が止まつてゐた。情けて身をといめる人のやうに

顔をその間に低く下げてゐた。 坐して膝をいだき

和は云つた「おゝ墓はしきわが主よ」のたとへ怠慢がその姊妹であるとしてもいると彼は我等に振りむいて心をとめずると彼は我等に振りむいて心をとめ

苦痛も私が彼のもとに行くを妨げなかつた。その時彼の唯であつたかを私は識つた。

かくて私が彼に達した時彼は頭を

上に人の行ほど禍をなすこと

20 少なしと云ふのがこの山である。 さればこの山がいと樂しく汝に見えて登ることが舟にて流れを下りゆくやうに

彼の言葉を語り終るやこの上答へぬが、この事の真を俺は知る」。

汝がこの徑の終りにある時である。

100 この響きに我等はいづれも振り向いて致はまづ坐せしめられるであらう」。

一大巖石を左手に見た。

その方へわれらは近寄ったが

至る。 / 空場の多力によりて容易たるに

25 a seconda. 銭は、順風にo

別は一般伊太利亞語にあるにあらず。 原の位置に向き返へることに用ひたり。但しての區とに、voigersiを後に振り向くことに、tornare をとに、voigersiを変に振り向くことに、tornare を

まづ俺を扶けぬかぎり

他の天に聴かれぬ前が何の益ぞ」。

云った「さらば來たれ。見ょ太陽は

詩人は既にわが前にのぼりつゝ

子午線に觸れ、海邊には既に夜が

34ダンテによればモロッコはエルサレムの夜半にしてモリっ 故に煉 獄の正 午はエルサレムの夜半にしてモ

との順音な話と泣い言葉とはより観音な話と泣い言葉とは見く見たか」。 この 左の肩の上を驅るを汝は良く見たか」。

をがて私は始めた「ベラック。よ、私は今より やがて私は始めた「ベラック。よ、私は今より 次のために哭かない。然してしに坐する譯を 私に告げよ。汝は護衞者を待つのか それとも只例の癖が又もや汝を捉へたのか」。

) 俺は善き嗟嘆を臨終まで延ばしたので俺を苦難へ入れないであらう。 蓋し門に坐する『神の鳥』は

生前めぐっただけ天が門外にて 生前めぐっただけ天が門外にて

恩寵に活きる心よりのぼる祈が

左方に太陽を見ることを訝りしを半ば嘲弄す。28 ギルデリオとダンテの會話を쌾み聞きし、ダンテが

29 ダンテと同時代のフィレンツェ人にして近代の研究はドゥッチオ・ディ・ボナギア・デット・ペラックッははドゥッチオ・ディ・ボナギア・デット・ペラックッはと絃琴その他の樂器の卓越せる製作者なりしが、然しまだ懶惰なる人なりき」ピアンキ。ダンテは香樂を好みし故彼を知りをりしならん。

31 煉獄の門を護る天使。 九の七六以下。

32 懺悔改心。

33改悔を遷延せし時日だけ前煉獄にて過ごすべきな

風に吹かれて頂を嘗て

動かさ以堅ら櫓のやうに立て。

蓋し衷に思ひが思ひの上に湧く時

人は常に目標を己よりはづす。

「私は行く」と云ふほか何と私は答へ得たであらうてれ一の思ひの勢ひが他の思ひを弱めるに據る」。

言かく私は云ひ、しばく人を

恕するに足らしめる色を少しく漲らした。

折柄崖を横切り

句一句 Miserere をうたひつ

民がわれらの前に來た。

私がわが體により光線を

通さしめなかったのを彼等が識った時

そしてその中の二人が使者の格にて

3 思ひより思ひへ氣を移す人は眼前の事物を明かに

4 赮類0

ものの彼等が前燥獄にて俟つべき時期の長さに就てものの彼等が前燥獄にて俟つべき時期の長さに就て

了或は、わが體を光線の通路たらしめなかったのを。

破られた光とを眴めをるを見た。 彼等が怪しんでたど私、 且つ彼は活ける者のやうに振舞よっ 左手に光線が照らすとも見えず ての言葉の響きに私は眼をかは ひとり叫んだ「見よ、下のものの うしろより私に指をむけつい わが導者の足跡を私が追ふてゐた時 諸の影より離れて既に たい私と

ことを述ぶったは一般を語り、シエナの貴女ピアは己が悲惨なる結婚の途でる開際に懺悔せし諸靈なり。ブラコンテは己が屍当につき天使遂ぐる開際に懺悔せし諸靈なり。ブラコンテは己が處当につき天使ダンテ次に詩篇を誦唱し來たる群に遇ふ。これ改作を蹇延し横死を

1ダンテは山を東より西へと登りゆく ○一の一〇八 の影を投す。 能)oさればこゝに太陽はダンテの右にありて左に彼

2地上の影。

10

師は云つた「何ゆゑに汝の心は

かく歩みを緩くするのか。

ていの囁きごとが汝に何ぞ。

わが後に來たり、

民には語らせ置け。

歩みつゝ耳を傾けよ」と詩人が云つた。

彼等は叫んで來た「汝有つて

暫し汝の歩みを靜かにせよ。生まれた肢體のまく幸福に赴く魂よ

そのものの消息を彼方に傳へよ。嘗て汝の見た者が我等の中にゐるかを見

吾

われらは皆嘗て暴力のために死にあゝ何故に行くか。あゝ何故に止まらぬか。

臨終の時まで罪人であつたが

その時天來の光が我等を反省させ

神を見んとの願望を心におこしかくて悔いて赦され

をこで私は「汝等の顔を眺めるが神と和いで世より出た」。

11 ギルデリオ。

12二の九〇。 遷延者は頗りに止まらんことをダンテ

三0「汝等の狀を我等に知らせよ」と求めた。

そこでわが師は「汝等宜しく行って

ての者の體は真の肉であると。 汝等を遣した彼等にったへよ

俺の察するごとく、もし彼の影を見たので

彼等彼を崇め、彼彼等に尊からしめよ」。

まだ宵のころ澄める空や、

また日沒八月の雲を擘く燃える水蒸氣も

彼等が束の間に登り歸ったほどに

□ かく迅かつたのを私は見たことがない。

鵬ける一隊のやうに我等の方に振り向いた。 彼方に達するや、彼等は衆とともに馬銜鏈なしに

我等に寄せ來るこの民は數多く

を等は新りて諸靈の浮罪期間を短縮し能ふ故にダン友等は新りて諸靈の深罪期間を短縮し能ふ故にダン

10中世紀に於ては流星と稻妻とは燃ゆる水蒸氣なりと9異本、夜半 (mezza notta)の

Swift as a shooting star In autumn thwarts the night, when vapors

fired impress the air.

横切りて、燃ゆる水蒸気が流星が秋の夜を

空を刻す時のごとく迅く

ミルトン失樂園四の五五六一八。

膝にて俺に負はされた。

正義の欲するよりも遙かに烈しく

俺を忿つたエスティの人が此を加へた。

然しオリアコにて追ひ及かれた時

俺は沼に走り、草と濘とが俺に絡んで 人々の呼吸する彼方にまだ俺はゐたであらう。

俺を倒し、そこにわが血管より

地に湖をつくつたのを見た」。

高さ山にひく願望のかなはんことを次に他の一人が云った「あゝ汝を

俺はモンテフェルトゥロの者であった。俺はブオンコンティる。 なん善き信仰もてわが願望をも扶けよ。

24地、三三の一四註。

19パドザ人の領地にての意。 この地の都はトゥロイの二四二以下。

22 地上に。 て暗殺さる。

20ペドプとヹネツィアの間にあり。

カッセロこしに

23不信なるグサド(地獄篇第二十七曲を見よ)の子。 窓し塗に同市とフィレンツェ とに戦端を開かしめた を はなるグサド(地獄篇第二十七曲を見よ)の子。

私の識れる者が一人もない。然し汝等の爲に

式O 爲しうることもあれば、善生の諸靈よ

語れ、世界より世界へと斯くのごとさ

案内者の足に従って私の探がしゆく

すると一人が始めた「無能が意志を平安によって私はそれを果たさう」。

断ち切らぬかぎり、汝誓はずとも

されば俺は衆に先んじてひとり語り

カルロの地の間に坐する地を見んか
汝にもとめる。於汝いつかロマニテと

もの願はくは俺をめぐんでファイにて祈をし

掩はそこの者であつた。然しわが坐所なるかくて重き答より俺を浮むるを得さしめよ。

13天國の喜悦を受しべく住まれし。

14巻なく地上に歸り得んか。

15ヤコホ・デル・カッセロ。 ファノの有力なるグェルカマ 薫。一二九六年ボロニアの長官となりてエステのアッツオ第三世に遊ひ、ために二年後彼に暗殺されたり。

17アンコナとベサロの間の沼澤地にある町。 カッセのシャルルの領するナボリ王國の間にあり。

はその血なればなり)舊約栗醬利未記一七の一四。18 Anima carnis in sanguine est (一切の肉の生命

傳へよ。神の天使が俺を捉へた。すると

地獄の使が叫んだ「おゝ天上の汝、何故俺を掠るか。

わづか一滴の涙のため彼を俺より奪ひ

その永遠の分を汝は携へ去る。

温つた水蒸氣が空中に凝まり 然し他の分の扱ひを俺は異にする」。

110 のぼつて寒さの捉へるとてろにて

彼は専ら悪を求める悪意に 忽ち水に歸へるさまを汝はよく知る。

智性を結び、その生得の力によって

霖と風とを起てした。

やがて日が暮れるや、彼はプラトマニなり

大なる連峯に亘つて豁を霧に蔽ひ 孕める空氣が水にかはつた。 また上方の寒さを强めたので

> 30彼の父の最期と比較せょ(地二七の一一二十二〇)。 31以下暴風雨の光景を叙ぶ。 lagrimetta (一限の滴)が子の魂を救ふ。 ひ鬼のために 遂に破る。然しこ、煉獄にては una 聖フランチェスコは鬼とプオンコンテの父の魂を争

32アペンニノの支脈の一。

33 異本、上の天を寒烈にし (il ciel di sopra)

九0 額を垂れて俺はこの者等に交って歩む」。 デオヷンナも他の人々も俺を顧みないので

起こつてアルキアノと呼ばれる水が 彼は答へた「おくアペンニノの隱含の上より 迷ひ出させ汝の墳墓を知るとなからしめたのか。 いかなる運が汝をカイパルディノより斯く そこで私は彼に「いかなる暴力または

この名の空しくなるところに カセンティノの麓を過ぎる。

俺は喉を貫かれ徒歩にて逃げ

100 て、に俺は眼くらみ、マリアの名を 平野を血に染めて達した。

俺は真を云へば、汝これを生者の間に 斃れてわが肉がひとり殘つた。 となへつく言葉を終へ、またてくに

26アルノ河の上谷カセンティノの一平原。 九四一六0 軍中にありしならん。地二二の一一九、煉、二四の ツオのキベルリニ黨の戰ひころに行はれ、ブオンコ 年の六月十一日フィレンツェのダェルフィ黨とアレッ ンテけ 戦死せりの恐らくダン テ自身もフィレンツェ

27一〇一二年ラポンナの聖ロムアルド(天、二二の四 九)の建てしカマルドリ派の僧院の ト派の最初の僧院の 改革べ ネデッ

29アルノ河に結ばる處の 28現今のアルキアナロ トスカナ州を流るの

妾と婚約し初めて己が寳石を妾の 33地、一三の七一八。

指輪とした彼の人がこのことを知る。

39 致は、既に指輪からけた姿に(即ち未亡人たる)お のが寳石にて婚約したあの人……。

雨が落ち、その地の

110

支へ得ない分が溝に入り

浴々たる流れさして迅速に突進しまた多くの大河に集まるや

わが凍えた體を見てこれをアルノに 剛健なるアルキアノは河口真際に

何ものもこれを引きとめ得ず。

アルノは堤に沿の水底に沿ふて俺を轉ばし俺の自ら造のた十字をわが胸の上に解いた。押し流し、かくて痛みが俺を服した時

第三の靈が第二の靈に續けた

1 10

あのピアである妾を想ひ起てせよ長き旅路より想ふ時

34 胸の上に手を組みて造りし十字。

r V ッツょ人、またほかに走り逐るて

溺 n こにフェデリゴ・ノ ヹッロと たものがていにわた。

E また善さ サ の人が手をさし出して祈つてゐた。 マル ツッコを强く見せし

伯鄮 オ ルソと、また犯罪のためでなく

3 0 カジ より分かたれ 72 魂即

0

自

5

云へるごとく、恨みの

72

ds

猜みの

2 20 工 爲 w 尚も悪しき群に人らぬやう此方に ルラ·ブロ · 'y チ アを私は見た。 され 2 る間 ば玆 12 25

ブ ラ 30 210 が悪 2 テ 化の迅めらる」やう人々の の貴女を慮らしめよ。

萷 らん ことを専ら所る諸 の影の

恋くより

放

n

た時

私は始めた 3 うわが光よ、 前が

> タッコおのが部下を引連れて羅馬に入り彼を殺して叔父を死刑にしたり後羅馬法王廳の審査官たりし時でシエナの長官の輔佐役たりし時タッコの兄弟或は カザ・グ・ラテリナの レッ

7 6 時馬アルノ河に飛び入りて彼は塗に溺死せりのが領っ「かエルフィ黨ポストリ家のものと筆ひがッチオ・デ・タルラティ。 アレッツオのギベルリニ 或は、 逐はれての づれ 77.2 不

8 善き若者なりしと。 グ井ド・ノヹルロの子の 一二九一年殺さる。 極 80 7

第六曲

負けたものは憂ひてのこり

繰返し投げて悲しくも習ふ。

勝つたものと共に人々は皆歩みゆく。

またひとりは側より彼に挨拶する。ひとりは前に一人は後より彼を捉へ

然し彼は止まらずに此者彼の者に耳を傾く。

かくて身を群よりふせぐ。

彼は手を伸ばして人を寄せしめず

0

ギン・ディ・タッコの猛き腕に死んだ

彼の愛國心に促されてダンテは故國に對する長き慨嘆を披撫す。ヂリオと問答す。やがて獅子の蹲るごとき姿せるソルデルロに遇ひ諸靈交々生者の祈禱をダンテに願ふ。ダンテ祈禱の効力につきギル

I zara. 三個の骰にて行ふ賭博。 ツァラとは「零」の云はる。當時盛んに行はれしと。

2幾千の金錢を與へて。

3 略に勝ちしものが幾千の金錢を與へて寄せくる人々とり身を脱するごとく、ダンテは生者の祈禱を乞ふ諸鐶に應諸の挨拶を與へてその重閻を脱せり。 目e suo ruberio uomo assai fam:so(獰猛と掠奪とle suo ruberio uomo assai fam:so(獰猛と掠奪とによつて悲だ有名なる人)と記せり。

眞理と智性の間の光たる彼女が

汝に告げぬかぎり斷ずる勿れ。

汝が識ったか否やは知らぬが、俺は

高く微笑んで幸ひな彼女を汝は見るであらう」。ベアトッリチェのことを云ふ。此山の頂の上に

疲れぬゆゑ、迅さを大にして我等を行かしめよそこで私は「主ょ、もはや私は前のやうに

恶

また今見よ、小山の影を投げをるを」。

彼は答へた「なほ能ふかざり

この日に我等は前に行かう。

高さ彼方に到るまへに太陽の歸るを、然し事は汝の判ずるよりは形を異にする。

汝は見るであらう。彼は既に崖に蔽はれてゐて

13

ダンテの影を地上に投ぎしめない。

然し彼處に只ひとり坐して

トゥリチェ)に特たざるべからず。第十八曲を見いデリオンによって全く解釋し得ず須く天啓(ベアルデリオンによって全く解釋し得ず須く天啓(ベアバルアトゥリチェ)

18グンテは夜までに頂上に達し得べしと考へしも事實

天の定めを曲げ得ることを私にむかい

■ 汝は或る句に明かに拒むと見える。

然るにての民はこのことを祈る。

されば彼等の望みは空しいのか。

すると彼は私に「俺の書は明かである。

此等のものの望みは虚妄でもない。また康かな心にて良く看んか

蓋してゝに置かれる者の充たすべきものを

審判の頂が低められるのではない。

四 また祈により過が償はれずとの はながにより過が償はれずとの

祈が神と結ばれないからである。

げに斯く高遠な疑ひは

15 apex juris. 神の至高の聖旨。

ッルデュである」と云つて互に抱きあふた。

諸州の貴女ならで娼家よ。 大なる嵐に渡守なら船。

风やくもこの床しき魂はこゝに 生地の甘美な響きのみに

否

ちのが市民をよるまふたのであった。

戦はずにはをらずして、一の城壁
然るに今や汝のうちに住む者等は

の濠の鎖す人々が互に嚙み合ふてゐる。

樂しむ處が一つだにありや、海邊をめぐつて慘ましきものよ、汝のうちに泰平を

鞍が空しければ、チウスティニアノが

11一の一三〇一一三六。 然もこれは常に許さる」にあらず。 こが、テ自ら亡靈を抱き得ざりしも亡靈は時として互

23 「汝は再びもろ~~の國の主母と稱へらるゝことなて述べらる。」以下ダンテは散國に對する懷嘆を披瀝す。

24 七十二行を見よ。

我等の方を眺める一の魂を見よ。

我等は彼の許に來た。 おくロュバルディア人の魂よるの 彼は最も迅い道を我等に示すであらう。

また眼付の儼かに緩かなりしよ。汝はいかに誇りがにも侮慢なりしよ

彼は何でとも云はずに

我等を行かしめ、たい蹲る時の

獅子の姿をして眺めてゐた。

然しボルデリオは彼に近寄って

最善の登り道を我等に示すことを求めたが

この靈は彼の求めには答へずに

10

「マントヷ」。すると影は全く我にひそみ 「マントヷ」。すると影は全く我にひそみ

ソルデルロ。 十三世紀に於ける有名なる詩人にして1二〇〇年頃マントザの西北約千哩のゴイトに生まる。彼は漂浪的東清を送りしが後半生はアンジリのジャル、に任へたり。トロレギンに滞在せし時ロマノのエッツェリノ第三世の姉妹にして伯爵リッチアマノのエッツェリノ第三世の姉妹にして伯爵リッチアマノのエッツェリノ第三世の姉妹にして伯爵リッチアマノのエッツェリン。 十三世紀に於ける有名なる詩人にし



馬銜を繕ふとも汝に何の益があらう。

たのこれなくば辱は少かりしものを。

鞍上に坐せしむべき民よ

手綱に汝の手をおいてより

この野獣のいかに猛くなつたかを見よ。 拍車にて矯められなかったため

おゝ御しがたく荒らくなりし彼の

されを乗つる獨逸のアルベルトよ数の前穹に跨がるべくして然も

100 正しき審判が星より汝の血のうへに墮ち

蓋し貪婪のため汝と汝の父とは汝の後繼者等のこれを恐れんことを。

もつて行ばれずば何の益ぞ。 斯くの如しとせば率の有名なるユスティニウス皇帝の法典ありとも権威を

27特に僧侶。 僧侶は俗権を悉く皇帝に委ねべきなり。

28 伊太利亞。

31アルベルトとその父リドルフォンのアルベルトは一三〇八年期に殺されたり。アルベルトは一三〇八年期にて戴冠せしも翌年死せり。

彼方に押しつけられて

帝國の花園を荒れるに委せた。

心なら人よ、水たってモンテッキとカッペルレッティ

モナルディとフィリッペシを見よ

來たれ、酷多者よ、來たつて汝等の貴人達の彼等は旣に悲しみ、此等は恐れ戰慄く。

來たつて汝の羅馬を見よ、寡婦となつて おればサンタフィオラのいかに安けきかを汝は見るです。 というないないない。 というないかに安けきかを汝は見るです。

(学侶ならざる」と豊夜彼は呼ばはる。 孤獨に泣き、「わがチュザレよ、何ゆゑ我と

水たつて民のいかに相愛するかを見よ

我等のため地上にて十字架に磔けられし來たつて汝自らの名聲に耻らへよ。

32 伊太利亞。

33 ヹロナの有力なる二貴族。

な 撃げて伊太利 亞全國の紛爭を示す。 以上四貴族の確執

写するまでは紛亂絕えることなかりき○ リニ黨・ルドプランデスキ家(一一の五八以下)に の生以來有力なるギベル



切なる殊勝な汝の人民は呼ばれざるに

答へて「我自ら此を負はん」と呼ぶ。

さらば汝喜べ、げに汝は喜んで可なり。

富める汝、安らけき汝、賢き汝。

古の法律をつくつて甚く開けをりしかが言葉は異なりや、結果はこれを蔽さず。

1四0アラネもラチェデモネも

おいで十一月の半になり細く、十月に

到らない汝にくらべては

厚生に向かってなせる徴は微かなものである。

汝の覺えをる期間にすら、法律

貨幣、官職、および慣習を幾度

また汝よく省みて光を見れば っなは變へ、また吏員を新たにしたかよ。

38 sopposers (動かんとして衣を搔きあげる意なりとも云はいアンキ)、或に腕の下にかょへる意なりとも云はる。

39希臘の雅典とスペルタロ

40フィレンツェの法律制度は絶えず改廢されて一月半

41 明かに見んか。

おくいと高きずオゴよ、(おが斯く云ふを許し給はよ)

三二〇 汝の正しき眼は他處にむけらるるや。

深淵にて爲したまふ準備なるや。
以る善のため、汝の聖旨の
以る善のため、汝の聖旨の

蓋し伊太利亞の邑々は暴君に

先黨を組んでマルチェロとなる。 充ち滿ち、また凡ての賤奴は

思慮ある汝の民のため、斯かる邪道に

汝の觸れざるを衿れ。

三〇多くは正義を心に抱くる、考へなく

多くは公共の荷を拒むも

然し汝の人民はこれを口端におく。

36 sommo Giove. 神曲に於ける基督数思想と異数的

37 馬の執政官にしてチェザレの敵なりきの

とを悔い、仇敵は誦唱に聲を合はす。 これにて安逸を食りして馥郁 る香りの花野にありて聖歌むらたひ、世にて安逸を食りして窪地に導かれ行きて諸の王や支配者の靈魂む見る。彼等は干紫萬紅ギルデリオはソルデルロと相擁し感慨を久しうす。やがてダンテは

恭 しく悦ばしい挨拶が

三たびと四たび繰返され

ソ w デ JU. Ľſ は退いて云った 卵線は 誰

神に昇りうる諸 0 魂が

2 0 Щ にに向 かはなかった前 173

俺 わが骨が は 并 IV F オッタ y オにて、 ボアノによって葬られた。 ほか 0 罪にあらず

不信 0 ゆゑに 天を失ふた」。

斯 く実 時 D が導者は答へた。

急に 己がまへ 12 物を見て

10

2

क्रे

を怪しみ、

半

信半疑にて

「然り

然らず」といふ人の og. 5 な默認 *

2 の者が現し、 R カジ 7 眉を垂 n

> 1 七 度₀ 数多度の意の

2 VOI. て第二人稱の複數代名詞を用ひたりつ 4 i ヂリ オに對しソルデルロ は尊敬の意を表し

3 基督 能 となれりの 0) 死 と復活 0) 前。 浮罪は悲昏の贖罪の 後に

丰 帝 アウ 12 の二七計の デリ グ スト 才 はプランディ の命令によりてナポリに遷されたり。 ツィ オに死せしが遺骸は皇

4

5 地 24 の二五 一四二つ

61

可

羽のらへに憇ひ得ずして輾轉し 一至のおのが苦惱を紛す病女に なのが苦惱を紛す病女に

60

呻吟として響かずに溜息である。 そこに人間の罪を除かれるまで

5

そこに三の聖き徳を着ないが 罪なき幼兒等と共に俺はゐる。 死の歯に嚙まれる

然も罪なくして他の諸徳を識り これを守つた人々と共に俺はゐる。

我等を致へて煉獄の真に始まる處に さて汝知つて爲すを得ば少しく

彼は答へた「定まれる處に我等は置かれず」 なはも迅く我等を行かしめよ」。

許されて俺は上に周圍 に行く。

されば行き得る限り案内者として汝に伴はう。

然し既に日のいかに傾き

11 limbo (地獄の邊疆)。 四の三六註。 特以 himbus puerorum (地

12洗禮を受けずして世を去りし幼兄等。

13 信、望、愛の三聖德[○]

14 思慮、正義、

剛氣

節制の四元につ

15地、四の二三―四二 0

16本燥獄、門。 ダンテは未だ前燥獄に居るなり。

17 步行し得。「エネアの歌」六の六七三。 一定の處に制限されず、許されたる範圍内を自由に

へらくだつて彼の方に振りかへり

賤しき者の緊める處を抱いた。

彼は云つた「おゝラティオ人の光榮よ

汝によって我等の國語はその力を現した。

おくわが出でし地の永遠の響よ

汝を俺に示すは何の功徳何の恩寵ぞ。

俺がもし汝の言葉を聞くに足るならば語れ

30

彼は答へた「憂愁の王國の一般」とり來たのか」。

凡ての環を經て俺は此處まで來た。

做せし事に非ず做さどりし事の爲に俺は天の力が俺を動かし、俺は此と共に歩む。

汝のねがふ高き太陽を見るを得なくなつた。

苦難にあらず只闇のためにまた俺がこれを識ったのは遅かった。

10 ギルヂリオは有徳の生涯を送れり。

されど神を正

當に禮拜せざりき。彼が地獄に罰せらる」は此がた

なりし

9

6膝。 然しランディノは setto le braccia (手首び) と云 ひ、或は oveil mutrir 郎 ち臍ー 腰とも 気は る。

7 伊太利亚人。

8 chiostra. 地獄の環のこと。 地二九の四〇。

62

人は闇のうちに歸りくだり

0 崖を過ぎておすらひ廻ることが能きる」。

云つた「さらば喜んで滯まり得るとそこで愕くもの」如くわが主は

汝の云ふとてろへ我等を導けよ」。

この世にて大谿が山を窪ますやうに そこより些かの距離を我等が行つた時

影が云った「崖の自ら懐となるこの山が窪んでゐるのを私は認めた。

彼方へわれらは行き

そこにて新しき日を俟たう」。

縁は半以上そこに消えてゐる。 いなながいいの間に一條の いなながいいの間に一條の

黄金に純銀、椰子に鉛華

21 異教徒たりし彼は神が人類のため浮罪の地を備へた

20mbra. 亡霊即ちソルデルロのことの

23 夜を明かす。

「峻しく又平かな」。 「峻しく又平かな」。

では登り行き得ないことを思へ。 されば須く住き宿を考へねばならね。 こゝ右手に離れて魂がゐる。 汝肯んぜば俺は汝を彼等の許に導かう。 彼等を識つて汝は喜ばぬことはあるまい。

他の者に妨げられるのか。それとも只彼に力がないのであるか」と答へられた。すると善さソルデュは地に指を呼らして云つた「見よ、目没後は磨らして云つた「見よ、目没後はでれば夜の暗のためにてこれは夜の暗のためにて

地平線が日を鎖し置く間も

意

18「イエス被等に云ひけるは尚ほ暫くの間光なんぢら為よ。暗に行く者はその行くべき方を知らず」約5為よ。暗に行く者はその行くべき方を知らず」約6の高よの暗に行きて暗に追及かれざるや

19 異本、o pur sarria cho non potesse 或は o non sarria che と あつて「それとも能きないの一登らないのか」

たの 撃動と貌とを汝等は識るであらう。 なるようであらるの なるようであらるの なるようであらるの なるの なるとかられての者の

最も高き遠に坐して、為すべもこと

等閑にしたやうな姿をし最も高き處に坐して、爲すべきことを

他の者等の歌にも口端を動かさぬは

蘇らうとしたが遅かった。 伊太利亞を死なしめ、他のものによって りなれた。よく傷を癒しらべかりした

次に彼を慰め顔なものは、モルタが

運ぶ水の起こる地を治めてゐた。アルゼアへ、またアルビアが海へ

100彼の名はオッタッケロにて、その纒衣姿は

なたいかにも仁慈な容のものと ちある非ンチスラオよりも遙かに好かつた。

曲一○三行を見よ。 おりドルフォ第一世。 一二七二—一二九二年まで島西の領地を收めたり。彼に伊太利亞を省みざりき。前の領地を收めたり。彼に伊太利亞を省みざりき。前

とせしも旣に遲かりき。. 彼は伊太利亞を救濟せんルッセンブルゴのエンリコ(ルクサンアルヒのハイ

32

33 モルル及びアルビア兩河の水源地なるボエミアでにて戦死せり。

35 ギンチスラオ第四世。 一二七八―一三〇五年まで来にリドルフォの娘なりき。

灼き澄む 印度の森

碎けたばかりの鮮かな碧玉もみな

大に小の敗けるやうに

花の色に敗けるであらう。

馥郁たる千の香により此處を

3

・ 森と花のうへに諸の靈が坐し でした。

谿ゆゑに外よりは見えなかった。

Salve rogina と共處に歌ふを私は見たが

始めた「落陽が今巢に入る前に

下の窪地にて彼等の間に加はるよりも

30

ソルデルロロ

る人あり。 何れにしても藍青の色のこと。 なんあり。 何れにしても藍青の色のこと。

26 帙。

27金屬、繪具、植物、鐭物、饗石、雲色も以つても「王名の谿」の燦爛たる色彩を形容するに足らず。 地獄

66

29 一時的利害逸樂のため改悔を遷延せし王等と其他の

三〇優される遺産を有つものがない。

人類の誠が枝によって興てることは

稀であるが、これは此を與へる神の

億の言葉は大鼻の者にも亦、彼と共に歌ふ意志にして、彼に此を呼び求めしめん為である。

さればプリアとプロエンツでは既に憂ふ。いま一人の者ピエルと等しく當てはまる。

てれがため木がその種に劣るごとく

タンツァはベアトゥリチェとマルゲリタに優って

おのが夫を尚も稱へる。

=

ス

- 單純生活の王、英吉利國のアルリゴが

彼は己が後裔に優れた者を出した。ひとり彼處に坐しをるを見よ。

彼等のうち最も低く地に坐して

も父の德を有せざりき。り、 フェデリゴはシテリア王となれり。 されど何れりい フェデリゴはシテリア王となれり。 されど何れり サーフェー アーコー 王とな

43 子孫。

44或は「彼より出づるものと呼ばしめんためである」。 おうの體は解親より受くるも靈魂は直接神より受くとなり。 二五の七〇以下及び天、八の一二二十三五となり。 二五の世のは、八の一二二十三五

45 兩人は地上にては不俱戴大の敵なりしが今陳獄にて

46ナポリ王シャル、第二世が父シャル、第一世に劣るに等し。二○の七九、天、一(トゥロ)第三世に劣るに等し。二○の七九、天、一(ヒエ九の一二七。

(彼は単純生活の人なりき) ギルラニ (四の五)。 49 英王ヘンリイ第三世。 Fu uomo di semplice vita としマルゲリタを後妻とせしシャル、自らがコスタ としマルゲリタを後妻とせしシャル、自らがコスタ としマルゲリタを後妻とせしシャル、自らがコスタ としマルゲリタを後妻とせしシャル、自らがコスタ としマルゲリタを後妻とせしシャル、自らがコスタ としマルゲリタを後妻とせしシャル、自らがコスタ としてルゲリタを後妻とし、ベアトゥリチェを先妻 としてルゲリタを後妻とせしシャル、自らがコスタ としてルゲリタを後妻とせしシャル、自らがコスタ

の諸王の如く墮落せざりき。

道げて死に、百合花を散らした者である。 しめやかに語らうと見えるあの小鼻は

彼處に彼のいかに胸うつかを見よ。

類の末とするものを見よ。 次に吐息しつゝ己が掌を

彼等は彼の惡しく汚さ生涯を知る。 機の床とするものを見よ。

肢體のいと太く見えて男らしい そこで愛ひが來て斯く彼等を刺し貫く。

10

鼻のものと歌をあはすは

その後に坐る若者が、もし彼の後に

王として残ったならば、げに尊嚴が

これは他の後嗣達には云へねことである。

ボ第四世の妻(ジョン)は彼の娘なりき。

38フィリッポ第四世。 ダンテは極力彼を非難せり。

红セエトッロ第三世の長子アルフォンソ第三世。 彼の鼻は大なりきと云はる。 彼の鼻は大なりきと云はる。

船びとの願望をかへらし 慕かしき友等に読れを告けし日

てゝろを和らげ

また遙かに逝く日を哭くが こと当

鐘を聞けば、 初巡禮を

折から私は聞けども心に入らず 愛に貫く時と既になってるた。

諮の靈のうちひとり起きあがり

聴けよと手にて求めるのを私は見た。

彼は双手を結んであげ

0

眼を東方にむけて神に 「ほかに我は

何でとをも意とせず」と云ふやうに見えた。 lucis anto といと度しく

Te

るまでコルラド・マラスピナ等と語らう。星彼方に消えて三神徳の表象たる三星空に輝く。ダンテは夜の闌くたふたりの緑衣の天使降りて誘惑の蛇を逐ふ。四元徳の表象たる四物思はしき煉獄の第一夜となれば諸蠹服を擧げて楽歌を誦唱し、ま

1 以下ダンテは煉獄第一夜の光景を叙する 六時頃なり。 今は午後

2 perigrino. との語の意義に就ては「新生」四一を見

ソル

テル

ロの言葉を聞けども心に入らず。

4 有名なる聖アムプロデオ Sis praesul et custodia Ut pro tua clementia, Rerum Creator, proscimus, Te lucis ante terminum にして一日の最後の晩禱 (Compieta) の起句。 (アムプロシウス)の讃歌

我等の導者また守護者となりたまへの次のめぐみにより 造物主よ、我等汝に祈る

光の終りのまへに

彼のためアレッサンドゥリアとその上を仰ぐは侯爵グ*リエルモにて

モンフェラトとカナヹゼを哭げかす。彼のためアレッサンドゥリアとその戦ひが

52 略現今ルビエモンの南平。
は、一二九〇年アレッサンドッリアの人民のために生物
なれ、鐵の籠に 入れられて その中に 一二九二年 死せ
ない 鍵の子デオアンニ第一世これを復讎せんとして

53 上部伊太利亞の一地方2 以上二箇處はグ#リエル52 略現今のピエモンの南半。

他のひとりは對ふの端にくだり かくて民はその中に包まれた。 彼等の金髪青顔をよく私は認めたが 健を過ぎて感慨する官能のごとく 13

寝より來た」とソルデルが云つた。 護衞として何れもマリアの 護衞として何れもマリアの

野をめぐり回し、全く慄然として とこで何の徑より來るかを知らなかつた私は

頼もしい肩へと寄り添ふた。

ツルデーは再び「いざさらば我等は谿に下り

11線は希望の色なり。 地獄は赤色天図ほ自色にて表象すべく、緑色は正に 煉 獄の色たり。地獄箭第九帖の三七十六三には深線の蛇に纏はるムフリエがメドゥサ(絶望)を呼びて此を眺むるものを化石せしめんとするに更へて、こム煉獄にては緑衣の天使希めんとするに更へて、こム煉獄は赤色天図ほ自色にて表

12 bionda. 白面金髪青眼。 これ中世紀に於ける美貌の典型なりき。三の一〇七。
ストテレスの D Anima (震魂論) 二の一二に Sensibilium excellentuse corrumpunt sensitiva (極度に感覺を刺載するものは感覺を感亂す) とあり。失樂園八の四五七以下。 は誘惑の象徴。 創世記第三章參照。 15 天上の薔薇(天、三一の一〇五以下)にマリアの坐する清火大。

甘美な節はわが心を空にした。 彼の唇よりいでく、そのいとも

すると他の者等はまた眼を天上の

すべて甘美にも虔しくうたつた。 もろくの輪に注ぎ、彼に從つて全聖歌を

蓋し面覆は今いと薄うして げに内部を透し見るは容易しる 讀者よ、宜しく弦に眼を眞理に研げよ

5

やがて貴顯のこの軍勢が

蒼白めて謙虚り、俟ち望むものゝ如く

默して上を仰ぐを私は見た。

炎々たる劒を携へてふたりの天使が すると折られて実を落とした。一振の

高さより出で、下に降るを私は見た。 いま萠したばかりの若葉のごとき

> 5四の111つ アリストテレスの「倫理」一〇の

6 rote. 諸天o

7容罪の襲魂にも尚ほ誘惑來たるの りっされど祈願により神は援助者を送りてこれに打 蛇これが表象た

8この處の諸靈は皆王 者治者 なりし 故に esercito gentile(貴顯の軍勢)と云へり。

10「かく神その人を逐む出だしエデンの間の東にケル りたまふし創世記三の二四の 註)。 或は戰ひは既に决し居る故に敢て致命的止め 神の慈悲にて利けられし正義の表象(三一の四三 を刺す要なき故に尖を落しあるものかっ ムと自らまはる畑の劔を置きて生命の樹の途を守

XO 行くものく、私はまだ第一の生涯にゐる者である」。

わが答が聞えるや

ソルデッロと彼とは忽ち

狼狽した人々のやうに後に退いた。

ひとりはボルデリオにひとりは共處に坐して

これに到る一の淺瀬をもなからしめる神にかくて私に向かひ「その原なる目的を秘めて企て給ひしことを見よ」と呼びをる者に寄った。

汝の負ふこの奇しる恩龍によって願ふ。

七の汝が濶き波の彼方に至るとき

呼ばはるやうわがデオダンナに云へ。

彼女の母は白き頭巾をとりかへたので

21天上の生涯。

22 現世。

鬼かず、ためにダンテの活きをることを今まで氣付鬼かず、ためにダンテの活きをることを今まで氣付

21

25コルラド・マラスピナの 一一八行を見と

27 肉體のまゝ三界を邏歴する。

28 地上。

29神

30 = ノの若き獨娘。

32 ranche benda. 黑衣と白頭巾は現今と同じく當時娘なり。 一三〇〇年ニノの死後ミラノのガレアッパ、アトウリチェと呼びエスティのオピッツオ第二世の

も寡婦の印なりしと(ボッカッチオ)。

願ふやうに私のみを眺めをる者を見た。 私は下にゐた。そして私は識らうと わづか三歩も下ったかと思ふた時 偉いなる諸影の裡に行き彼等と語らはう。 汝等を見るは彼等に大なる喜びであらう」。

引が 住き挨拶が彼等のうちに默されては措かれず 費き土師ニノよ、罪人等のうちに汝の この山の麓に來てより、 やがて彼は訊ねた 居ないのを見た時、いかに私は喜んだかよ。 私の方に彼は寄り、彼の方に私は寄った。 眼の間に明らかにしない程ではなかつた。 「汝が遙けき水を渡つて 幾千になるか」。

> 16時くして遠くよりは見えざりしも近寄りては見えざ るほどならざりきっ

17

36

然し前に鎖したものを彼の眼と

既に空の黜ずむ刻であつたが

19 コノはダンテが普通学里 ニノイデ・ギスコンティロ ニノはダンテが普通浮罪山に來たる靈魂と等しくテ これを治めて土師 (Giudice) の稱號を戴けりつニノ 鳥はビサに屬せし時四州に分かたれて各ピサの貴族 リノ(地、三三の一三註)の孫なり。サルディニア なり。二の一〇〇。 エレ河口より遠く波を越えて來たりしものと思ひし ニの八二註) 死。彼は僧ゴミタを絞首の刑に處したりき(地、二 はその中のガルルラ州の土師たりきの一二九六年 ピサの人にして伯爵ウゴ

30地獄)

私は彼に云った「おく悲しい處の中より

そこで私は彼に「此方の極を

一面に燃やす三つの燈を」。

さ

彼は私に「今朝汝が見た四つの

明星は彼方にくだり、彼等の

彼が語らうとするや、ソルデルは彼を己にありし處に此等の星が昇つた」。

その方を見るやうに指を向けた。

引き寄せて「彼處に我等の仇敵を見よ」と云ひ

小さき谿の防ぐものなき側に

一
正の蛇がゐた。恐らくエグに

頭を絶えず背にむけて舐りつい

100

忌むべき紐が草と花の間を來た。

見なかつた故私は語り得ないが天來の蒼鷹の動いたさまを

なり。
即ち健全なる道徳意志の回復にあることを示す一例時に三神徳の光輝く。これダンテの「煉獄」が倫理的

36 此等の三星は三神徳即ち信、望、愛の表象ならん。

活動的生活の四元徳(一の二四)が消えし夜の瞑想の

37 異本、私が0

38ふたりの天使のこと。

もはや俺を愛しをるとは思へない。

を記すしき彼女は再び頭巾を求めねばなるまい。 「ちな」

眼や觸りが頻りに燃さねば

彼女によっていと易く識られる。

ミラノ人を戰場に率ゐる毒蛇は

70

彼女のためガッルラの雄鶏ほどには

美しい墳墓とならねであらう」。

かく云って彼は程よく心に

然える正しき熟誠の印を

わが貪慾な眼は專ら天にむかい

諸の星のいと緩さとてろに赴いた。車の軸にいと近き際のごとく

するとわが導者は「子よ、何を天上に觀るか」。

33 二ノが彼女の再婚を喜ばざりしとの意か、或は再始の意か。

| 赤蛇はミラノのギスコンティの紋章なりの前著に形まるムはその再婚を示し、後者の紋章がの墳墓に形まるムはその再婚を示し、後者の紋章が彫まれんが彼女の不節操を示さん。異本「かのミラノ人の戦場に携ふ……」。

門極⁰

三0 こくに情められる愛をわが民に俺は抱く。 私は彼に云つた「おゝ私は嘗て卿の國を 通ったことはないが、然し全歐羅巴のうち

ての君等を叫び、またての國を叫ぶ。 卵の一家の譽なる名聲は

人の住む地にして此を知らの處は何處にあるぞ。

斯くてまた此處に赴かぬ者も此を識る。 願はくは私が上に行き得んことを、されば

卿に誓ふ、汝等の一族は財布と 劒の稱讃を汚してはゐない。

150 罪ある頭が世を歪めるとも、慣ひと 性とが、ひとり正しく歩んで悪しき道を

蔑ずむといる特権をこれに與へた」 すると彼は「さらば行け、蓋し、牡羊」が

全四足にて厳ふて跨がる床に

17 vostrn. 尊稱として第二人稱の複數代名詞を用ゆ。 りきの 一三〇〇年迄にはグンテはコルラドの領地を踏まざ 一二四行の「卿」も同斷。

49 慈善と勇氣の徳の

50羅馬3 或は特に法王ボニファチオ第八世の

51白羊宮。 太陽は今この宮にあり。

然し何れも共に動きをるのを良く見た。

蛇は逃げ、天使は身をめぐらし彼等の緑の翼に卒氣の裂かれるを聞いて

士師が叫んだ時彼に近寄つた影は
動んで高くその在處へと翔り歸つた。

ここの襲撃の終はるまで一瞬時も

私を眺めることを弛めなかった。

効薬の頂に至るに要する蠟を 彼は始めた「汝を高さに導く光が

汝の判斷のうちに充分受けんことを。

隣りの地の真の消息を知らば此を俺に告げよ

コュラド·マラスピナと俺は呼ばれた。嘗て俺は実處にて大なる者であつた。

俺は『老』の方でなく、その後裔である。

ムラッツオ侯コルラド第一世の

コルラドの組父な

39 清火天。三九行註。

40コルラド・マラスピナの 一一八行を見よっ

41 天國。

にしへのティトネの妾は

東方の露台に既や白んでゐた。 \$ 0 から 嬉し い友の腕をはなれ

その額

は尾にて民

を撃

嵌められた変石に 冷たき生物の像に また夜は我等の 70 った處に 灼い 7

おた。

二歩のぼり、 旣 17 第三歩が

10 その時 ア 水 E よりのものを身に

翼を下に垂れやうとしてゐた。

携 五人の者の既に坐して へてゐた私は睡眠に負け、凡て我等 ゐた草の上にうち優した。

7

小

燕が恐らく己が往きにし

りて煉獄の門を開く。一生を刻む。やがて天使は金銀の双鍵によい一生の一般として上個の子字を刻む。やがて天使は金銀の双鍵によい色の段とに坐せる天使は白双の尖にてダンテル額に浮め べき夜は明けてダンテは鷲に浚はると夢に見、愈本煉獄の入口に登れり

午後八時半過なり。更に太陽のアウロラとせば午前 きな得ざるティトネの妻アウロラ女神は朝なく彼 神山中難解の句の一なりの 二時過なり。 の微光を指すと解する説あり。もし然りとせば今は ふは月のアウロラのことにて月の昇らんとする東方 の窓床より起きて晩を告ぐ。ダンテの妓に「妾」とい 不死なれども永久に若

太陽は天蠍宮に懸る。 れきつ 蠍は冷酷なる動 物と考へら

3

5 4 とすれば、三行の註を見よ、午前二時半過なり。 を過ぎ第三時も翼を垂れて即ち中を過ぎしと云へば歩とは時間のととにして即ち日後(六時)より二時 午後八時半過なり。もしこれを朝のことないふもの

6 中ルデリオ、ダンテ、ソルデルロ、ニノ、コルラド・マ 人類の始祖アダムより繼承せしもの即ち內體。 ラスピナの

雅典王パンディオンの娘にしてテレオの妻なるプロ るフィーメラは燕となれり。「メタモルフォシ」六の ニエは子を殺し夫に食はしめし故驚となり、姉妹な 一二一六七六。これより以下曉の叙景。

此慇懃な意見が汝の頭の真中になる。 を別の進路の阻められぬかぎりを別の進路の阻められぬかぎり

此慇懃な意見が汝の頭の真中に打込まれるであらう。」

52 春が七度經ざる前に、即ち七年を經ざるうちにつ

お流竄の際マラスビナー家より数待されて今ダンテ自お流竄の際マラスビナー家より数待されて今ダンテ自然の際であり、またとれ煉獄館の第一段を強いて知らん。

80

睡眠は破れざるを得なかつた。 かくて想像の燃焼にいたく燬かれて

母がその腕に眠るアキッレを

彼が醒めし眼を廻しめぐらしなど伴れ去った)へと盗み去った時は

うち慄ふたのにも似て

自ら何處にゐるかを知らずして

身をよるはし、愕いて凍る 私は顔より睡眠の逃げ去るや否や

太陽は既に二時以上も高く人のやうに蒼白めた。

宴篇二の四。 に火よりなる圏ありて地球を包むと信じられき。饗 に火よりなる圏ありて地球を包むと信じられき。饗

13夢の中に燃やされて0

はアキャンをトゥロイア包園に赴かざらしめんとて母より奪ひてスキロ鳥に運び、女の衣裳にて蔽し置けり。然し後ウリッセに 發見されて希臘軍に加はリトゥロイアに赴けり。かかく「アキャンの歌」一のニトゥロイアに赴けり。ルカノ「アキャンの歌」一の二四七以下。

15 ギルデリオロ

16復活日の翌朝の

嗣 の想ひ出の悲しい唄をはじめ、また我等の

心が内より漂浪よこと多く

その幻が神託とも云はるべき朝まだき頃。 思ひに虜はるくこと少なうして

擴げて天に懸り、方に下らうとするを 黄金の羽の一つの鷺が翼を 夢に見たやうに私は覺えた。

50

去られた時、ガニメデがその民を またいと高き集議に奪い

見棄てた處に私がわたやうに見えた。

此處にのみ翼を搏つは慣ひにより、又恐らく 心の中に私は思ふた「恐らく此鳥の

やがて暫く廻つたのち彼は

他の處より人を足にて運び上げることを嫌ふ」。

電光のやうに怕ろしく落下して

8瞻の夢は正夢なりと信じられき。地二六の七。ダ り。一九の七一三二。二七の九三。夢は皆その日に ダンテの見関することの緒なりき。 ンテは煉獄に三夜を過どせしが瞻には三度夢を見た

9 當時の「動物誌」によれば鷺は老齢に及べば火圏に 登けまた神を瞑想憧憬する靈魂の表象にして聖約翰 ス煉銀篇全篇に汎き道徳的浄化を示するのならん。 復すと信じられ、かくて洗禮に據れる更生の表徵と せられぬ。ころにては鷲は羅馬帝國を示すよりも寧 翔り凡ての翼を焼き失明して泉に落ち再び活力を回 もこれによりて表徴さる。

神々の坐所なるオリムボの

後はれてオリュばに行きデオヹ神の盃手となれりの 小亜細亜なるイダ山。 ガニメデはいと美しきトゥ ロイアの若者なりしが一日との山中に獵せし時間に

)彼女は上に行き、俺はその足跡に従つた。

かくて彼女と睡眠とが一緒に立ち去つた」。 その美しい眼が開いた入口を俺に示した。

真が露はになった後 他ぶみ恐れた人が氣を確かにし

私も自ら換へた。私が配慮と 己が恐れを勵みに換へるやうに

高さをさして進み、

私はまた後に從つた。

薬てたのを見るや、

わが導者は

動崖を傳ひ

されを支ふとも汝怪しむなかれ。 遠者よ、わが題材のいかに高まるかを

5

豫壁を分かつ罅隙のやらに

20 rincalzare. 培ふ。 天、二一の一三 10

またわが顔は海邊に向かつてゐた。

安んぜよ。蓋し我等は善き處にゐる。

汝は今や煉獄に達した。

50 てれを続りとざす断崖を彼處に見よっ

その分かたれると見える處に入口を見よ。

汝の魂が裏に眠つてゐた時

貴女が死て云つた『私はルチアである。下の彼方を飾る花のうへを、ひとりの

さすれば私は彼をその道に易からしめやう」。眠るこの者を妾に伴はせよ。

彼女は汝を捉へ、日が輝いた時

ソルデルと他の貴き諸の本精が残った。

17本焼飲

18 Lucia ことにてはスコラ 神學者のいふ gratia operans (扶くる塁籠)の実象のごとし。 ダンテが林に迷ひ入りし時彼を扶けんとしてギルデリオを呼び(地、二の九七)、またペアトウリチェを動かして彼を敷ひに赴かしめしは彼女なりき。ダンテの本煉獄に入りし肤と彼が地獄に入りし時の狀(地獄篇第三、四曲)とを劉照せよ。

慇懃なる門守は再び始めた

「彼女が汝等の歩みを善に進めんことを

これはいと清く滑かな白い大理石にてそこで我等は第一の階に來た。

第二は暗紫よりも色濃く

私の姿は宛らにうつし出された。

縦横に罅の入った

上に容積む第三の階は

脈より拼る血のごどく

炎々たる白斑紅石のやうに見えた。

……。 この上に神の天使が二つの この上に神の天使が二つの

お告白の表象の

26 懺悔の表象。

27神に對する熱き愛の表象或は十字架の表象。 「卒直なる告白は金人を映し、十字架を眺むる者の堅き心の血と靈魂と鑑とを献ぐ」ミス・ロセッティ「ダンテの血と靈魂と鑑とを献ぐ」ミス・ロセッティ「ダンテの俤」

初め見えたところに來た。

異なる色の三つの段と、まだ物云はぬ ひとりの門守とを私は見た。 そこに一の門と、これに到るため下に

上の段に坐しをるものを見たが そこに向かひ眼をいよく開くや so

70

彼は白刄を手にして

その顔に私は堪へ得なかった。

その光線を我等の方に反射せしめたので

私は屢顔を擧げやうとしたが徒らであった。

彼は語り始めた「汝等の願を

登り來て身を害はねやう戒心せよ」。 其處より語れ、護衞者はいづてぞ。

識れる天の貴女が今し「彼處に行け わが師は彼に答へた「此等のことを

21五十一行を見よっ

22本煉獄に入る門の

23 一三の四六。

はルケアの

彼は我等に云つた「この鍵の何れから扉にあはせて私を充ち足らした。

廻らぬ時は、この開口は開かれず。 合はずして、錠の中に正しく

開くに、秀れたる巧みと才とを要す。

我は彼得より双鍵を受く。彼はまたてお節を解くものなるによる。

三0かく聖門の扉を押して彼は云った。 閉ぢ置くよりも塞ろ開きて誤れと我に云った。 民がわが足もとに跪伏しだにせば

外に歸るべきてとを汝等に識らす」。「入れよ。然し後を顧みる者の

蝶番のうちに音たてく強く廻つた。この聖門の金屬の軸が

33 黄金の鍵は基督の血によりて脚はれしものなる故に

34銀の鍵は人智に闘る故にこれを用ひるに慎重なるを

神の國にかなはざるものなり」 路加傳九の六二、「イエス日ひけるは手を型につけて後を顧みる者は

35

28恐らく「教會」の機威の表象ならん。

懇に私を引きつれて云つた 三つの段を越えて高くわが導者は 三のの段を越えて高くわが導者は

| としく身を聖さ足もとに投げ | 一議虚って彼に錠を外づすやうに求めよ」。

一10 鱗のてわが爲に此を聞くやらに乞ふたがいるがない。

一つは金、一つは銀であつた。その下より彼は二つの鍵を取り出した。彼の衣の色と同じかるべく

まづ白い方を、次で黄の方を

29 思ひと言葉と行ひに於ける三重の罪を悔ゆる印とし

鉄炘、忿怒、懶惰、食婪、饕食、邪淫の七罪。 の煉獄にて潛罪さる七罪 (pecc.tr.) の表象。 傲慢

31 褐色。 謙虚懺悔の表象。

32 黄金の鍵は開く力を示して roetstas judicanteと呼ばれ、銀の鍵は懺悔者の精神を看破する力を示して scientia discrenendi と呼ばる。「神學綱要」補遺二七の三。

曲

曲 一がれる道を真直とおもひて

さて若し私がこれに限をむけたとせば その再び鎖されたのを私は聞いた。 関のうちに我等が入ったのち響きして 魂の悪しき愛の通らぬ門の

何 退きては寄せくる波浪のでとく の辯疏がこの過に堪へやうぞ。

此方彼方にうごく裂けた巖を

われらは傳ふて登つた。

10

奥まる側に寄り添はねばなられ」。 用ゐて、 わが導者は始めた「こゝに少し 或は此處或は彼處に しく技を

このことが我等の歩みをいと稀にし

罪の徒なり。やがて重き石を負ひ來で群あし、これ傲慢淨ノの膨までしを見る。やがて重き石を負ひ來で群あし、これ傲慢淨ノの膨までは、一葉母では一葉地に至り、山腹の純白の大理石ダンテ姨織の門を入りて愈々第一葉地に至り、山腹の純白の大理石

1 malo amor. 愛は一切の行為の動機たり、 基となる。これダンテの教義なりき。 かるれば善行の基となり、悪しく導かれんか罪恶の 一〇五参照。 ー七の九ーー 正しく選

若し誤って後を見んか上進の特權は全く奪はれて如 何なる辯疏も遂に容赦を得がたしの九の一三一、二の

2

3 徑は狭く般しきのみならず凹凸極めて甚だし。

善きメテルロを奪はれ

身をめぐらして私は第一の音に心をとめ またかく烈しくは見せなかった。 なたがく烈しくは見せなかった。

No Deitm laudamus と甘美な響きに 変る聲を聞いたやうに覺えた。

即象宛らにして、詞が歌ふ時、人の常に受ける

或は聞え或は聞えなかった。

30 羅馬の丘の 一にして サトゥルノ 神の神 殿なりった八。

37本煉獄に於ける第一の響っ

ヌス)とせらるも原歌は尚ほ古きものよ如し。 離または感謝の祈禱。作者は聖アュプロデオ(アム がは我等次を謎めたよぶ」。古き聖歌の起句。 朝

登るべくもあらぬ繞れる堤が

純白の大理石より成り、ポリクレ のみならず、自然もてくには辱づるよと

幾歲も哭き待たれし平安の告示を 思はれる彫刻に飾られあるを私は認めた。 天をその長き禁止よりひらき

齎らして地上に來た天使が こゝに優しき姿に彫まれて

默せる像とはおもへなかつた。 我等のまへに現れ、真に迫って

鍵をめぐらして高き愛を開いた彼女が

Aveと天使が云つたと人は誓ひもしやう。 また形が蠟に押されるやうに定かに るいに像られてあったので

9 削られたる山腹の面の

10 頃一四一二年》。ダンテ以前の作太利亞人に賞置さ 有名なる希臘の彫刻家ポリクレトウス れたりの (前四五二年

11基督の降誕。「いと高きところには榮光神にあれ、 がプリエルロロ 地には平安人には惠みあれ」路加傳二の一四。

12

13 基督を生みて神人の和合交通の門を開きし聖母マリ ア リアより採らる。 七臺地に於いて示さるる模範の一つは必ずす

り)路加傳一の二八。 主汝とともに在すの汝は女のうちにて福ひなる者な benedicta tu inter mulieres (慶にし恵まる 1 者よ Ave, gratis dilecta : Dominus tecum est:

14

あれらが「針の目」を出たまへに

寝床にもどってゐた。

私は疲れ、また二人とも道に惑ひて山の退くところに登った時

10 荒野の途よりも尚ほ淋しい

虚空に界する端より

直立する高い堤の麓までは

或は左の側に或は右の側に 量つて人體の三倍はある。

この軒蛇腹はかく見えた。

その上に我等の足をまだ

4 割き狭き困難なる道。「富める者の神の國に入るよりは駱駝如何に雖いかな富める者の神の國に入るよりは駱駝コ玉。

ち満月を過ぎし四日の月に日の出の四時間をデかるり。 ダンテの醌めし時太陽は既に二時間を昇りなりたり。 ダンテの醌めし時太陽は既に二時間を昇りなれり。

6 煉獄淨罪山の第一嘉地

マルチリオは地獄の道を識りをりしも煉獄は躓り知 マルチリオは地獄の道を識りをりしも知らずって ゲンテもギルデリオと煉獄の道を少しも知らずっ

地あり、その道幅は人身の三倍なり。8焼獄澤騨山には山を繞り山腹を削りて上下七側の邊

*0一つには「否」、一つには「然り歌ふ」と云はしめた。

同じくてゝに寫されし香の煙に對し

然り」「否」と云った。 わが眼と鼻とは和せずして

謙虚れる「詩篇者」はからげ立ちて踊り てくに祟むべき器に先んじ

その際彼は王に優りもし劣つてもるた。

描かれ これに向かひ、大なる宮殿の窓に L 111 = ルは蔑ずみ悲しむ

貴女のやうに眺めてゐた。

七0

111

照らした他の物語を近くに見究めんとて 7 w の後より私を白く

その徳グレ 私は立つてゐた處より足を移した。 ゴリオを動かして

は「然り歌ふ」と云はざるを得ず。」

20鼻は「否香りせず」と云ふも彫刻鮮かなれば眼は「然 り煙を吐きて香る」と云ふっ

書六の一二一四。 ダヸデュ「エホバ神の櫃のためにオペデエドムの家 り。時にダビデ布のエポアを着けるたり」撒母耳後 者を賦けたり。ダビデ力を極めてエホバの前に躍れ とその所有を皆悪みたまふと云ふことダビデ王に聞 こえければダビデゆきて喜びをもて神の櫃をオペデ べの櫃を昇く者六歩行きたる時ダビデ牛と肥えたる エドムの家よりダビデの城邑に昇きのぼれり。エホ

24 23踊りは王者の威嚴を傷けしとも見ゆるも、 ダボデの妻。「神の櫃ダビデの城邑に入りし時サウ はまた王者以上に貴きものなりき。 ルの女ミカル(ミコル)窓より窺ひてダビデ王のエ その謙虚

パのまへに踊るを見その心にダビデをいやしむ」

Ecce ancilla Dei といム詞が

で心を一處にのみ注ぐなかれ」と彼女の姿に印されてあつた。

置いてゐた慕はしき師が云つた。

そこで私は眼を動かしてマリアの

居た側に他の物語が

五〇

うしろに當たり、私を動かした者の

そこで此をわが眼前にしやうとして巖に寫し出されあるを見た。

私は非ルデリオを過ぎて近寄った。

をの前に民が現れ、凡ての者が**悉く**車と聖き櫃を曳く牡牛が

15「我はこれ主の使女なり」同一の三八〇

16左側。 煉獄は右へ入しと行く。ギルデリオは婦よ

17 ポルデリオのねたりし側即ち右方に0



大なる勝利を得せしめた羅馬の君の大なる勝利を得せしめた羅馬の君の

高き榮光がて〉に綴られてゐた。

即ち皇帝ルッライアノのことを私は云よ。

態して、彼の馬衛の側にゐた。

さの 彼の周閣に見え、金色の「鷲」が 路みあふ騎士等の群集が

此等凡ての人々の裡にて慘ましき女が彼の上に風に動かされるやうに見えた。

これが爲わが心臓は裂く」と云ふやうに見えた。「主よ、殺されしわが子の復讎をせよ

暫く待て」。すると彼女は「わが主よ

そこで彼は彼女に答へて「わが歸るまで

そこで彼は「わが位に登る者が汝の爲に此を君もし歸り給はずば」とて憂い切なる人のやう。

25トゥライアノ皇帝 (九八十一一七年)。 グレゴリオ大法王の所願によりトッライアノの震魂が地獄より敷ひ出されて木星天に擧げられたりとの傳説あり。

26トゥライアノの遺征の門途に一婦人現れて歓願せし、最初「我に暇なり」と答ふ。 然し彼女が叫んで時、最初「我に暇なり」と答ふ。 然し彼女が叫んで

天、二〇の四四、五。

27羅馬帝業の表象たる磐章旗

0 忘れ給はんか、他人の善行は汝に何の益ぞ」。 做すであらう」。彼女は「若し汝の善行を

正義が此を求め、憐憫が俺を止める」。即ちわが行く前にわが務を果たさねばなられ。

るの世には見られぬので我等には 見してとなき者が作りたまふた。 見してとなき者が作りたまふた。

その「作者」ゆゑに私が飽かず眺めて

自ら樂んでゐた時

差し向けるであらう」と詩人が囁いた。歩みは稀である。彼等は我等を高き段に100「見よ、此方に多くの民がゐるが

奇しきものを見んとてひたすら

28とよに又ダンテの辛辣な諷刺を見る。 正義と憐憫

20神。 神は一切な識り給へば物に新菌なし。「日の下20神。 神は一切な識り給へば物に新菌なし。「日の下

緩きなり。 彼等は重き石を負ふ故に歩み

32川に登る道を我等に知らすならん。



來る者を眼にて見分けよ。

50 各いかに撃たれるかを既に汝はよく認める」。 おゝ心の眼は病み、後歩しながら

得意氣なる惨ましくも疲れし

傲慢なる基督教徒よ

天使のごとき蝶の形と成るべく生まれし 我等は禦ぐものなく、審判に飛びゆく

能をなさいる蟲のでとく、謂はいた。 蟲なることを汝等は悟らないのか。

不完全な昆蟲でありながら

何ゆゑに汝等の心を高く浮かばすのか。 天井や屋根を支へるため

30

しばく特送のところに見る

膝を胸にむすぶ像は

眞なら四眞の恨みを、眺める人に

36 異本、 35 disviticuliure 葡萄蔓をかき分けて眺める意 しめつける (si nicohin)

32二一の五九一六四参照。

打古代の人々は蝶を一般に靉瑰の表象とせりの

返濟を求めたまふかを聞きて他の方に向くに緩くはなかった。

110 その結果を思へ、いかに酷くとも 苦難い形に心をとめず

汝の善き志を棄てざらんことを望む。

私は始めた「師よ我等の方に私は始めた「師よ我等の方に

進むものを私は見るが、彼等は人間とも見えず

重い張が彼等の身を地に縮まらすのですると彼は私に「その苛責の

さて彼處を眺め、石を負ひが眼も初めはこれと争った。

33 澤遅者の苦難は極めて苛酷なれども然し讀者よ外形を見て心識る勿れ。 澤罪者は遂には祝福に入り、此苦難は「大なる宣告」即ち最後審判以後に及ばざるを 知れる 此に反して地獄の苛 責は 永劫止む時なしる

狂人か人にあらずやと惑ひたりの

むかひて汝の抱く優れる受により 「おゝ限られず、たじ初めの業に

凡ての被造物により、汝の名と 天にいますわれ 氣に感謝を捧ぐるは宜さことなればなり。 汝の力とを稱へしめ給 汝の聖國の平安を我等に來たらせ給 らの父よ へ。汝の甘美なる

そは若し來たらずば、 盡すとも、自ら到り得ざればなり。

0 人々にも己が意志を献げしめ給へ。 汝の天使等オザッナと歌いつく のが意を汝に献物となすでとく

ざりしプロエンツァノ・サルアニに遇ふ。 イカウ は関い話を重されている方の下よりダンテを盗み見して世の名牌の儚きを述べ、りが負へる石の下よりダンテを盗み見して世の名牌の儚きを述べ、りが負へるサンタ・フィオレの伯爵オ・ベルトに遇ひ、また畵飾家オ学傲慢の諸遠重き石に身を屈しつゝ主の前を稱へ来たる。そのうちの傲慢の諸遠重き石に身を屈しつゝ主の前を稱へ来たる。そのうちの

primi effetti. 解明なりの 造りしもの。 以下主の新(馬太傳六の九ー一三)の 諸天と天使。 萬物に先立ちて神の

2天に限られず、たく天使と諸天にむかひて抱き給ふ 愛ゆるに天に坐し給ふ神。

on vapore. vapor est enim virtutis Dei (しれ即ら降 の力の氣なりつ「ソロモンの智慧」七の二五。

4 Ognana (ホザナ) を救ひたまへ」の意。神を讃美する詞なり。約翰傳 一二の一三。「新止」二三の短時第五師の五行。 希伯來語「ホシアンナ」にて「我

此等の人々は斯かる駅をしてゐた。 起てさず。 こくろを留めて見るに

と言うで育て異身があって。 げに背に負ふ荷の多寡により

「もはや場へ得ず」と云ふやうに見えた。彼等の收縮に强弱があった。

39怪奇なる彫物を見、その現實ならざる苦惱を宛ら現

苦悩等しからず、凡て聞く

また疲れて第一の軒蛇腹の上を辿り

世の曇りを淨める。

意志に善き根を置く人々は彼等のため、彼等彼處にて常に我等の為に幸を語るとせば

能く何を云ひ又行すべきぞ。

宜しく彼等が此世より携へ行きし印を洗ひ

深く輕らかに星の路の輪に

出で得るやう、我等は扶くべきである。

汝等の願望のまゝに身を擧げ得んことを汝等の荷を下ろし、翼をうごかして

写の方にあるかを示せ、もし又徑が一より多かれば 図の 乞ふ階に至る最も短ら道が何れの

傾斜最も峻しからざるものを致へよ。

7 一〇の一三六、七。
8 圓形なす環道をめぐりて。
9 cornice、 路霧澤 罪する處は山腹を削りて成る狭き
9 cornice、 路霧澤 罪する處は山腹を削りて成る狭き
高地なり。故にこれを軒蛇腹と云へるなり。
ニーニ四行) 地上にありて神を信ずる人々は彼等の
ニーニ四行) 地上にありて神を信ずる人々は彼等の
ために新りて功徳を積むべきなりむ
ために新りて功徳を積むべきなりむ

11 諸天。 八の一七。

これなくば進まんと甚く努むる者もこれなくば進まんと甚く努むる者も

をお我等の受くる悪を我等互に をは、、汝もまた慈悲深く赦して をあく勝たる〉我等の力を なる。

げに其要なき我等のために做されず ての最後の祈は、愛する主よ 5

新りつ>諸の影は、往々夢に見るものにかく己と我等のため速力の増さんことを りにしているの後に止まれる者等のためなり。

似たる重量を負ふて行つた。

5 「試線にあばせず」以下の新藤は海野者には要なし。 後上の意志は神に向けられし故に既早や罪を犯す力 彼等になく(二六の一三〇) 從って誘惑にかいることなければなり。 しかも間に彼等の斯(祈るは未だ 嫌獄に到らざる者のためなり。

102

俺はラティオ人にてひとりの大なるトスカナ人より生れた。 グリエルモ・アルドブランデスコは俺の父であった。

彼の名を嘗て汝が聞いたか否やを俺は知らない。

50

わが祖先の古さ血と赫々たる

動功とが俺をいたく驕慢にし 母を共にすることを思はずに

俺は凡ての人間を極端に蔑すみ カムパ その爲シエ ニュティコの見等も亦皆これを知る。 ナ人の知るやうに俺は死んだ。

害ふたのでなく、俺の 俺はオイベルトである。傲慢は俺のみを 一族

94 また生者のうち此を償ふ者がなかつたので 神を満足さすまで俺は此處死者 凡てを伴ふて禍に曳いて行つた。 の間

17

7

の重量を負はねばならぬ」。

17 伊太利亚人。 18 シエナのマレッマなるサンタフィオラへ六の一一一) の伯野グリエルモの第二子オムベルト。 不遜驕慢 さる。 にして一二五九年カッパニアティコにてシェナ人に殺

19地の生地を共にする、 即ち同郷人。

私の從へる彼の語つた此言葉に向かひ意ならずも登り行くことを澁る」。

彼等の答へた言葉は誰より

來たか明かでなかったが

右手に來たれ、さらば活ける人のかでは

통

をり得る徑をなんがらは見るであらう。

妨げられ、そのため顔を

季れるに及ばなかつたならば

16 ダンテ。

ての荷を彼に憐ましたくおもふ。

13 ダンテロ

13人類の始祖アダムより受けし内體3

14 ボルデリオ0

地獄の常道は左なり、これ悪に遊む罰なり。

104

かくる傲慢の代金を此處に排ふ。

ていにおへも俺は來られたかつたのである。 **

おゝ人力の虚しき祭よ

元〇

頂に絵の存ふことの如何に短さよ。 焼き期に結ばれずば

信じたが、今やデオットが歡呼され

その如く一のグサドが他のグサドよりかくて彼の名聲は朧ろになる。

巢より逐ふ者が恐らく生まれてゐるで**あらう。** 國語の榮を奪つた。また此をも彼をも

100世の噂さは或は此方よりし或は

名も變はる一陣の風に外ならず。

地

味にて斯へ云へるなるべし。

一二の五〇、五一と對照せよ。

29 嚢類の時代の引継ぎ來たる場合と28 二三の八〇、八一。

21 種類の時代の引繼ぎ來たる場合は然らざれども、勢

30 Cimabue、フィレンツェの藝術家にして伊太利距离の公正が、カットに委ねられたりき。彼の墓碑の銘に始祖たり。 一二四〇年頃生まれて一三〇二年頃死の上の大手がある道りをできません。 インツェの藝術家にして伊太利距离の

Credidit ut Cimabos picturae castra tenere, Sie tenuit vivens: nune tenet astra poli.

ん。とあり。ダンテとれた念頭に置きて書きしものたら

31 Giotto. フィレンツェの Bargello (長官邸) にと親交ありしと傳へらる。 ワザリに據れば彼は父女。 シテー 介像をフィレンツェの大薬術家。 ダンテより一年

32か米ド・ケ州ニチェルリの「二六の九二」の一二七六年にテ自ら彼を師と稱せり(二六の九二)の一二七六年に死す。

33 グキド・カブルカンティ。 フィレンツェの詩人にしてダンテの親友なり。地、一〇の六〇註參照。一三〇一年に死す。

107

聴きつゝ私は顔を下に垂れた。

己を抑へる重量の下に扭れた。すると語つた者でなく、其中の一人が

かくて私を見私を識つて呼び

辛うじて眼を堅く据ゑた。 彼等と共に全く届まり行く私に

私は云つた「おし汝はアゴッピオの譽」

フランコの描く書面は微笑み優さる。彼は云つた「兄弟よ、ポロニッ人

草紀せんとの大望にわが心は響は今や全く彼のものにて俺のは其幾分に過ぎず

げに俺は彼に慇懃でなかつた。 いった。

衛節家なりき。一二九九年死。

22 或はグッピオ。 ウルピノ市より南方程遠からざるの一三六十八)。 こゝにダンテの風むは深くこれを身に感ぜし散ならん。

23. Alluminar. 佛蘭四語の o liminer 伊太 利亚語の miniare にして、この語は minium (赤鉛)より出 づっ

24 オデリシの弟子。 弟子の畵才今やその師に優る。 5ず、痼疾せる名譽の本能会く消え失せずして「獲分」と向ほ云へり。

を拒みたり。 なお子の卓越せる才能を知りつ→生前これを承認する

善き謙虚の心にし、またわが大慢心を平にする。そこで私は彼に「汝の真の言葉は私を

1三0然し今汝の述べたのは誰のことであるか」。

收めやうとしたので彼はて、にゐる。僭越にも全シエナをおのが手に

死後は常に斯く彼は歩み、休みなしに

全るで私は「改惰めざるに人生の際端を 償ひとして斯かる金銭を拂ふ」。

迎へる靈が下の彼方に住み

10世に活きし日數の過ぎ去るまで

如何にして彼は容されて此處に來たのかし。

てくに登り得ずとすれば

42四の一二七一三二。

pappo や dindi を棄てる前に

幾于の名聲を汝は加へるであらうぞ。 解くとても、一千年を經るまへに

對する験の瞬よりも此は尚ほ短い間である。 永遠に比べんか、天のいと遅くめぐる環に

110.名を全トスカナが鳴らしたがわが前に道をいと僅かに辿る者の

今や彼はシエナにも殆んど囁かれず。

身を鬻ぐに代へてその頃は

誇りをりしフィレンツーの憤怒が滅びた時

彼はシェナの君のであつた。

汝等の名は現れて消ゆる草の

色にして強く地より生え

annar (金錢)。即ちまだ嬰兒時代に死ぬよりも。地三二の九参照。 pappoは pane(麵麭)dindiは

37年老いて肉萎えし時の

11の一五。但し實際は二萬六千年なり。 子年に漸く一周すと古代人は信じゐたりき。饗宴籍

遺滅せり。地一○の八五註³
のルティの職役に狂亂のフィレンツェ人は全然

幻太陽。 即ち時を經ればの意。

第十二曲

9 一

乗しき教師の許した處まで 転を負ひゆく牡牛のごとく
駅び

荷を負へるこの靈と共に私は行った。

然し「彼を棄て、過ぎ越せ

己が艇を押進めねばならね」と彼が云つた時蓋し此處は須らく帆と櫂とにて能ふ限り

わが思いは首垂れ且つ衰へてはゐたが

おが體を再び真直にした。

10 私は進み、いそいそとわが師の

歩みに從ひ、既にふたりとも

S

かに

も身軽に見えた

その時彼は私に云った「眼を下に向けよ。

へ輕く、登ること平野を行くよりも易し。 「心の貧しき者は禍なり」の誦唱きこゆ。これよりダンテの身はいよ「心の貧しき者は禍なり」の誦唱きこゆ。これよりダンテの身はいよいから(途の面には数々の傲慢者の刻まれあるを見る。 やがて曉の踏みゆく途の面には数々の傲慢者の刻まれあるを見る。 やがて曉の

1 redagogo: 家々を訊ねて小供を集め放課後また家々

現と肉體の全力を用めて前進せよとの意なり。

3恐らく自らの傲慢心の强きを反省して。

4石を負へる人々に比べて。

彼は云つた「榮譽を極めて活きてゐた時・

役はシエナのカーボに衝き立つた。 凡ての耻を顧みず、自ら進んで

刑罰より己が友を引き出さうとして

彼はその全血管を頭はした。

180 しかし幾時も經ざるに汝の隣人が働きての上俺は語らず、またわが言葉の朧なるを知る。

ての行が彼に制限を除いたのである。 かくて汝はこのことを詳かになし得るであらう。

43シェナ市最大の廣場。

は女人ギニアなる者はリアコッツホにてアンジウのシ やルル(カルロ一世)の俘虜となる。サルアニ彼な死別より数はんため課金一萬「フィオリノ」を獲んため中を乞食に扮し廣場に立ちて公衆に訴へたりを

6 の無意の子子では、一大〇〇はん。天、一七の五八一六〇〇はん。天、一七の五八一六〇〇

60 この譲虚の行為が懺改遷延者の前煉獄に止まってしたの譲虚の行為が懺改遷延者の前煉獄に止まってし



埋められる者の記念にとて 汝の蹠の床を見るべきである」。 道を安らかならしめんため宜しく

ありし昔の狀が刻まれる その地上の墳墓に

追憶に心刺されて彼等のため

そのため、誠ある者のみを唆る

0

姿がこゝに山より出る道 そのごとく(巧みはこれに愛る) 屢人がそこに泣

一面に像られあるを私は見た。

落下した彼を一方に見た。 貴く造られ、電のごとく天より 私は他の被造物に優つて

私はブリアレオが天來の電光に貫かれ

地三一の九八社の

5足の踏み行く道の面o

6日本の墓のどとく石碑を建てず、地上と水平に石を 敷きて慕標とし表面に種々故人を偲ぶ出來事を彫刻 せるもの。

10神々に遊ひし偉大なる巨人。 8以下ダンテは傲慢の典型を聖書と教會の歴史並びに 7前曲に於て見しととく、削られし山腹の面には鎌雄 魔王ルチフェロ(サタナ)。「イエス云ひけるは我電 のごとくサタンの天より限つるを見し」路加傳一〇 mostrava (それが示しぬた)にて始まる。而して大 は見たン、次の三聯は〇(おこ)、その次の三聯は の典型刻まれ、傲慢の路靈をしてこれを踏ましむ。 の模範白き大理石に彫刻され、今環道の面には傲慢 一般歴史より交互に探る。 初めの三聯はvede (私 一一六三行にて以上の三語を集めて括る。

重々しく他方に横たはるを見た。 ルテとが尚も武装し、その父の周圍にあつて 私はティムプレオを見た。私はパルラデと

~

万 人等の散亂せる肢體を眺めをるを見た。

ネイブロットがセンナアルにて彼と共に 私は偉大なる勞作の麓に感へる如

誇りし民を眺めをるを見た。

七人の子の間に汝が途の上に刻まれあるを >= オベよ、殺されし七人の子と

かに憂ひの眼にて私は見しぞ。

四の、お、サウルよ、その後雨をも露をも 覺えざるデェルボエ山上に自らの剣にて

死せる汝がいかに此處に現れしぞ。 へ狂亂のアラニょよ、自ら造り

19

一四五の地、一七の一八」れしリディアの處女。「メタモルフォシ」六の一一機織をもつてミネルア女神を侮り遂に蛛蜘に化せら

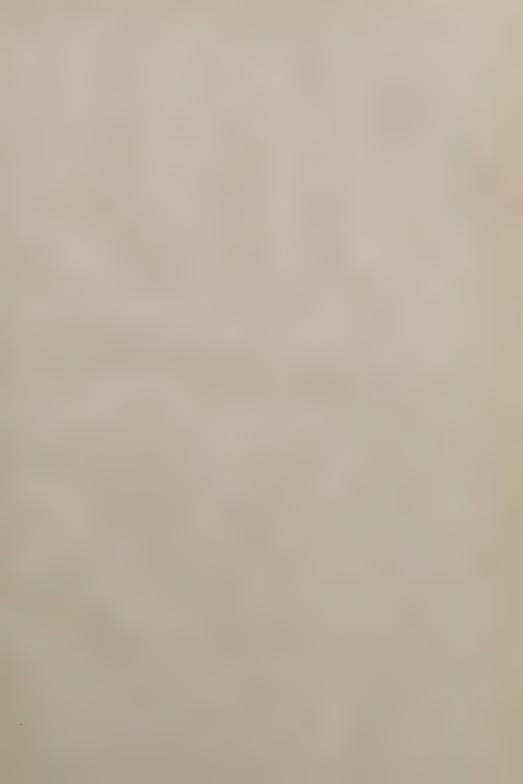
11元來はトゥロイアより程遠からぬ處の名にして此處 500 にアポルロの神殿ありの と」にてはアポルロ神の

13 軍神。 以上三神は巨人等を撃破せり。12 智慧の女神ミネルブの希臘省。 の散亂せる肢體を眺めをるなり。 故に互

16 14 パベルの塔。 創世記第十一章。 15 地、三一の七七註。 しぬ。 バベルの塔を建て

17 テェベ王アフィオネの妻。 十四子を有することを らはチオヹ神によりて石に化せられたり。この石夏 を悔りしため復讎として十四子は射殺されニオペ白 誇りアポルロとディアナの二子のみを有せしラトナ 六一三一二。 の間絶えず涙を注ぐと。「メタモルフォシ」六の一四

18 …そはサウルの楯膏を注がずして彼處に葉てらる」 猶太國最初の王。 アの山よ願はくば汝の上に雨露降ることあらざれことり共上に伏したり」撒母耳前書三一の四「ギルボ 武器をとる者いたく恐れて背んぜざればサウル剱を 汝の剱を抜き其をもて我を刺しとほせ……然れども ボア山上に至り「サウル武器を採る者に云ひけるは ペリシテ人と戰ひて敗化しギル





自ら書ひし業の屑のうへに惨ましくも

既に半ば蛛螂となれる汝を私は見た。

嚇すとも見えず、却つて驚愕に充ちて きった。

人の追ふに先だち、車がこれを運び去る。

尙またアルメネがその母に

一 不吉な飾りの價ひ高さを

見せた狀を堅い鋪道が示してゐた。

殺倒せし狀、また彼をそこに

死棄せし狀を示してゐた。

チロに向かひ「汝は血に渴く、されば

オロフェルネの殺されし後、アッシリア人果たせし残害と酷き鑑を示してゐた。

20イスラエルの王レハペアム。 民の減税の要求を担当して、一人。 とし、一人。 民の減税の要求のでいるに逃げたり」列王組略ぎて共車にのぼりエルサレムに逃げたり」列王組略をした。 といる。 民の減税の要求を担

21希臘のト筮者アンフィアラオ己が死を先見してテエスを殺せり。天、四の一〇三一五。 アンフィアラオ戦ひに行きて死せり(地、二〇の三アンフィアラオ戦ひに行きて死せり(地、二〇の三四註)。 子アルメネこれを悲しみ怒り て母エリフィーを殺せり。天、四の一〇三一五。

ってきないとと、女子子の一を行っているとないとというではあり、「その神ニスログの家にありすなはちニネペに歸り、「その神ニスログの家にありすなはちニネペに歸り、「その神ニスログの家にありすなはちニネペに歸り、「その神ニスログの家にありるアッシリアの王。」アッシリア人イスラエル人と戦いるアッシリアの王。

23スキタエ族の女王。 波斯帝國の創業者チロ(クロでトゥス一の二一四。ことに「鑑」とあるは「利にて汝を充ち足らす」と云へりと。Oxosius 二の七のにて汝を充ち足らす」と云へりと。Oxosius 二の七のハロドトゥス一の二一四。ことに「鑑」とあるは「利野の鑑」の謂なり。

21アッシリア王ネプカデネザルの軍將。 彼翁太に攻り。「ユディトウ」一五の一。 彼女城壁に立ちて首級を見するやアッシリア人 乃ち敗 走して 犬いに 殺されたするやアッシリア王ネプカデネザルの軍將。 彼獪太に攻27アッシリア王ネプカデネザルの軍將。 彼獪太に攻

が 遺走せし狀を示してゐた。

賤しい汝の像をまざまざと見せしぞ。 キハイリオンよ、いかにうらぶれておハイアが灰となり洞となりをるを私は見た。

こくに凡ゆる精妙な天才を愕かす

いかなる名匠が存したか。

誇りがな面して行き、汝等の禍の徑の なればエザの子等よ、傲慢なれ

40

解かれざる心の度りしよりも多く いまっている。 な等の顔を垂るるなかれ。

つも潰走せりとの できればアッシリア軍勢の屍骸さ

26 長き戦争のためトウロイアは慶爐となれり。

つ。地。一の七三。 その建業者 Ius の名より出

23 ダンテに以上の人物乃至事件の単に彫刻を見しに過ぎず。 されど彫刻極めて精妙なれば、實際以上の人物乃至事件の日曜者と雖々ダンテほどにその真相を見たりと云ふを得ず。

10他に氣をとらるる心。四の九つ



朝の星のごとさものゝ見える

ち 美しき被造物が我等さして來た。

云のた「來たれ、近くてくに段がある。 彼は腕を擴げ、やがて翼を擴げて

ての報知に應じ來る者が甚だ少ない。 また今より登りは易し」。

おく高飛すべく生まれし人類

汝等何ゆゑに些かなる風に斯く倒れるぞ。 彼は巖の裂けた處へわれらを導いた。

こゝにて彼はわが額を翼にてうち

100)V ית くて前途の安全を私に約束した。 ンテの上より、 善く

導かれし邑を瞰下する會堂の 坐する山に登らうとして右手に

殊 のほかに験しい上り路が碎けて階となる。

> 34 異本、 招き (invito)?

35 しからんつ 葉を發せし例他になき故、ダンテの言葉とする方正 もあり。 然し浮罪山の道を知らす天使が斯かる言 九十四行より六行までを天使の言葉の繼續とする人

38フィレンツェのアルノ河に騒る石橋。 37かくてダンテの額よりP字を一つ消し、傲慢罪の淨35第二臺地への登り口。 断く呼べり。現今はポンテ・アルレ・グラツィエと云 はれ、ダンテ時代に存せし橋の中現在存する唯一の 架けられしものにて當時の同市の長官の名に因みて められし證となす。以下各臺地にて斯くなさる。

一二二七年

40 サン・ミニアト會堂のある山。

われらは山を既に回りをり

太陽の路もいと多く盡きてゐた頃

絶えず心をとめて前に進む彼が

始めた「頭を擧げよ、旣早や

われらの方に來らんと身構ふ一天使をかく茫然として行くべき時でない。

第六の侍婢の歸るを見よ。彼方に見よ。一日の務より

20

彼が喜んで我等を上に遣すやう

思へこの日の永久に再び明けざるを」。汝婆と顔とを敬ひに飾れ。

彼の言葉は私に朧たり得なかつた。良く受けたので、この事につき良く受けたので、この事につき

白き衣を着、顔には顫へる 彼の言葉は私に朧たり得なかつた。

11 第六時は終らんとす。 即ち正午に近し。第十曲の一四行以下よりしてダンテはこの臺地に約一時間ねたり。かく滯留の短かかりしは第七臺地のほかになし。これ恐らく止まらずに歩みつム諸霊と語りしによるものならん。

ざるに用づ」饗宴篇四の二° らの凡ての失策はその原因を探れば時の用法を知ら22年ルヂリオは屢この誠をダンテに與へたり。「われ

わが身より取りあげられたので、歩みつゝ

1:10 殆んど疲れを受けないのかし 破は答へた「消えんばかりにして尚も

汝の顔に殘れる六つのPが

全く抹されし一字のごとくなる時

汝の足は善く意志に打ち勝たれて

たい疲れを覺えぬのみならず

推し上げられることが喜びとならう」。 頭に物を着けて行く人が

自らは知らず、たべ他の人の

相圖によつてそれと気付き

眼の遂げ得ぬ務を果たす。

150

かくて手の扶けによって確め、

探りあて♪

そのごとく私もその時心づき

即ち右手の指をひらさ

一神學網要」二の一六七つ

お傲慢罪を示す一下字が抹さるるや残りの六下字は微 かになれり。 去る。かくて傲慢は一切の悪罪の起源となるなり。 主として傲慢により我等は神に背き

時代に造られたものである。

そのごとく次の圓より甚だ急に

此方彼方に高い巖が食み出てゐる。

そこへ我等の身を向けた時

名狀すべからざるさまに諸の聲が

あっての人口と地獄の人口とは、

既にして我等は聖き階より登り下の彼處にては猛き哭きにつれて入る。

嚢に 平野に て感じたよりも遙かに

身が輕くなったやうに見えた。

そこで私は「師よ語れ、何の重さものが

4. 記録を抹殺し桝目を盗みて不正の利を聞らざりし時

21心の貧しき者は福なり」馬太傳五の三。

第十三曲

災を安は悅んだ」とダンテに語る。
「なのが幸運よりも遙かに他人の好家の心情を穿てる言葉を發して「おのが幸運よりも遙かに他人の靈瞼を鐵線に縫ひあはされて沿罪す。その中シエナの貴女サビア族の諸見渡す限り凡て鉛色なる第二豪地にダンテは上る。こ、に嫉妬の諸

階の頂に我等は達したが

登れ 挽かれて第二の臺地となる。 ば人より悪を除く山がてゝに

弧 0) 彎曲の少し急なるほかは 軒蛇腹に等し

第

0

い軒蛇 腹

2 > 17 小山 の周圍を続る。

2 1 こには影もなく見らるべき像もない。

2

岩 道も斯くなだらかに見えた。 の鉛色を帯びて、堤も斯く見え

詩人は説いた「訊ねんとて此處に

10

民を俟たんか、或は我等が 遅れ過ぎんことを俺は恐れる」。

かくて彼は眼を太陽に堅く注ぎ

1臺地は上のもの程山をめぐる彎曲の度强し。

第一臺地に於けるが如き人物乃至事件の彫刻 て彫刻のごとき眼にて見るべきものは無用なるな 今や臉を鐵線にて縫ひ合はされて物を見得ずの との第二臺地には嫉妬家即ち眼を悪用して罪を犯し 從つ

4 道をロ 3

嫉妬の表象たる色o

切りつけた文字のたと六つあるを識った。

鍵をもつ者のわが顳顬の上に

0 反復しつく我等のうしろに行つた。

叫んで過ぎ、これも亦止まらなかつた。他の聲が「我はオレステなり」とその距つて全く聞こえなくなる前に

8

云った「汝等に害を加へし者を愛せよ」。まだ私が訊ねをるうちに、見よ第三の聲が

すると善き師は「この環は

鞭の繩が愛によって打たれる。嫉妬の罪を答つ。されば

馬銜の響きは此に違ふべきである。靴の綱カ変にょつて打たれる。

四 0

さて空氣越しに良く堅く眼を注げ。

7「彼等に葡萄酒なし」約翰傳二の三。 ガリラヤのカウ。この仁慈の語を掲げて仁慈の反對なる嫉妬を反明。この仁慈の語を掲げて仁慈の反對なる嫉妬を反明。この仁慈の語を掲げて仁慈の反對なる嫉妬を反明を指する

共に教はれたり。 キケロの「友情論」とって兩人の姉妹にして巫女なるイフィヂェニアによつて兩人忍びずしてその然らざる旨を語りしが結果オレステスがずしてその然らざる旨を語りしが結果オレステは希臘の勇將アかメムノネの子なり。 彼オレステは希臘の勇將アかメムノネの子なり。 彼

馬太傳五の四四。僧む者を善視し虐遇迫害する者のために祈禱せよ」『汝等の敵ないつくしみ汝等を詛ふ者を親し汝等を

9

10以上見えざる壁の叫びし仁慈の模範。 これは魂を

12 養地より豪地への登り道なり。 靈魂の淨罪して登のどとく魂を制御して嫉妬を控えしむ。のどとく魂を制御して嫉妬を控えしむ。 とく嫉妬の範例 (一四の一四三十四七)。 饗宴篇

右側を中心として動き

「おゝわが賴みとして此新しき道に入る身の左の部分をめぐらした。

との内では事かとない。 は美なる光よ、汝われらを導きたまへ

この内には導きを要すれば。

常に導者たるべし一と皮が云った。
他の理が逆に促がさぬかぎり、汝の光線は他の理が逆に促がさぬかぎり、汝の光線は

=

勇める意志ゆゑに束の間に 此方にて算へば、一哩ほど此處を 常に導者たるべし」と彼が云った。

すると諸の靈が愛の筵への慇懃な 我等は既に行つてゐた。

招きを告げつゝ我等の方に翔り

第一聲は翔り過ぎて高らかに 來るのが開えた。但し見えはしなかつた。

5神0

6地上0

ひとりは他の者を肩にて支へ

斯くのでとく赦罪の札場に ない。 ないまた堤に支へられてゐた。 ないまた。

頭を下げ、必要物を乞ふったというでは、ないではないである。

それに劣らず、願求める姿にて

3. は大陽が無益であるやうに いた人々の心に憐憫を起こさすためである。

天の光も自ら賜とはなるまい。

売鷹に行ふやうに、皆の験がも0 蓋し静かに止まらぬので

自らは見られずに彼等を見て行くは

鐵線にて貫き縫はれてゐた。

19 教會の祭または赦罪の日に赦罪券の渡さるる處の入なり。

18 管て地上にて反日嫉視しあひし者今共に相支へあふ

日に施奥を乞ふ丐食。日に施興をの意さる

20 當時鷹を馴らすために瞼を針金にて縫ひ合はしたり

我等のまへに民が坐し、皆巖窟に

沿ふてすわり居るを汝は見るであらう」。

わが前を看、岩と異ならざる色のそこで私は前よりも廣く眼を聞いた。

外套を纏へる諸の影を見た。

やがて我等がなほ少し前に進んだ時

「ミケレ」、「彼得」及び全聖徒を叫ぶを私は聞いた。彼等が「マリアよ我等の爲に耐れ」と叫び

今なほ地を歩む者にして私の見たてとに

心刺されて同情を起てさぬほど

蓋し彼等の近くに至り、その舉動が 冷酷な人があるとは私は信じない。

定かに私に達した時、眼より

彼等は粗き悲衣に蔽はると見え 重い憂ひが注ぎ出された。

13 鉛色。

14 嫉妬の諸靈の

徒を讃美し、また此に祈願す。 使ミカエルと諸天使、聖彼得と使徒等、最後に諸聖 が光づ三位一體の神を称へ、次いで聖母マリア、首天

16 淚。

17 cilicio. 喪または懺悔の時に纏ふ衣。

泡を解かし、かくて記憶の流

九のこれを傳ひて清らかに下らんことを。

これは私に嬉しく又貴く、もし此を

乞ふ告げよ、こゝ汝等の中にラティオの魂がゐるか

私が知れば恐らく彼にる幸であらう」。 おくわが兄弟よ、いづれる皆一の真の

都の市民である。然し汝の云はうとするは 巡禮として伊太利亞に住んだ者のことである」。

私の立つてゐた少し先のところより

答へとして斯く私に聞えたやうであった。

そこでわが言葉の聞こえるやう其方に近寄った。

100衆のうちに物待ち顔な一つの影を

私は見た。(もし又如何といふ人あれば)

瞽のごとく顎を上に擧げてゐた。

「登るため身を馴らす靈よ、汝もし

27 伊太利亞。 26 洗ひ除かれんことをo レエテの流(二六の一〇七)に難の記憶が良心より

23ダンテ地上に消息を齎らし、その者の友等所を捧げ 彼の煉獄滞在を短縮せしめん。

29 39 或は、旅人として。「我等はこ」に在りて恒にたる り」以弗川書二の一九。 「汝等は……聖徒と同じ邦また神の家に屬する者な 書一三の一四。 つべき都なし、只來たらんとする都を求む」希伯冰

後辱を加へるやうに思はれたので

心の云はうと願ふことを彼は良く知つてゐた。 私はわが賢き顧問に身をむけた。

彼は云つた「語れ、短く、また鋭く」とで私の訊ねるのを待たずに

園せれぬため墜落の恐れある側に ギルデリオは私を伴ひ、縁にて

ろ

竹ろしき縫目より涙が滲み ない。 はこれでであるのんだ。

語の影がわが他の方にゐた。 類を濡してゐた敬虔な

見ること疑いなく、その願望の彼等に身を向けて私は始めた「おゝ高さ光を

ひたすら此を求むる民よ

願くは恩寵速かに汝等の良心の

21 ギルデリオの

22 argut). 要點をo

23臺地の経壁する際端。

ダンテの左即ち山腹に凭れ居れりo はボルデリオはダンテの右即ち臺地の際端に、諸蠶は

2万三の七三。

苦き徑を歸った。妾は追擊を見て

何ものも敵はざる喜悦をおぼえた。 かくて少し穏かなりとて鶫のするやうに

1 = 0

大膽な顔を上にむけて神に

わが生涯の際に及んで神との和合を願つた。 『今より妾は汝を恐れず』と叫んだ。 ル・ピッティナニオが

仁愛の心より私をいたみじれるい 然しピエ

その聖台前の中に私を記憶しなかったならば

減し得られなかったであらう。 わが負債は改悔によって

三 然し我等の狀を訊ね行き

解かれた眼を携ふと思はれ

また呼吸しつゝ語らう汝は 誰 かし。

私は云った「やがて此處にて眼が

四の一川川

36 份ほ前燥獄にあるべきなりきの

34 伊太利亞の古い俗諺によれば、一月に氣候の稍穩か del merlo (鶫の日) と呼ばれたり。 悔せりと。これよりして一月の最終三日は giorni 叫びしが、やがて冬の未だ全く終らざりしを見て後 になるを見て鶫は飛び去り「もはや我意とせず」と

35シェナ近在の人にして貧しき櫛町なりしが正直善行 ŋ の人にして仁慈に富み、後フランチェスコ教園に入 一二八九年に死せり。

名によって自らとすらさは、虚により又は

此等の人々と共にわが罪の生命を潔めその者が答へた「妾はシエナのものにて

サピアと呼ばれたが妾は かいて神の己を我等に容し給はんことを祈る。

遙かに他人の災を妾は悦んだ。

汝を欺くと思はれぬため、汝に

既にわが歳の拱門の傾ける頃。云ったやらに妾が愚かであったかを聞け。

野にてその敵に會ひるが市民達はコーレに近き

彼等はそこに敗北し、遁走の安は神の聖旨の果たされんことを祈つた。

だかじ・サラチニなる者の妻にして一 二八九年前に紅シェナの貴女。 カスティリオンチェルロの領主ギニ

32三十五歳過ぎ。 地一の一註。

37・サルプニ殺さる。 一一の一二一一回。 37・サルプニ殺さる。 一一の一二一一間。 エンツァ

1三0 汝よくわが近親にわが名を復興せよ。

望みを共處に失ふ虚しさ民のうちにディアナ河發見に優る望みをタラモネに置き

(然しそこに提督等の睹するとが最も大であらう)

を購求せり。然も工事難と疫病のため物にたらざり 41シェナ電界の一小港。 ピサ人及びデェノア人の競失望せり。 失望せり。 ピサ人及びデェノア人の競失望せり。

されしも就中提督等 (ammiragliー受負人の意かは、二九の一二一を見よ。は地、二九の一二一を見よ。 シェナ人に對するダンテの朝属に就てはシェナ人。 シェナ人に對するダンテの朝属に就て

最も多くを失へり、即ち疫病のため生命を失へりと

わが魂の不安に思ふ遙かにこれその嫉妬に曲られてした答の少さに據る。

すると彼女は私に「されば若し汝が歸り下ると既に下なる荷が私を壓する。 大なる恐れは下の帯責にて

TEO 思ふとすれば、とゝ我等の中へ高く汝を導いたのは誰か」。

動かさんてとを望まば、私に願へよ」。

これ神の汝を愛する大なる徴である。 彼女は答へた「さて此は聞くも奇しさこと哉

されば時に汝の祈にて妾を扶けよ。

37 ダンテは嫉妬罪に於て甚だしからざれば死後との第二素地に潛罪する期日は短かし、然しダンテは傲慢殴かりし故「下の苛責」即ち第一臺地に淨罪する期間弱かりし故「下の苛責」即ち第一臺地に淨罪する期間弱いをinde-cmoso(その學識について彼は稍不遜にして人を嫌惡侮蔑したりき)「ギャラニ」九の一三六。

3の地上にいり汝 友等の處にわが足を運びて訪れ、汝

差し未曾有の事と稱すべき汝の恩寵により

汝は我等をいたく怪しましめる」。

小さら流が中央トスカナを貫いて漂浪ひそこで私は「ファルテロナに起こる

百哩の水路もこれを盡くさず。

このほとりより此身を俺は齎らす。

俺の誰であるかを告げるは徒らな言であらう」。 10 わが名下だ大なる響きをなさねば

「わが智よく汝の意に徹しうるとせばその時曩に語った者が私に答へた

汝はアルノ河のことを云ふ」。

怕ろしきものに向かって人のするやうにする他のひとりが彼に云つた「恰も

何ゆゑこの者はこの河の名を蔽すのか」。

かく認ねられた影は自ら斯く

国に赴くととを指す。 肉身のまゝ煉獄を過ぎ天

B アルンプロの全生長は均百五十里。 ファルノ河。 (饗宴篇四の一一)。 グンテこれに登りしことありてアルノ河。

9フィレンツェロー 地、二三の九四、五。8アルルノ河の全延長は約百五十哩。

Daccarno. 肉を貫くの意。

死が翔けらし ぬ前に

我等の山をめぐり、

まゝに

眼 開け閉ぢする此者は誰ぞ」。

誰 か知られば、彼の獨りでない のを俺は知る。

また彼に語らすやう雅かに挨拶せよ」。 汝の方彼に近きゆる、 彼に訊ね t

かく二つの靈が相互ひに凭れつ

右手の處にて私のことを論じあってわた。

それから私に語るべく顔を仰向けて

10 ひとりが云つた「おう尚も

汝が來、 慈悲によって我等を慰め、 體と結んで天の方に行く また誰であるかを告げよ 、魂よ 何處より

き響して嫉妬の範例聞こゆ。

「な知るや、一靈徐ろにアルノ流域に住む人民の腐敗墮落を痛駡してを知るや、一靈徐ろにアルノ流域に住む人民の腐敗墮落を痛駡して肉身を携へて煉獄を辿るダンデを怪しめる二靈彼がアルノ河畔の者

1 煉獄に登るは死者のみなるにダンテは肉身を以 來たる。 これを怪しみて斯く云へるなり。

この臺地に浮罪するものの瞼は鐵線にて縫ひあはさ 由に開閉す。 るゝに〈一三の七〇十七二〉ダンテは然らずして自

3が非ド・デル・ドウカ(八一行)とリニ、エリ・デ・カルボ 4盲人のなすごとく。 者はギベルリニ黨後者はグェルフィ黨なりき。 凭れあへり (七の一二四)o て地上に反目し合へりし彼等今煉獄にありて相互に が語りリニエリ聴くの (八八行)。 共に十二世紀のロマニア人にして前 1101010 この曲に於て專らか弁

寧ろ橡に適はしい汚い豚の間へ

まづその貧しい徑を辿る。

かくて降り來て、 おのが力 0

悔ってこれに向かい鼻端を扭ぢる。 許すよりも强く唸る野犬に遇い

西 この呪はれし不運な溝は

落ちゆきていよくく大きくなるにつれ

犬が狼と成るのを見る。 更に多くの窪める淵をくだり

欺瞞に充ち滿つる狐どもに遇よ。 彼等には自らを抑へる才の恐れがない。

他に聴く者があるとも俺は語るを止めず。

真の靈が俺に解くてとを尚も心に 留めんか、この者の爲になるであらう。

猛き流の堤のうへに

20 カセンティノの民。 る地を過ぐっ アルノ河は先づこの民の住め

21アレッツオの民 ずフィ レンツェ人と争ひ、 彼等は己が力をも圖らずに絕え しかも永くこれに臣從せ

22アルノ河はアレッツオにて急に西方に曲がる。

23アルノ河0

21フィレンツェの民。 、五の六つ。 特にグェルフィ黨の人々(天、二

25ピサの民の

26 ダンテ。 聽きし居るなり。 が非ド のリニエリに語るをダンテは立ち

27アルノ河の

三0 この名の谿は實に滅ぶべきである。

山脈は此處に極めて豊かにてった。

收めて返すところに亘り なく諸の流れの受けて伴ひゆく かの海より天の乾あげるものを がの海より天の乾あげるものを がの海より天の乾あげるものを

凡ての民は處の不運によってか

斯く蛇のごとく敵として德を逐ひだす。

かくてこの惨ましき谿の住民は

人の用に造られた何の食物よりも彼等を養つたやらに見える。

11アルノ流域の谿

13 水に。(或は一層地理學的にこれより出づ連脈の意等鋏を潜りてシチリア嶋の山脈となる。 天、八の六九。アペンニノ山脈はメッシナリシチリア嶋東北の岬。 現今はカポ・デル・ファロと

14 アペンニノ山脈中アルノ河の水源地となる部分に優っに解する人もあり)?

50日光によりて蒸發するもの即ち水のこと。 つて水豐かなる處は殆んどなし。

16海。 海より蒸酸せし水は雨となって地に落ち諸川これを海に注ぎ返す。以上の複雑せる言葉は、アル

17 氣候風土の影響が或は悪しき風俗によりてかっ

18アルノ上流の谷のカセンティノの住民。

する力を有したりき。 アエア島に住み人を獣に化

彼等の名を知らんことを私に願はしめたので

所を添へてこのことを求めた。

すると初め私に語った霊が

然し神がその斯く大なる恩寵の汝に汝のために俺のなすに至ることを汝は願ふ。

わが血は嫉妬にいたく燃えされば知れ、俺はグ*ド・デル・ドャカである。

70

もし人の悦ぶを見んか

鉛当に俺の覆はれるを汝は見たであらう。

おゝ人類よ、提携を示けざるを もゝ人類よ、提携を示けざるを もことである。

それはリニエリである。これは得ざるところに何故に心を置くぞ。

33ダンテは自ら名乘ることを好まざりき(二〇及び二一行を見よ)。 然かも皺に名乘らんことを求む。

一九九年リミニの法官たりの彼について傳へらる、一九九年リミニの法官たりの彼について傳へらる、

後等の肉を活きたま、彼は賣る。 *○ 怖れしめる汝の孫を俺は見る。

悲しさ林より血に染みて 多くの者よりは生命を、己よりは響を奪ふ。 かくて老いだる野獸のごとく彼等を屠る。

憂ふべき災の報知を聞き 原の狀に再び繁らぬやうにした」。 彼は出で、それより一千年

耳を欹てる者の顔が飢れるやうに危險が何方より己を嚙むやと

ての言葉を思ひめぐらして

お 聽からとして振り向いた他の魂が

ひとりの言葉と他のひとりの貌とがることの観れて悲しむを私は見た。

23フィレンツェ人。 特にグェルフィ 黨

30 防路を受けて彼よ白黴を喰の黒黴に変とり。 でり(天、六の一〇六)。 通常ダンテは白かエルフィ 薫と稱せらるが鼓にダンテはこれを共に狼と呼びり(天、六の一〇六)。

31フィレンツェ0

ウゴリノ・ダッツオ、フェデリコ・ティニオンと

その一隊、共に後嗣なき一族なる トゥラエルサラ家とアナスタチ家

貴女達と騎士達、また我等に愛と

受けた處の、斯くも人情の 慇懃とを包み、心よりの苦樂を

一一 邪虫になったのを憶ひ出でゝ俺が 哭くとも、トスカナ人よ、汝怪しむ勿れ。

汝の一族と多くの民が去つたのに おゝブレッティノロよ、罪なからんため

何ゆゑに汝は逃げて行かないのか。

尚も斯かる伯雷達を生まんと甚く煩ふ。 5た ちょ カストゥロカロは悪しく、コニオは更に悪しく パニァカゲルに既早子等のなきは善し。

悪鬼が去りもせば、バガニャ家は

47リミニの貴族の 46ファエングァの富者なりしとの

48 雨家共にラヹンナの貴族にしてギベルリニ黨

49 ダンテロ

50ラボンナの城にして此曲に語るグサドの住みし處。 現今はベルティノロと呼ばる。

51管でこの處よりギベルリニ黨追放されしことあり。 イモラとラヹンナの間にあり。 チニ家にしてギベルリニ黨つ それを指すものか。 領主は伯爵マラギ

52

53ロマニアの城の領主オルデラッフィ家はギベルリニ

54 イモラに近き城っ 領主はグェルフィ黨 マギナルド・デ・パガニ・ダ・スシナナっ地、二七の 五〇註。奸智故に「惡鬼」と呼ばれしと(ベンゴヌト) 一三〇二年死

真と楽しみとに要する徳を ったボオ河と山、海邊とレノ河の間にて なたボオ河と山、海邊とレノ河の間にて なたボオ河と山、海邊とレノ河の間にて なたがなかつた。

九()

剝がれたのは彼の血族のみでない。

乃ち此等の境の内には

毒々しい株が充ち満ちて、この後

善きリッパオとアルリゴ・マイナルディ

その耕されて絶をゆくも徐々であらう。

とエル・トゥラヹルサロとグ*ド・ディカル ピニア・何處

何日賤しき雑草の貴き枝なるひとりの100何日ひとりのファブロがボロニュに再び根を下すぞ。

グザド・ダ・プラタ、われらと共に活さしベルナルディン・ディ・フォスコがファエンジァに根を張るぞ。

40 39 アドゥリアティコ海岸。

41以下十三 世紀にロ マニッアを鎖せし人々 の名を擧

43 多分一二五四年及び一二五七年にピサの長官たりしり上がりものの意。

45ラヹンナの人にして財産家なりしと。

4一二四九年ピサの長官たり。 父は農夫なりきと。

融け去る雷のやうに逃げ去つた。忽ち雲が斷ち切られもせば

見よ、速かにつじく雷に

似た爆音を擧げて他の聲が云った

既にして四邊の空氣が靜まるや前にあらず、後の方に歩をむけた。

人をその制限内に止まるべきであった。彼は私に云つた「此等の嚴しき馬銜鍵により

諸天が汝を呼び、また汝等の周圍をめぐりとれば馬衛も呼笛も殆んど用をなるない。古されば馬衛も呼笛も殆んど用をなるない。

するを見て嫉妬せしため石に化せられたり°「メタモするを見て嫉妬せしため石に化せられたり°「メタモ

62 嫉妬の結果斯く恐るべき罪に陷めりし質例により。

63 悪魔。

1二の彼等について永久に貼りはしない。福とならら。しかも斯くして清き證が

おうウゴリノ・デ・ファントリニよ、汝の名は この上壁落してこれを暗からしめ得る者のいづる恐れなきゆゑに安らかである。 しかし今、トスカナ人よ、道を辿れ。 我等の話がわが心を甚く緊て、今や

いとしき魂等は我等の行くを聞きとつたと語るよりも泣くことが遙かに俺を樂します」。

やがて進んで発等のみとなるや我等を安んじて道に向かはしめた。

59

「凡をわれに遇ふ者我を殺さん」と電光が空氣を裂く時のやうな一の聲が「動かながない。」

われらに向かって來て云ひ

貴なる人物にして一二八二年に死せり°後嗣なし。 ガニ家の古き汚名を回復するには足らざるべし。

58 ダンテよっ

て進みゆくなり。

60創世記四の一四。 嫉妬ゆゑに弟アベルを殺せしカ

第十五曲

たえず小見のごとく戯れる圏が

今や太陽は夕に向かつて 示す距離に等しい行程を 第三時の終りと日の始め 0 間 12

彼處は晩、 殘すと見えた。 また山を廻 此處は夜年であつた。 つて既に夕陽にむかい

光線は我等の鼻の眞中を射てゐた。 真直に行いてゐたので い灼光に

わが額の壓せられるを覺え 不思議なてととて私 は昏迷した。

0

その時前よりも遙か

に强

そこでわが眉の頂の方に

テファノ其他耐忍者の模範を幻に見る。名第三臺地に至り、こゝに迫害者を赦し給へと祈りつゝ殉教せしスかくてヸルデリオ心靈的善の配分のことを論じつゝ忿怒者の浮罪すダンテ第二臺地を去らんとして「憐憫ある者は福なり」の聲を聞き、

太陽天。 る故に「小児のごとく戯る」といへるなり。 太陽の黄道は四季を通じて天空に上下す

CA SOLD" 午後六時より九時までな云ふ。

3 三時の終りに至る迄に運動するだけの距離が今との 單に、日沒前三時となり。 すれば午後三時のことなり。 時より夕(午後六時)まで残りをれりとなり。換官 Dantesque (ダンテ的) 云ひ廻しにて意味は 即ち太陽が日の出より第

4煉獄は晩なり。 時までを云ふ。 晩即ち vespro は午後三時より六

5伊太利亞は夜半なり。 の二五一七つ 利亞の間は九十度にして時間の差は六時間なり。三 ダンテによれば煉獄と伊太

ダンテは煉獄淨罪山を汎く遍歴するにあらずして只 り行くなり。 山の北半面即ち太陽の照らす方面を東より西へと巡 々山の北端にあるなり。 故に今夕陽を眞西に受くとあれば略

1至0 しかるに汝等の眼はたく地を眺める。

その永遠の美を汝等に示す。

眩ますとも汝怪しむなかれ。

三つてれは人を招きて登らん爲に來る使である。

斯かる者を見ることが間もなく汝に

苦しみでなく、凡そ自然が汝に

感ぜしめる悦びの極みとなるであらう」。

祝福まれし天使に我等が達した時

他の階よりは遙かに験しからざる階に入れよ」。 悦ばしき聲にて彼は云った「汝等こゝに

Beati misericordes また「骸べよ 既に其處を去つて我等が登るや

汝勝つ者よ」と後より彼は歌った。

わが師と私たじふたりは上に進み

進みつく彼の言葉より

そこで私は彼に身を向けて斯く訊ねた。 益を獲やうと私はなもふた。

> 11今まで登りし。 登るに從ひて浮罪山は嶮しさな減

12「憐憫ある者は福なり」馬太傳五の七0

13 馬太傳五の七、羅馬書一二の二一、約翰默示錄二の 七等参照

手を擧げて日傘にし

見るには過ぎる光を磨らさうとした。

下る狀とおなじく 下る狀とおなじく

その落つる石より。

三0 等しい距離をへだつることは

そのごとくわが前に反射する

光に撃たれたやうに覺え

ためにわが視覺は忽ち逃げた。

わが視覺を防がうとするも徒らにて、然も「柔しき父よ、これは何か、これに向かひ

彼は私に答へた「天の族が尚も汝を 此は我等の方に進むと見える」と私は云つた。

7一七の五二一四。

反射すとなり。 水面を照らす光總は同一の角度なもって

9 光學。

1) 天使3

客を願ちて持つもの少さよりも 大の疑ひがわが心にむらがる。

持主多ければいよく

たど地のものに注ぐゆる。富むとは如何にして有り得るや」。

上なる無限絕語の警は となる無限絕語の警は 真の光より汝は闇をあつめる。

愛に馳せさたり

かくて慈愛がいか程擴がるもれるのと熟するを見ていよく、己を與へる。

それを越えて永遠の力が増さりゆく。

また天上に志す民が多ければ

24神の無限の惠みは沈分によりて却て増加しゆくなり。を傳へて宛ら日光の鏡より鏡に反射するがごとし。を傳へて宛ら日光の鏡より鏡に反射するがごとし。

撃げて何を云はうとしたのか」。

害を彼は識る。されば其ための哭きを

減ぜんとして斯く彼の貴めるは怪しむに足らない。

伴侶たることによって減ずる方に

嫉妬が嗟嘆の鞴をうごかす。 なんぢらの願望が向くゆる。

上に差し向けんか、この恐れは然し至高の圏の愛が汝等の願望を

これ此處には『我等』と云ふ者多さに從ひなんぢらの胸に無くなるであらう。

慈愛の燃えることも多いからである。

私は云った「飢强まつて私は充たされず

14 グサド・デル・ドウカ 一四の八一社。

15 一四の八六、七参照。

1;嫉妬。

お果和嫉視すること」なるなり。 んと願ふ者多ければ多きほど各自の所得少かるべく は一般ない。 おり、名とない。 おり、名とない。 と願い者をしている。 という。

かふこと。 この語は屢天國篇に使用さる。 13 appuntare, 磁針の極を指すどとく一定の向方にむ

22ミルトン央樂園五の七一、二一 20神の愛に鰤まされて天上の事物即ら心靈的なる愛、 10神の愛に鰤まされて天上の事物即ら心靈的なる愛、 あることなし。 あることなし。 あることなし。 あることなし。

since good, the more Communicated, more abundant grows そは善は頒かたるに從ひ いまく、豐かになりゆく

23以上ギルデリオの説明によりてダンテの疑問は解決

20 なんぢ何ぞ我等に斯く行したるや

見よ、汝の父と我とは憂ひて

次にまたひとりの女が私に現れ 嚢に現れたものが消え失せた。

夏ひの滴らす水をその類に垂らして、人に向かひ大いに憤る時に湧いて

斯くも大なる争ひのありし色。また一切の云った「汝もしその名につき神々の間に

學藝の煥めさいづる邑の君にしませば

仇を復へし給へ、おくピシストッラトよ」。我等の娘を抱さしかの無法の腕に

100

穏やかな顔にて彼女に答へたすると仁慈にして柔和な君が現れ

33 基督十二歳の時兩親と共にエルレサムに行き一人神と疑せり。路加傳二の四八。マリアの怒らずして斯と柔しき言葉を弦に耐忍の模範とするなり。 く柔しき言葉を弦に耐忍の模範とするなり。

學と藝術の榮えし都なりき。 が途にアテネ女神(ミネルザ)の名に因むこと、なれが途にアテネ女神(ミネルザ)の名に因むこと、なれる 雅典。 この都の命名につき神々の間に争ひありし

37一青年彼等の娘を公然人前にて接吻せしを寒愁かり

良く愛する者も多く、又愛も多く

此と其他一切の願ひを悉く汝より除くであらう。やがて汝はベアトゥリチュを見、彼女は

风く消え去るやう事ら努めよ」。 へ0 五つの傷が、既にその二つのごとく

とこにて忽ち一の恍惚たる幻に 自ら次の間のうちに達しをるを見 かくて逍遥へる眼光が私を沈默せしめた。 などない。 からでは近点である。 からではいる。 からではない。 からない。 のもない。 からない。 のもない。 のもな。 のもない。 のもな。 のもな。 のもない。 のもな。

入口の上にひとりの貴女が 起は捉へられて、神殿に

25天、五の一〇五9

26 疑問。

27 これ人智の代表者なるギリデリオの全く配き明かし得ざる處、宜しく天啓の表象たるベアトッリチェを

個は消されたり。 第二臺地を過ぎし故にその中二ダンテは旣に第一、第二臺地を過ぎし故にその中二ダンテは旣に第一、第二臺地を過ぎし故にその中二

148

29第三の環道即ち忿怒家の淨罪する臺地。

②の数訓を異ふ。 ことを示すものか。此處にては嫉妬家に於けるごとく(一三の七註)、眼の力によらず、幻によつて励とく(一三の七註)、眼の力によらず、幻によつて励いした。 忽然は一時物を正しく見る力を失はしむ

31 in su l'entrar. 域は、入らんとして。



「我等を愛する者を我等罸せんか

我等の禍を願ふ者を我等は如何にすべきぞ」。

次になりの火に燃やされた民が

既に彼に負い被さる死のため
「「何れれない」と烈しく呼ぶを私は見た。

110 地上に彼の屈むを私は見たが

解く顔して4のが迫害者等を限を天への門となし、憐憫の心をいないます。

眠りより解かれた人のやうにする私をわが誤りの虚ならざることを融つた。

Si cos qui nos amant, interficiums, qui his faciemus, quibus edie sumus?

* Valerius Maximas vi. I. 1

93基督教會最初の殉教者ステファノベステバノン。彼の基督教會最初の殉教者ステファノベステバノン。彼

然しこの教訓は虚りに非ずして事實の再現なりきの現實と思ひしは誤りにて幻なりしことを悟りしが、4の我に歸り四國の事物を見廻して、今まで見しことな

見るに至つてわが導者は云つた

1三0「身を支へ得ない程汝を患ますは何か

酒か眠りによろめく人のやうに

眼を蔽ひ、脛を絡まして

年レガ餘も汝は來た」

私は云った「おくわが柔しき父よ、汝もし

私に聴かんか、わが脛の力を失った時

私に現れたことを汝に語るであらう」。

いかに微なりとも、俺に鎖されはしない。汝の顔のうへに被るとも、汝の念はすると彼は「たとへ百の假面を

1三0永遠の泉より注ぎいづる平安の水に

云いのがるゝてとなく汝の心を

體が生命を失ふて臥す時見えずなる開かしめん爲このことが汝に示された

41 lega: ーレガは約一里十五町。



第十六曲

暗くせられて寂しき天の地獄の闇も、能ふかぎり雲に

凡ての星を奪はれた夜の闇も

かく厚き面覆をわが眼に被らさずていて我等を蔽ふた煙のごとく

かくて眼を開け置くに堪へなかつた。また斯く粗き毛を感覺に着せたことがない。

私に寄り添ひ、肩を私に差し出した。そこで賢く頼もしきわが護衞者は

迷はず又は物に打ちあたつて窘しみ

私は苦しく忌とふべき空氣を貰き

盲が手引の後より行くやらに

第四臺地近づけるなり。 教會と帝國の使命に說き汝ぶ?やがて濃き煙を貫いて輝く天使見ゆ。 教會と帝國の使命に說き汝ぶ?やがて濃き煙を貫いて輝く天使見ゆ。 教室と帝國の使命に說き汝ぶ?やがて濃き煙を貫いて輝く天使見ゆ。 ダンテ暗き煙を買して進み、忿怒家の唇より「神の羔」の聖歌を聞く

1粗き絲の面覆にして絲が毛のごとくに立つものっ

|関と煙とは念愁家の心狀の表象?

2

43 一二〇行

『汝を患ますは何か』と訊ねたのでなく眼のみにて見る人として俺が

懶惰者を斯く追いたてねばならね」。 我に歸りながら醒めて働くことの緩い ない。

前へとわれらは事ら進んだ。

回回

それより身を退く處とてはなかつた。暗る一條の煙が我等の方に立ち塞がり

すると見よ、徐ろに、夜のごとく

この煙が我等より眼と澄める空とを奪つた。

152

われらの登り行くべきは此方であるかと」。

5

美しく歸らんとて身を潔むものよ そこで私は「おく汝を造りし神に

汝もし私に伴へば奇しき事を聞くであらう」。 彼は答へた「俺に許される限り汝に從はう。

若しまた煙が見ることを許さねば

その代りに耳が我等を結び合はすであらう。

そこで私は始めた「死が解く

編を纏ふて私はのぼりゆく。 また地獄の苦を通ってていに私は來た。

神がその恩寵のうちに甚く私を包みっ 今の代の慣ひより全く異なる様により

汝が死する前誰であつたかを蔽さず私に告げ その常居を私に見せやうとしたまへばい

> 7第三臺地の入口まで。 魂は浮弾を完うするまで神 によりて置かれし臺地以外に出づるを得ず。

8煙のため共に相見るを得ずとせば共に語らひ耳を賴 りに伴ひゆかん。

9 肉體

10 rechius: 或は「容れ」或は拉句語 recludere の意に 解して「示す」とも譯する人あり、く天、一五の三〇つ。

11エネア保羅以來內體のまゝ地獄に行き天國にのぼり しもの絶えてなし。地、二の一三以下。

ひたすら「俺より断たれぬやう心せよ」と

云へるわが導者に耳を傾けて行づた。

私は聲々を聞いたが、いづれも

平安と憐憫とを祈るよと見えた。 罪を除さたまふ「神の羔」に

たど Agnus Dei がその冒頭であつた。

る 悉く一の詞一の節であった。

かくてその間に全き調和が見えた。

「師よ、わが聞く此等の者は靈であるか」と

真であつて、彼等は忿怒の結節を解いて行く。私は云つた。すると彼は私に「汝の理解は

われらのことを語るなんぢは誰か」。 「さて我等の煙を裂き、然もまた恰も

かく一つの聲が語った。

3基督。「世の罪を負ふ神の燕を見よ」豹翰傳一の二

4「神の羔」。 彌撒に歌ふ聖歌の胃頭なり。

Agnus Dei qui tolli peccata mundi, misorere nobis.

Agnus Dei qui telli]peseata mundi, donna nobis pacean.

世の罪を負ふ神の羔よ、われらに平安を賜へ世の罪を負ふ神の羔よ、われらを憐みたまへ

者の 永遠の世界にありては暦の用なしの 断によりて 歳月を分か つ者即ち尚 ほ地上に 活くる

また此を人々に示すことを得させよ。然し願くはその原因を指し示して私に見せ

憂いが緊めて「吁」とする深い嗟嘆を蓋し此を或人は天に或る人は下界に歸する」。

世界は盲目にて汝は實に共處から來た。まづ發して後彼は始めた「兄弟よ

一切の原因を只高くこれに歸す。凡て必然に己につれて運るが如く

七0 もし然りとせば、自由の判斷は

汝等の業の起原は天にある。然し凡てとは悪に哀しむ正義が無さものとなるであらう。

17 或る者はとれを諸星の力に歸し或る者は自由意志の

18 汝の不徹底なる質問より見るに汝は世人のごとく盲

日たりの

20 libero arbitrio. 自由意志のこと。 19 善悪吉凶凡でを諸星の力に歸す。

張らざる彼の徳を俺は愛した。 「俺はローバルドにてマルコと呼ばれた。 「俺はローバルドにてマルコと呼ばれた。 「俺は日本バルドにてマルコと呼ばれた。 では世界を識り、また今や人皆弓を

わが爲に前らんことを汝にねがふ」。 わが爲に前らんことを汝にねがふ」。 やこで私は彼に「汝の求めることを 解かれねば、わが心は打ち裂られんとする。 解かれねば、わが心は打ち裂られんとする。 ない。 ない。 であづたが、今や曇のごとく こことで ない。 ない。 がいれるに、 のがられることを がいれるは、 のがいれるが、 のがいれるとする。 のがいることを がいれるとする。

15

げに汝が私に叫んたごとく

二重となって相駢ぶ。

12十三世紀後半の學識ありて尊敬されし人。 こムにロムバルドと云へるは名なりしゃ、或はロムバルディア出の意なりしゃ、或はマルコは屢巴里を訪れし故佛蘭沔風にロムバルドと称して伊太利亚人の意に用ーるのたの意なりしゃ、武はマルコは屢巴里を訪れし故語なる心情の人物なりしも怒り易き人なりしと。 高潔なる心情の人物なりしも怒り易き人なりしと。 で用めしもなり。 で用めしもなり。

汝の登りゆく道は正しい」

16

をし導く者か馬答がその愛を回へさねばまづ彼女は些やかな福の香を味ひたのと方の向かよ。

もし導く者か馬銜がその愛を回へさねば そこで馬銜として法律を定むべく そこで馬銜として法律を定むべく

反芻するが、その蹄は裂けてゐない。 法律はある。然し此に手を置く者は誰ぞ。 殊へ得る王を戴くを要した。

100かくて民はその貧るところの資を

世界を罪あるものとした原因は

24 正義

25 元の八八一九六。

「凡て歌の中蹄の分かれたるもの即ち蹄の全く分かれたる反芻するものは汝等これを食らふべし。 但れたる反芻するものは汝等には汚れたるものなり」利未記が分かれざれば汝等には汚れたるものなり」利未記がつかれざれば汝等には汚れたるものなり」利未記がつがかれだるものと蹄の分かれたるものなり」利未記が、からざるものと蹄の分かれたるもの即ち蹄の全く分かれたる反芻するものと蹄の分かれたるもの即ち蹄の全く分からだるを置む。

27

26

法王。

善惡に對する光が汝等に與へられてゐる。俺は云はぬ。よし斯く云つたとても

苦を受くるとも、後良く養はれんかまた自由意志は假し諸天との初陣に

一切を征服するであらう。

更に善き性に屬く。このものが自由なる汝等は更に大なる勢力

증

汝等にある、汝等のうちに探るべきである。汝等の心を創造つて、諸天は此に與らず。

いまだ存せざるに此を喜び給ふ者のいま俺は真の偵察となって此を汝に告ぐ。

あどけなき小さい魂が出で、悦び給ム子供らしく戯れる乙女のやうに 手より、恰も泣いて微笑み

21 神

22

在す。 靈魂は創造せらる、前には神の心のうちに存

1三0 今や安らかに其處を通り得る。

神が優れる生命に移し給ふを彼等は遅しと思ふ。古さ代が新しさ代を叱責する。また己をげに尚ほ三老人が其處にゐて、彼等によつて

コルラド・ダ・パラッツなと善さゲラルドの

ての後羅馬の教會は二つの政を名づくべきグサド・ダ・カステルロ、これである。 たいは 関西風に窓ろ單純なるロムバルドと

一身に混淆するため、泥に倒れ

自らと荷とを汚すと云へ」。

110

嗣業より除けられた譯を、私は識る。汝の論は正しい。レギの子等が

然し野蠻時代の見せしめに

34 善人ひとりもなければ憚りなく。

35死を俟ち焦がる0

36コルラド第三世。 一二八八年ピアチェンツァの長

37トゥレギソの高貴なる武人にして一三○六年に死するまで多年の間この處を治めたりき。 全名をラゲ

88 佛蘭西人は伊太利亜人を總稱してロュバルディア人

40 法權と俗権。

41 「レビはその兄弟等の中に分なく又産業なし只エホ

誤れる導きにして、汝等の性(墮落の

恐れはあるが)に非ざることを汝は良く知り得る。

善さ世界を善く作りし羅馬は

神の途いづれもを見ゆるものとした。常に二つの太陽を有し世の途と

牧標に結ばれた。かくて雨者は

その一つが他を滅ぼし、劒が、

勢い烈しく共に悪に赴かねばならなかつた。

即ち結ばるや互に畏れなかった。

汝もし俺を信ぜずば、穂を見よ

フェデリゴが擾亂を知らなかつた前。 蓋し凡ての草は種によって識られる。

アディデェ河とボオ河の灌ぐ地に亘つて

耻らひて善人と語り、 夢改と慇懃とが常に見られた。

ては教會の表象。 大僧正の前に携ふ標準の上の十字架を云ふ。とゝに 文僧正の前に携ふ標準の上の十字架を云ふ。とゝに

31 皇帝フェアリゴ第二世が羅馬法王と争ひ始めざりし31 皇帝フェアリゴ第二世が羅馬法王と争ひ始めざりしなりの現状が何よりの證據なりとなり。 伊太

○ Ryadore corteshi- 或は或と変とも譯すべし。

地

32 ロムパルディア○

或は廣く上部伊太利亞。

第十七曲

臺地に到れば、ギルヂリオ徐ろに浮罪者分布の次第を語る。るものは編なり」との聖歌を聞く。かくて懶惰者の聞せらるる第四ダンテ薄暮燻霧より出てゝ忿怒とその刑闘の幻想を見、「和平を求む

されを通して見ること、土龍の皮を通して 讀者よ、嘗つてアルベにて霧が汝を鎖し

見るに異ならぬことがあったとすれば

そのうちに太陽の球の朧ろに といれ蒸気が薄れ初めるや

私が見初めたさまを容易くさすれば既に臥さうとする太陽を

汝は想像に描きうるであらう。

合はせて斯かる雲より脱け出づれば

10

おく屢我等より外物を盗み

光線は既に低い岸に死んでゐた。

1アルプス山〇

2中世紀の動物學に據れば土龍の盲目なる

薄き皮に基くと信じられたりき。

登り居りし放なほ此を眺むるを得たり。 はしダンテは山の中に

亡びし民の標本として残ると

彼は私に答へた「汝の言葉は俺を欺くか汝の云ふは何れのゲラルドであるか」。

話しながら汝は善さゲラルドのことを少しも知らぬと見える俺を試すかする。蓋し俺にトスカナ語を

彼の姓を俺は知らない。

0

煙を貫いて輝き、既に白む黎明を見よ。神汝と共なれ、この上俺は汝と共に行き得ない。

天使が彼處にゐます。俺は

かくて彼は振り返り既早私に聽かうとしなかった。去らねばならね。彼に見ゆるは未だし」。

21 トスカナ人にてありながらゲラルドを知らずと云ふは我(マルコ)を敷くためか或は試みるためかとなり。ダンテは後にゲラルドに親しくせしも、此頃はまだ彼のととを知りならざりしならん。まだ彼のととを知りならざりしならん。まだ彼のととを知りならざりしならん。まだ彼のととを知りならざりしならん。まだ彼のととを知りながらゲラルドを知らずと云ふるとのみなり。 オースカナ人にてありながらゲラルドを知らずと云ふ

経彼の罪未だ全く溜まらず、從つて此より以上遇みて

いと完かりし正しきマルドケロがるた。 泡となれるものが崩れて

原の水となる状さながらに ひとうの乙女がわが幻のうちに立ち 何故に怒って亡きものたらんとし給ひしぞ。 强く泣きながら語った「おく女王よ この幻像が已と己を破るや

亡ぶるに先立らて汝の亡滅を悼む者なり」。 ラギニアを失はざらんとして汝は自殺せり。 今汝われを失へり。 母よ、 我は他人の

眠りが破られ、破られながら 全く失せ去る前に搖めくごとく 閉ぢし眼を忽ち新しい光が撃つ時

我等の慣れをる光に遙かに

0

9 モルデカイログ

11母アマタのとと。 10ラティノ王の獨娘ラギニア。 「エネアの歌」一二の五九五十六六七〇 約しながら後エネアの妻となれり。トゥルノ死せり と想ひて絶望の餘リラギニアの母アマタ自殺せりの 彼女はトウルノと婚

12地上の光

たとへ一千の喇叭が周圍に響くとも

感覺が汝に傳へずば汝を動かすは誰ぞ。 人に氣付かしめざる想像力よ

下に伴ふ意志によって汝を動かす。 天に成る光が自らか又はこれを

形を變へた彼女の不虔な跡が 歌ひていとも樂しむ鳥に

50

こゝにわが心は自らの衷に縮まり わが想像のうちに現れた。

外より來るものを

やがて十字架に釘き、憤つて この時なのれに容れなかった。

わが高き幻想に降り注いだ。 猛き貌をして死んだものが

彼の周園に大なるアッスゥエロ

4 imaginativa. これは fantasia (幻想)を起こす機能 起こした時」とありっ なり。「新生」一六に「わが記憶が幻想を想像力に

5 一般に想像力は感覺によりて活動する げ神自らの意志によるものと云ふべし。 の此處に見る如き主觀的幻想は諸星の感化か然らず

70mm. 元楽は「足跡」の意なるが、此處にては一般 6プロニエ义はフィロメラ。 き。「メタモルフォシ」六の四一二一六七六0 印象の意なりつ ためプロニエは鷲にフィロメラは燕に化せしめられ を殺して失に食らはしめたり。との残虐なる行為の 端によりてこの事を傳ふるやプロニエは怒りて其子 恐れて彼女の舌を切れり。然しフィロメラは帷の一 女の姉妹なるフィロメラを辱しめ、口外せんことな プロニヱの夫テレオ彼

も以土帖は彼にモルデカイ殺害の意志ある旨を王に 傳へたれば王彼を木の上に懸けて殺せり。以士帖書 波斯王アハシュエロス彼を高位に用ゐし

8



めが想象はくづをれた。

一切他の意向より私を遠ざけわが居るは何處ならんと振返った時わが居るは何處ならんと振返った時

頭と顔を合はすまで休まざらしめた。 見やうとのわが切なる慾望を起こしまた語りし者の誰であるかを

五〇

わが能はてゝに崩折れた。 然し我等の眼を壓し、また極度の光に

特たずに我等を上に行く道に導き これは神よりの靈にて、我等の祈りを

人が己の爲に做す如く彼は我等の爲に做す。またおのが光にて己自らを蔽す。

13八の三五。 一五の1〇。天、三三の一四二。

すぐ「己の如く汝の隣人を愛すべし」。 く天使は願はれずとも他のもの(ダンテ)に道を示は願はれずとも人は己が欲する處を果たす。 その如

蓋し要求を識りながら願ふを待つは

さてこの招きに我等の足を合はせ 既に自ら悪意もて担むものである。

お

蓋しその後日の歸るまでは登り得ない。暗くなる前に進みのぼらしめよ。

われらの歩みを一の。階に向けた。かくわが導者は云ひ、私は彼と共に

身近に宛ら翼が動き

第一段に私が至るや直ちに

また顔を煽いで Beati pacifici

悪しき怒なき者」と云ふのを私は覺えた。

さ 夜の追ふ餘光は旣に

到るところに星が現れてゐた。

「おゝわが能よ、何故に斯く逃げ行くぞ」と

15七の四四、五三一六〇。

16第三臺地より第四臺地への登口。

17 「和平を求むる者は繭なり」馬太傳五の九。 この

18第四萬(懶惰淨興地)にのほり煉獄の第二夜始まる。



心を俺に向けよ、我等の躊躇より 心を俺に向けよ、我等の躊躇より 彼は始めた「造物者も被造物も 会は始めた「造物者も被造物も をないたことがない。このことを汝は識る。 自然の愛は常に誤らないが 他の愛は悪しき對象が又は生氣の 第二義の愛によって誤ることがある。 愛が本原の善に向けられて 変が本原の善に向けられて

20以下ギルデリオは人類の一切の罪と德の原因は愛にありと述ぶ。 愛は三様に過つ。(一)地上の櫟しみを愛し過ぎる時。(二)真の養(神)を愛すること少き時(三)悪を愛する時、これなり。時(三)悪を愛する時、これなり。 明ち合理的愛。一六の九〇。

22 異本、nei primo の代りに nel primo と變んで以上二行を「第一(即ち目的)については善く向けられ、第二(即ち度合)については己を差し控えば。」しみを求むる時能(適度を保たんか罪を犯さず。

然し愛が惡

に傾くか又は樂しみに

馳せる意慾が分に過ぎ、

或は足らぬ時

造主に逆ひてその被造物が働く。

そこで愛が汝等のうちの一切の徳

私は心の中に云った。これわが脚の力の休みを覺えたからであった。階での盡きるところに登り着き階の盡きるところに登り着き

八の 聞こえやうかと暫し心をとめた。 やがて身をわが師に向けて云つたいかなる答が淨められるかを語れ。 足はとじまるとも汝の話を止める勿れ」。 すると彼は私に「愛すべかりし善に 缺さしものが此處に贖はれる。 不幸にも遅れた櫂を再び此處に漕ぐ。

19 二の五。

然しなほも良く明かに悟りうるやう

および名聲を失うことを恐れる人がある。

三0 そこで彼は悲しんでその反對を慕ふ。

かいる人は必ず他人に向かつて惡を企らい。 20世に貪婪に成るでとき人がある。

この三様の愛を下の彼方に人々が哭く。

なんぢらが聞かんてとを俺はのだむ。

さて次に善に馴せゆく度を誤りし者のことを

心の憩ふべき善をおのく

能ろながらに識ってこれを願ふ。

1三0 此を見せ又は此を獲させんとて汝等を

この軒蛇腹がそのために汝等を苛責する。 引く愛が緩からんか、正しき改悔の後

ほかに人を福ならしめない樂しみがある。

30嫉妬3「その反對」を「敵人の逆境」の意に解する人

31 念 怒

む、起こす、等。 む、起こす、等。

総造、望

33 懶惰。

34萬人は神に對する朧げなる憧憬を有す。 一八の一

35 地上の快樂。

をなて愛はその主の礼福より をなは歌り得る。 なて愛はその主の礼福より

現た何ものも『本原』より離れて ルてのものは己を憎むことがない。

一0 自ら立ち得るとは思はぬゆゑ

一切の愛然は斷じて神を憎まない。 ででは、本く分かつてわが量る處が正しくば ではな等の泥のうちに三様に生ずる。 での愛は汝等の泥のうちに三様に生ずる。

「一切の生物は生まるるや理性あるものく歌も自らのなし。

己を愛す」饗宴篇四の二二。

27

する僧懇は以下の三種となる。 せば、結局感むは隣人に對してなり。この隣人に對してなり。この隣人に對してなり。この隣人に對してなり。

29 傲慢

他人に凌駕せられて自ら權、龍、譽

低められんことを願ふ人がある。

たべその爲に彼が偉大より

第十八曲

たふとき教師はその論議を終へ

がには默しながら衷には云った がとめてわが顔を眺めた。 がには默しながら衷には云った

然し臆して自ら明かさぬ意を「恐らく問ひ過ぎて彼を厭はす」

語る氣を私に起てさせた。

察して真の父は語りいで

そこで私は「師よ、わが眼は汝の光に

また述べることを悉く明かに私は辨へる。かく活かされ、汝の論議の含み

されば愛する慕はしき父よ、

汝に祈る。

べのことを取んで駅で行けず、

嬰の人々のことを叫んて馳せ行けり。び月出づ。ダンテ睡みしも懶惰の諸靈馳せ來たりて彼を醒まし、語び月出づ。ダンテ睡みしも懶惰の諸靈馳せ來たりて彼を醒まし、語

1地、三の七九一八一。

我等の上の三つの環に人々が哭く。 とれは福でもなく、凡ゆる善き果の

没自ら探るやう俺は沈默する。 然しその三つに分かれる譯は

37 貪婪、變食、邪淫の三罪は山の上部の三臺地に淨罪の異本、凡ゆる壽き果にして根なる(d'ogni buon

リオ賢せずの

新へられし心は願望に入る。 がらふ處さして生まれながらに登るでとく

これは靈の活きにして、愛するもの

凡ての愛が自ら讃むべきものなりと

説く人々より真理の隠るることの

いかに甚しさかが今汝に明かであらう。

凡ての封印が善いとは云へない」。見える爲であちう。然し蠟が善くもこれ恐らく料が常に善しと

四の彼に私は答へた「汝の言葉と此を追よ

なほも私を疑ひに孕ましもする。わが才が、愛を私に露はしたが

蓋し愛がもし外より我等に與へられ

10 願望の對象物。「捕へられし」とは愛になり。とす。天一の一一五。とす。天一の一一五。とす。天一の一一五。

11 matera. といにては心或は寧ろ心の力を意味す。

22よし愛は抽象的には善なりとするも具象的には常に

汝が一切の善行及び此に反する業を

歸せしめる愛を私に示せ」。

なる盲人の誤りが汝に明かになるであらう。私の方に向けよ、さすれば自ら手引と彼は云つた「智解の鋭き眼光を

好む凡てのものに動き行く。快樂に醒まされて働くや否や

3

汝等の觀念力が實在より概念を

抽象し、これを汝等の衷に擴げ

かくて心をこれに向けしめる。

その傾きが愛である。これ快樂により

新たに汝等に結ばれる性向である。

2前曲に於てヸルヂリオは愛は善並びに惡の原因なり

8 愛はそれ自らにて欝むべきものなりと云ふ人々の誤

4以下愛に關っダンテの心理學的説明なり○ 大體ト

5 esser verace (實有)?

Ginte zione 種々なっ意義ありて翻譯し継ぎ語なり。 が、第二概念は抽象的なる「人道」または「白色」の か、第二概念は抽象的なる「人道」または「白色」の 如きを指すっ

7 心は快樂に牽引さる人可能性を有し、また快樂を與7 心は快樂に牽引さる人可能性を有し、また快樂を與7 心は快樂に牽引さる人可能性を有し、また快樂を與

何處より來たかを人は知らない。

さてこの意志に他の一切の意志をまたこの本原意志は賞罸の功罪を容れず。

生みつけられて批准の閾を護る。

これその善き愛、罪すべき愛を

なんぢらに齎らす原則である。

なんぢらに齎らす原則である。

この生得の自由をみとめ論じて底に至った人は

かくて彼等は道徳を世界に貽した。

七0 されば假し汝等の衷に燃える

この貴さ能をベアトゥリチェは解してこれを抑える力がなんぢらにある。

20自由意志

21異本、原因 (cagione)

22 徹底せる哲人。

直く又は曲りゆくも魂の功罪でなくなる」。 且つ他の足にて魂が歩まぬとせば

すると彼は私に「俺の告げ得るは、理性の前くろに由り切くすめの野罪でなくなる」

信仰の業なれば、只ベアトッリチェを待て。

こしに見る限りである。

これを越えては

物質より別にして而もこれと

その中に特種な能を收めてゐる。 結ばる本體の一切の本精は

志

働かねばこの能は識られず

また緑葉によって植物の生命が現れるごとく

結果によらすば現れない。

されば蜜をつくる蜜蜂の

巻望の本原に對する愛慾が 本原認識の智解、並びに 動みのごとく汝等のうちにある

非ずと云はざるべからず。これダンテの疑問なり。とすれば、それは自由と稱し難くなる。從つて何等とがなく必然に外界の事物によつて刺戟さるよもの

14 靈魂。

15心象を形成する力。 或は理性の

16一六の一一三、四。

19 prime appetibili l' affetto. 神に對する憧憬。 19 アリストテレスは蜜蜂の有する智性の性質を好んで19 prime notizie.

20 人々のために忽ち奪はれた。

テエ

その堤に沿るて狂暴と群集を見たごとく 嘗てイスメノ河とアソポ河とが、夜 べ人がパッコの助けと願ふたびに

彼等は、私の見るところによれば

この圓に沿ひ、足を彎げて來た。 善り意志と正しき愛に驅られて

忽ちわれらに追ひつい 大なる群は凡て馳せ進んだので 72

100「マリアは急ぎて山に走りぬ そして前のふたりが泣きつゝ叫んだ。

またチェザレはイレルダを從はせんとて マルシリアを突き、後西班牙に馳せたり」。

善行の勵みは恩寵の綠を新たにするゆゑ

30テェベ人葡萄畑に雨乞のため此等の河の堤に集まり て酒神バッコを祭りたりの

31 falcare. 佛蘭西語の faucher にして回轉進行する馬 の胸付を差す語なり。懶惰者は今や駛職して休止せ

32「その時マリア起ちて速かに山地なるユダヤの邑に 往き」路加傳一の三九o

33 チェザレは羅馬を去り馬耳塞に赴き、これを包閣せ ルダ市を征服せりつ しまゝ西班牙に馳せ、ポムペイオの軍と戦ひ、イレ

自由意判と云ふ。さらば彼女が

汝と語るべくば、能くての事に心をとめよ」。

遲く殆んど夜半に

全く燃える釣瓶のごとき形の月が

また羅馬の人々がサルディニア人とコルミカ人の 我等に見える星をいよ (稀らにし。

その途に沿ふて諸天に並ひつゝ馳せてゐた。間に日沒を見る頃、太陽の燃やしゆく

강

ビエトラをマントグの邑よりも

名高からしめる貴き影は

わが負はせし荷をおろした。

そこでわが間に向かひ、彼の打ち

眠りつく逍遙ふ人のやうに立つてゐた。開けて明かな説を收り入れた私は

然しての眠りは、我等の肩の

23 libero arbitrio。自由意志のこと。 天、五の一九十二二四つ

24 seechione. 大なる半球形のパケツにして現今佝性的 大利頭に用ゐらる。

る人もあり。 して此一句を「夜の子午線に徐々にのぼれる月」とすのぼる。或は mezza noita を夜の子午線の窓に解る人は満月の後四日なれば月は煉獄に夜半の少し半に

26冬至 羅馬より見て實際は見えざれど太陽が此帳

毎に西より取へと後退す。27諸天の東より四への進行に反して月は黄道に沿ひ夜の兩鳥間に没するは冬至前後なり。

28 ギルデリオの生地と稱せられし地、マントツの邑に28 ギルデリオの生地と稱せられし地、マントツの邑に

29ギルデリオ。

善さパルパロッサの帝國に屬せる

三〇ヹロナのサン・ツェノ僧院長であった。

既に片足を墓穴に入れをる者が

間もなくこの修道院ゆるに哭き

そこに力を揮ひしことを悲しむであらう。

蓋し全身惡しく心なほ惡しく

且の不義に生まれし己が子を

その真の牧者の位に置いたからである。

既に我等を過ぎて遠く馳せ去つてゐたので

然しての一事を聞き、喜んで心にとめた。

彼が云つた「彼方に向き、彼等のやがて凡て必要な時のわが救なる

1 = 0

ふたりが懶惰に切齒しつ、來るを見よ」

凡ての者等の後に彼等は云った

37ゲラルドと稱する者なりしと云はるも不明。

ツェノの僧院長とせり。 しが、庶子にして跋なるヂウセッスを强制的にサン・33アルベルト・デルラ・スカオラ。 ゴロナの領主なり

39 凡て身に疵ある者即ち蓍跛等に祭司たるべからずと利未記書二一の一六十二三にあり。これ教育の守る

40 ヸルヂリオロ

41「頼惰に無衡して」とする人もあり。

些かなる愛のため時を失はざるやう

急げ、急げ」と他の者等が直ぐ後に叫んだ。

「お、微温くして善事を果たさどりし

鋭き熟誠が今償る民よ かのが怠慢と遅延とを、恐らく

活けるこの者(俺は確かに汝を欺かず)は

太陽が我等を再び照らすや否や登り行かんと願よ。

されば近く穴のある處を我等に告げよ」。 これわが導者の言葉であつた。

そこでその靈のひとりが云つた「我等の後に

來たれ、さすれば穴を見るであらう。

止まう得ない。されば我等の務を 進まんとの慾望に充つるので我等は

俺はミラノ人の尚も憂ひ語らよ。 無禮と採らんも、汝これを容せよ。

34 ダンテロ

36 ミラノ市は一一六二年にフェデリゴ・パルパロッサに 亡ぼさる。

35 第五豪地へ登る。

第十九曲

書間の熱が地または

時として土星にうち勝たれて時として土星にうち勝たれて

眼を斜視にし足をゆがめて夢にひとりの吃り女が

東方に

ながめ

る時

冷えた肢體を太陽が力づけるやらに私は彼女を眺めた、すると夜が壓して

0

かくて東の間に彼女を全く

かんとすれば「誤る勿れ、俺も同じ僕なり」といふ。. ペット戦力豪地に登れば貪婪の諸靈俯伏して「わが魂は塵につきね」と唱て第五臺地に登れば貪婪の諸靈俯伏して「わが魂は塵につきね」と唱いざきダンテ夢に肉情の表象たる妖女シレナを見る。やがて醒め

1 900 一三0 二七の九三とを對照せよの大り)も同じ働きを做すと考へられき。この何と九なり)も同じ働きを做すと考へられき。この何と九なり)も同じ働きを做すと考へられき。この一三0 二七の九三とを對照せよ。

結する線によりて未來をトせり² 2gcomanto. 地上に(後代は紙上に)象らるム點を連

3 maggior fortuna. その象はwwwwwなり。鴫方に上る寶瓶宮の終りの星と雙魚宮の初、星と結ばりて此

4

象とする人もあり。 なは活動的生涯よりの回避即ち accida (倦怠)の衷 三臺地に淨めらるる貪婪、饗食、邪淫の表象たり。 の第二の幻なり。この妖女は以下ダンテの遍歴する の第二の幻なり。この妖女は以下ダンテの遍歴する

「海も開かれし民は、その後嗣等が

終りまで勞苦に堪へなかつた人々はまたアンキエゼの子とともにヨルダン河を見ぬ前に死んだ。

光榮なら生涯におのれ目らを捧げた」。

新しき想いがわが衷に起き 25

四回

かくて私はこれより彼へと逍遙ひ

関想を睡眠に移した。

公「そも人・イスラエルの人々は四十年の間荒野を歩みをりて終にその埃及より出で來たりし民即ち軍人等悉く亡せはてたり。 せをもつてエホバ彼等の先祖ざりしによりてなり。 故をもつてエホバ彼等の先祖ざりしによりてなり。 故をもつてエホバ彼等の先祖が悪さべける、地を之に見せじと響ひたまへり」 約書亜記 の流る 1地を之に見せじと響ひたまへり」 約書亜記 五の六。民敷紀略一四の二三十三三。

landis egentis (作大なる質讚を思はざる鑑魂等)った七八の饗宴篇四の二六。 'animos nil magnas 七七八の饗宴篇四の二六。 'animos nil magnas としている では、 animos nil magnas によいるとを欲したり。「エネアの歌」五の七〇〇一とのは、 animos nil magnas によいる。

44 煉獄の第二日終る。

彼女は猛く云つた。すると彼は眼を

全くこの淑かな者にとめて進んだ。

3

貴女はこの女を捉へ、纒衣を裂いて

そこで此より發した悪臭に私は醒めた。その前を開け、その腹を私に示した。

「少くとも三度汝に俺は聲かけた。起って來たれ私は眼をめぐらした、すると善きヸルヂリオは云った

身を起こせば、聖さ山の話の側は、

既に皆高さ日に充たされ

我等は新しき太陽を腰にして進んだ。

四の彼に從つて私は思いを額に

人のやうにしてゐた時」と「身を橋の半弓にする

この朽つべき域にては聴かれない

9或は、彼(ボルデリオ)。

11 ダンテは既に山の北方を過ぎ西を南へと行く。10 朝日。 これ煉獄第三日の始なり。

13 地上。

12沈思の貌を額に現はし身を屈めをりし時の

真直にし、またその褪せた顔を

愛の求めるやうに彩つた。

彼女は歌ひ始め、かくてわが意をやがて斯く言葉が弛められるや

「われは」と彼女は歌った「われは甘美なる彼女より回はすのが困難であった。

水夫等を海の眞中に迷はすものなり。

船路よりめぐらし、われと住むものをお歌はウリッセをその漂浪の

みな全く充ち足らし、去るものは稀なも」。

ひとりの貴女が私の側にあらはれびないの口がまだ閉ざされざるに

聖うして直ちに彼女を狼狽させた。

おうボルデリオよ、

おしヸルヂリオよ。

此は誰ぞ」と

5 紅に0

6シチリア島に近き一孤島に住みし海のニュフォにして半人半魚の馨美はしきもの、歌にて水夫等を誘ひ

7 載は、「わが歌にさ すらひてカリッセペニリセス)は身をもに縛り水夫等の耳を轍に閉ぢて歌を聞えざらしめシレナの誘惑に打ち勝ちたり。 ダンテは恐らくキケロ (De Fit dbus, V. 18) によりて斯く云へるならべし。

・ 或はルチアと解する人あり。地二の九七。
8種々なる説あり、理性乃至良心の典型ならんか。

たい彼女ゆゑに今より我等の上にて人々が哭く。

諸の大なる輪によつて永遠の王の これにて汝は充ち足り、踵を地に打ち った。

呼びに向かひ、糧の願望に鷹はまづ足を眺め、次に

廻したまふ誘引に眼をむけよ」。

牽かれてその方に身を伸ばす。

遂に環の始まるところに到った。 のぼる人の道となれるところを歩み 斯く成り斯くして私は、巖の裂けて

向かつて俯伏しをるを私は見た。 その上に民が哭き、皆地に

Adhaesit pavimento anima mea ~

18 これより上の三臺地にて。

19頭を地に垂れず、足を迅めよ。

知諸天。 三〇の一〇九。

Alogoro. 鷹を呼び返すために用ゆる鳥形の細工物。 せ。同二二の一三〇。天、一九の三四。 せ。同二二の一三〇。天、一九の三四。

23 貪婪淨罪の民。

23「わが魂は塵につきね」詩篇一一九の二五。

ていに途がある」と語るを私は聞いた。柔かく仁慈ぶから狀に「汝等來たれ

かく語りし者が白鳥とも

かくて彼は羽を動かして我等を煽り、高く堅含磐石の城壁の間に向けた。

蓋し彼等はその魂を慰藉の貴女たらしるめであらう。 いっぱい lugent の祝福を確かにした。

眺めるのか」とわが導者が私に云い始めた。登った時「何に惱まされて汝は只地の方を

我等雨人とも天使を離れて少しく

そこで私は「新たな幻が斯く私に

傾けさすので思ひより身を放ち得ない」。危惧を抱いて行かしめ、その方に私を

彼は云った「かの年を經た魔女を汝は見たか。

15「哀しむ者は福なり」馬太傳五の四。

16慰藉をわがものとせん。

17 或は、奇しき。

做しうるや、最に物を云つてわが心を

惹いた者の上に身を遣って

ち

話り得ざるものを哭いて熟さす 悪いなりしては神に

汝の大なる配慮をわがために暫し止めよ。

上に向けるか。また私が活きながら出て、汝は誰であつたか。また何ゆゑに汝等は背を

すると彼は私に「何ゆゑ天が己に我等の後を來た彼處にて汝の爲願求めんことを願ふかを告げよ」。

然しまづ scias quod ego fui successor Petri.

一すぢの美しき流がくだり、その名を100/シェストッリとキアエリの間を

わが血族の稱號が頂とする。

泥に汚さざらんとする者に大なる外套の

27 浮罪の0

28 地上3

20「わが彼母の後繼者たるを知れ」。 教會及び法王の 職権的言語として特にといに拉甸語にて記せり。 31 ラザニアの伯爵オットボネ・フィエスキ家。 こいに語 32 ラザニアの伯爵オットボネ・フィエスキ家。 こいに語 る者は同家に屬せし法王インノチェント第四世の孫 にして、「二七六年法王に選ばれアドゥリアノ第五 にして、「二七六年法王に選ばれアドゥリアノ第五 世と稱せり。在位僅かに三十八日にしてギテルボに 世と稱せり。在位僅かに三十八日にしてギテルボに 世と稱せり。看もあり。

殆んど詞の分からぬほどに深い 壁嘆を

最しさを減らしむる神の選氏よ われらを高き登りの方に導け」。 發して彼等の云ふを私は聞いた。 「おゝ正義と希望とが苦難の

入0 いと迅き道を得んと願へば 汝等うち臥すに及ばずして行き

たえず汝等の右手を外とせよ」

我等に答へた。かくて厳されをる者を かく詩人は願ひ、かく直ぐ前の彼等が

そこで眼をわが主に向けた。 その言葉によつて私は認めた。

すると彼は快く頷き、わが願望の

やがて身をわが心のまくに 貌の求めたものを私に容した。

> 24煉獄の諸鐵は正義の心よりして自ら進んで間を望む (二三の六六以下)、また神に見ゆる希望を抱く。 の正義と希望とが苦痛を感ずる度を減ぜしむ。

25 俯伏して0

26 霊と語らふことの

高さへ擧げられなかつたやうに

1:0

悉く亡ぼして働きを無にしたやうに 食婪が福を愛するわれらの心を 正義はこくに眼を地に沈める。

正義はてくに我等を堅く抑へ

かくて正しき君の聖旨のあひだ

跪いて私は語らうとしたが

聽くのみにてわが敬ひを識り然し私が始めるや彼は只

「何の譯にて斯く身を下に屈むぞ」と云つた。

起立がわが良心を噛む」。

彼は答へた「脚を真直にして起ち上がれ

37 法王としての。

なかの苛ますべて羽に以う。いかに重さかを一月と少し俺は試した。

他の改心は、吁、遅かつた。 にかの荷はすべて羽に似る。

然し「羅馬の牧者」となった時

彼處に心安らかならず、またかの世にて始めて人生の虚偽を俺は悟つた。

110 高さに登りえざることを俺は見た。

食婪の業が改心せしその爲今汝の見る如く此處に罰せられる。

かれらの眼が地のものに注がれて 此に優って苦き罰がこの山にない。。

34 conversione. 彼は法王になりし時即ち死する前三十34 conversione. 彼は法王になりし時即ち死する前三十5年に

35 法王。

36これよりも大なる制はあらん、然し此ほど苦々しますとも下より上に赴くに從ひて罪頭山の七臺地は必ずしも下より上に赴てに從ひて罪頭山の七臺地は必ずとする人あり。

第二十曲

ろには榮光神にあれ」の啓聞え、ダンテ大いに驚くo

唱へ、夜は食婪の例を唱ふっやがて全山うち震ひて「いと高きとこ ダンテ食婪の符罪者等の間を行くに、彼等は害は清貧寡慾の模範を

されば彼を悦ばす爲わが意に逆つて 優れる意志に逆つて意志は鬪ひ難い。

飽かぬ海綿を水から私は出した。

銃帜

展に沿へる只些な空地をつたよて に沿ふて城壁の上ゆく人のごとく

私は進み、またわが導者も進んだ。 これ全世界を占める惡を

外の端の真際まで居たからである。 滴一滴眼より融かしてゐた。民が

多く餌食を採る汝に呪ひあれ。 汝の飢ゆゑに、他の凡ての獸よりも 古ら牝独よ、極みなく洞なる。

10

おゝ廻つて下界の駅を

1法王アドッリアノは會話を止めんことを願ひ、前曲 望(海綿)は盈たされざれど、語るを止めたり。 ふ。 然しダンテは位高き法王の意志に從ひ己が 一三九一一四一)ダンテはこれを續けんことを願

2落涙して浮罪する。

3 殆んて臺地一面にゐて端にまでも及びをれり0

5地、一の四九一五一0 最初の者は法王なりの を表象す。この食婪浮野の豪地にてダンテの遇へる 此外へ一ノグェルフィ黨へ一つ此と開聯して法王と僧侶 地、一の三三鞋。牝狼は神曲に於て

兄弟よ、誤る勿れ、汝及び人々と共に

meque nubent といふ聖き福音のでも一つ力のおなじ僕である」。

響きを識りゐたらんには

さらば行け。もはや汝の止まるを願はず。わが斯く語る譯を汝は良く識り得るであらう。

一四の蓋し汝の云ひしものを熟さす

われらの家が模範にて悪しくしない限り彼處にアラヂアと呼ぶひとりの姪が俺にある。わが哭きを汝の滯留が妨げる。

俺のため彼方に殘るはたい彼女のみである。彼女みづからは善きものである。

39「娶らず嫁かず」馬太傳二二の三〇。 こへにては地 気が歌がが」馬太傳二二の三〇。 こへにては地 輸駅示録一九の一〇。同二二の九。

40懺悔の果。 九十二行を見よる

・ 迅め果る 4 唯一人の敬虔なるもの 4 間なり。
・ なる此一家の客たりし時彼女を見たりしならん。
なる此一家の客たりし時彼女を見たりしならん。

識らうとして私は尚も前に身を寄せた。

與へた態物のことを語った。後等は更に乙女等の青春を

私は云つた「おゝ斯くも良く語る魂よ

終りさして飛びゆく生涯の短き旅路を汝のみが更めて此貴き讃美をするのか。汝の誰であつたかを語れ。また何ゆゑに汝の誰であつたかを語れ。また何ゆゑに

了へんとして私が歸る時

図0 すると彼は「彼方よりの慰藉を 汝の言葉は酬ゐられでは措かれず」。

既らすこの恩籠ゆゑに俺は汝に語る。 作のにあらず、たい死なざるに汝を

基督教徒の地に汎く厳ひ被さり

10 四世紀の初頭に住みしミラの僧正。 彼は食困ゆるの守護者たり。

11地上。

13 その友人知己等に所障せしむることにより。

13地上よりの慰藉を何等願はず。 既に死して千年なれば人に忘らる。

變へると信ぜらるる天よ

牝狼を降らす者の來るは何日ぞ。

諸の影に心をとめ、その憐れげにわれらは殺く稀な歩みにて進み

哭いて呻くを私は聞いた。

やがて圖らずも我等の前に

6 恰も子を生まんとする女のでとく

「慕はしきマリアよ」と哭いて呼び

また「汝のいかに貧しかりしかは

なんぢの聖き荷を下ろせし宿。にて

示さる」と續けるのを私は聞いた。

汝は罪とともに大なる富を獲んよりは

またこれに續いて「おゝ善きファップリッスよ

此等の言葉はいたく私を悦ばし寒ろ貧とともに徳を願へり」と私は聞いた。

6一六の六七一九。

は彼が漸くその望み無きを感じ初めし時なりしなけるが如く断乎たらず。恐らく此二十曲を作りし頃は彼が漸くその望み無きを感じ初めし時なりし頃は一つ一〇一一一一一 但し救済主的人物の出現

監かく叫ぶなり。
る其督を分娩せし陋。「初兄を生みそれを布にて包み、お注督を分娩せし陋。「初兄を生みそれを布にて包み、

を屢賞讃せり。饗宴篇四の五。帝政論二の五等。 宝にゅの(ビルルス)の賄賂が斥けたり。ダンテは彼王にルロ(エピルス)の賄賂が斥けたり。ダンテは彼のカイウス・ファブリキウス。 前二八二年羅馬の執政

頭が擧げられ、彼等より

此等の聖別されし骨が始まった。

ブ 11 ヹンップの大なる嫁奩が

微弱であったが尚それは惡をしなかった。 わが血族より耻の心を奪はなかった時。

やがてそれは暴力により又虚偽により 掠奪を始めた。後、償ひとしてそれは

、。 は伊太利亞に來たり、償ひとして ンティとノルマンディアとグッスコニッを取つた。

クルラディノを犠牲にした。後また

今日を去ること遠からずして、他のカーロを 佛蘭西より引き出し、彼とその一族とを 償ひとしてトイマンを天に突きかへした。

古

更に名高からしめる時を俺は見る。 武器は携へず、チウダの試合に川ねし

31イスカレオテのユダ。

21 sacrate ossa. ユウ・カペエ(ウゴ・チャペッタ)はその ルイ第九世がプログンスの領土を加へざりし迄は○ 子ロベルトを九八八年に戴冠せしめ、斯くてカベエ

23 無論諷刺的に斯くダンテは云へるなり。 ふに更に大なる罪惡を以てすとなり。彼は三度同じ 言葉を此處に反復せり。 権力を受けて卑賤の出なる恥の心を除かれし前の 舅なるライモンド・ベルリンギエリ家 と好し 領地と アンジュのシャル、がプロゲンスの伯爵にして己が

られ一二六八年殺されたりの一時に年僅かに十六歳リア鳥をシャルトの手より回復せんと闘りしも捉へ なりきとつ

30プロアのシャル、0 29トュマゾ・アクサノ(トマス・アクサナス)。 一二二四 黨を追ひ、ダンテを追放せりの チオ第八世の手先となりフィレンツェを鎮定し、白 れしと誤り傳へられき。アクサナスは中世紀の有名 カムパニアのフォッサ・メオプにてシャル、に毒殺さ ー七四の彼は一二七四年リオン會議への途上羅馬の なる神學者にして彼の「神學綱要」は神曲の基礎の 一三〇一年彼は法王ボ ニファ

善き果を摘むてとを稀にする

悪しき植物の俺は根であった。

然しドアヂオ、リュラ、グッント及びブルッヂアが また一切を審く者にこれを俺は乞ひ求める。 力を獲は、直ちにてれに復讎するであらう。

푱 彼方にて俺はウゴ・チャペッタと呼ばれた。

近頃佛蘭西を治める數々の

俺は巴里の一屠牛者の子であつた。 フィリッポやルイデどもは俺から生まれた。

灰色の衣に身を委ねた一人を除き

古への王達が悉く亡び去った時 王國統治の手綱と、新たに

獲だ大なる権勢と、また數多の

かくて主なき王冠にわが子の 友等を堅くわが手に收め

> 15 力ペエ家。 に彼の後裔は佛蘭西、西班牙、ナポリ王國を支配せ 或は特にフィリップ美王。 一三〇〇年

16ユウ・カペエ (ウゴ・チアペッタ)。 佛蘭西の公にし て九五六年死。彼の子九八九年に王となれり。ダン テは此兩人を混同せり。

17フィアンドゥラの四大都會の名。 フィリップ美王は 領せり。然し弦に朧ろに豫言さるゝ如く三年後即ち 一三〇二年クルトゥラティの大敗戦後と」より佛人 一二九九年暴力と詐偽によりてフィアンドゥラを占 掃されたりの

18ダンテ當時の誤れる傳説に從ひて斯く云へり。 己の領域内にて讀むを禁じたりき。 **蘭西王フランソア第一世はこの一句のため神曲を自**

19シャル、單純王。 られて獄死せり。 どとく修道僧とはならず、カペ(チアペッタ)に捉へ 然し彼はころにダンテの云へる

20カルロギンデ家。 は混同せりつ (佛蘭西王メロギンデ家とダンテ

盗賊の間に彼の殺されるを俺は見る。

ち

その貪慾な帆を神殿に向けるほど これにて充ち足らず、 法王令によらずに

酷き新ピラトを俺は見る。

おうわが主よ、蔽るへ復讎の 38

甘からしめるを見て何日俺は悦ぶべきぞ。 汝の秘れたる處にて汝の念りを

俺が語り、少しく註釋を得んとて

聖靈の只ひとりの新嫁のことを

唱へるやう定められる。然し夜になれば 日の續くかぎり我等凡ての耐として 汝を俺の方に向かはしめたものを

8

その代り反對の響きを我等は採る。 その時我等は黄金を慕ふ

36 馬太傳二七の三三一三八。

38神の正義、刑罰? 37フィリップ美王。彼はボニファテオを敵人に変り、 一三一二年に武士教團 (Templani) を解散せり。

39 聖母マリアの

41夜は清貧の反對なる食婆の例を唱ふっ 40二一一四行参照。 独は清貧の範例を唱ふり

情を携って彼は其處より獨り出で これを突ささしてフィレンツェの肚をひき裂く。 そこより彼の獲るは地にあらで、罪と いよく、彼自らに重くなるであらう。 いよく、彼自らに重くなるであらう。

公 海賊が女の奴隷どもを賣るやうに おのが娘を賣り、これを商品を俺は見る。 おのが娘を賣り、これを商品を俺は見る。

その代理者に於て捕はれるを俺は見る。未來と過去の惡を目立たしめぬため

彼の又しても嘲けられるを俺は見る。

33彼の綽名 Senza-lorra によりて斯く云ふっ

34 シャル、第二世。 アンジュのシャル、の子なりの一二八四年アラゴナ王ピエトッロ第二世の提 督ルッチエリ・デ・ロリアと戦ひて俘虜となれりの一三〇〇年乃至一三〇五年彼は老いたる エステ の 侯 爵 アックオ 第二世に己が若き娘ペアトロリチエを変りしと

35 foordalise. 佛蘭西王家の紋章。 フィリップ美王一三一二年にアラニアに入り法王ボニファチオ第八世をかテはボニファチオを憎みしも基督の代理者としての法王位に對してはこれを神聖視せり。佛王のこての法王位に對してはこれを神聖視せり。佛王のこれを捕へしたダンテは憤れるなり。

語らず氣心により、時として

3 或る時は高く或る者は低く語る。 されば書てゝに語る福を

他の者が近く聲を擧げなかつたのである」。 **嚢述べた時俺ひとりでなく、只こゝに**

われらの力に許されるかぎり 既にして我等は彼より離れ

途を越えんとて努めてゐた時

私は覺えた。そこで死にゆく人を 物の倒れるごとく、山の顫ふを

常に捉へる悪寒が私を捉へた。

三

ラトナがその巣をつくつて

天の二つの眼を生みつけた前

げにデロ島も斯く烈しくは振はなかつた。 やがて到る處に一つの叫びが起こり

フォシ」六の一八九以下の

50清貧寡欲。

51 この振動の原因説明は次曲五八一六三にあり。

かりしが、天の二つの眼即ちアポルロ(太陽)とディ ロ鳥に追へり。 この島は嘗て浮島にして動搖當な ヂウノはラトナのヂオヹに愛せらるを見ラトナをデ アナ(月)を彼女が生みし後に固定せり。「メタモル

貪婪な慾が反逆者盗賊

親殺したらしめたビグマリオネ

また人の常に笑ふべき

貪婪なミダの悲慘を省る。

各想の起こし、斯くてデョスゥエの忿怒

今なほ彼を此處に嚙むと覺ゆ。

またポリドロを繋せしポリネストルを エリオドロが受けし蹴蹶を我等は賞める。

汚名のうちに全山がめぐらす。

最後にこうに我等は叫ぶ「クラッソよ

我等を促して時には大股に時には小股に黄金の味如何で、汝知るゆゑに語れ」。

「エネアの歌」、一の三五三一四)。

おフリヂア王ミダは消神パッコに乞ひ彼の觸るくものおフリヂア王ミダは消神パッコに乞ひ彼の觸るくもの

はイスラエルの軍中にアカンなるものあり、戦利品を4イスラエルの軍中にアカンなるものあり、戦利品をはイスラエルの軍中にアカンなるものあり、戦利品を

初代基督教會時代にアナニアとその妻サッセラ産業の仕事りて全部なりと云へり。 かく神を欺りし故に彼等りて全部なりと云へり。 かく神を欺りし故に彼等りて全部なりと云へり。 かく神を欺りし故に彼等けてエルサレムの神殿より饗物を悪けんとせり。 時間れて経命せり。使徒行傳五の一十一1。 は倒れて経命せり。使徒行傳五の一十一1。

46

48全山の諸靈これを唱ふ。 地三〇の一九。

打トッラチア王ポリネストルはブリアモの末子ポリド

言葉を稱へつ♪溶解せる黄金を彼の口に注入せり○(前六○年)○ 彼は蕃別に有名なりしが前五五年殺のチェザレ及びポムペオと共に三頭政治の一人なりき

然し急ぎしため敢て訊ねず

「俺が汝を導くかぎり戰くなかれ」。途に私の方に寄って云った

近くにゐて呼びを聞こえしめた者等より

初めてこの歌を聞きし牧者達のごとく 凡て Gloria in excelsis .Deo と云ってゐた。

顧ひ止みて歌の終るまで

われらは動かずに宙に立つてゐた。

100

やがて既に慣れし哭きに歸って

再びわれらの聖き旅路を辿った。地にうち臥す諸の影を見遣りつく

いかなる無知も―若しわが記憶

私の覺えたほどに烈しく私を攻めて誤らずは一この時思ひのうちに

知らうと願はしめたことがない。

53[いと高き處には築光神にありし較羊者等に現れて基督降誕の際天使の群時にありし較羊者等に現れて

我等は忽ち振向さ、ボルデリオはまた

かくて始めた「俺は永遠の流竄になれた適はしい挨拶を彼に返し

祝福されし者の集議に置かんことをしたがつ真の法廷が汝を安らけく

「いかに」と彼は云ひ、我等は强く進んだ

彼の階に沿ひて斯く汝等を護衞したのは誰ぞ」。

この者の携ふ印を看んかするとわが師は「汝もし天使の書いて

善人と共にその治むべき者なるを良く識るであらう。

東ねる捲絲竿を晝夜紡ぐ彼女が然しクロトが各のために綯つて

汝と俺との姉妹なる彼の魂は彼のためまた此を引き切られゆる

でで、Et cum spirito tuo (**た汝の靈にも)と云い中世紀に修道僧相會して一人斯く挨拶し相手は此にあり出

To verace corte. 三しの四一。天七の五〇。

7 或は、「汝等もし上なる神の貴び給はぬ影なれば」。

9天闕に入るべき者。 は救ひに入るべきものに非ざればなり。 は救ひに入るべきものに非ざればなり。

10三「運命」の一にして生命の縁の長さを定むる者。 カロトこれを巻きアトゥロポスこれを切る。二五の

求めし水ならでは

飽くことなき自然の渇きが

私を窘しめ、また心促されて私は

わが導者の後よりいそぎ

正義の復讎に憂ひてわた。

すると見よ、既に墓の穴より甦りし基督が

途を辿るふたりに現れ給ひしと N カの我等に記すのにも似て

10一の影が現れ、われらの後に來て

足もとに臥す群を眺めてゐた。

我等は彼に氣づかなかつたので彼先づ語って

云った「我兄弟等よ、神汝等に平安を與へ給はんとを」。

の餘リギルデリオを抱擁せんとす。 いいこう みなるを忘れ敬慕いる 説明を聞く。 やがて スタツィオは 互に影の 身なるを忘れ敬慕のに赴く拉甸の古詩人スタツィオの靈に遇ひ、全山震動の原因に切なる褐望に促がされてダンテは前進し、やがて浄罪や答へて地上 1 學」劈頭の言葉「萬人は自然に智識を求む」を以つて 四の一三、四。ダンテはアリストテレスの「形而上 を飲む者は永遠に湯くことなし」と云へり。約翰傳 の水を飲むものはまた湯かん、然れど我あたふる水 神によりてのみ充ち足らさる」智的湯望。 マリアのスカルに至り井の傍に坐して一婦人に「こ 基督サ

2 苦しきも然し正しき神の刑罰を受けて罪容する煉獄 の諸靈の

獲宴篇を始む⁰

3 其督甦生後二人の弟子エ 加傳二四の一三一一五の づきて共に行きしも彼等これを識り得ざりきっ マオの村 へ赴く途中基督近

拉甸詩人スタツィすの に伴へり。三三の一三五。 彼は煉獄の終りまでダンテ

受くるもののみが此處に事を起こす。

すなはち雨も霰も雪も露も

濃きも淡きも雲はあらはれず 小さき梯より高くへは落ちず 霜も三つの短から段の

乾ける水蒸氣もわが語りし 變へるタウマンテの娘も現れない。 .T.

閃光も、

また彼方に屢方向を

彼得の代理者の蹠を置く

三つの段より前へは登らない。 下の方は或は多少震人であらう。

地に隱るくといよ風ゆゑに搖ぐことがない。 然し上の此處はその理を俺は知られが

或る魂が日の清さを覺えて起ち

14天より來たり天に歸るもの即ち靈魂の 即ち自ら動きたまふ神と解する人もありっ 上昇がころに地震を起こす原因たり。或はこれを天 この靈魂の

15 「エネアの歌」九の五。虹は太陽の位地次第にて東西界レクトッラとダヴマンテの媒イラ。 虹のこと。 に處を更ゆ。比喩的にはこの世の移りやすき情こう

に消ゆとなり。

16 らずの ダンテの宇宙誌によれば地球は氛圍氣に開まれて、 故に囊の地震は氣象等の自然的原因に據るものにあ その層は煉獄の門に至りて盡き、その上に及ばずっ

17アリストテレスに據れば

に三種あり。 三、乾きて强き蒸氣、即ち地震を生ずるもの。この 二、乾きて稀薄なる蒸氣、即ち風のことの 一、蒸氣、即ち雪、雨、露等を生ずるもの。 球の表面に發出す。これ即ち地震なり。 蒸氣は地下にて騒き風となり、出口を求めて地 (氣象學三の一四)水蒸氣

三0上にひとり來ることが能さなかつた。

濶い喉より引き出され、わが数の彼をそこで彼の道しるべとして俺は地獄の

導さらる限り遠く彼の道標となる。

かく訊ねて彼はわが爲わが願望のでなて汝知らば告げよ、さら山がこれを見えたのか」。

かが渇きの断食が和げられた。 針の眼を通し、かくて漸く希望により

外づるくものを覺えることがない。定めなきもの、または慣ひに定めない。

0

この者が始めた「この山の掟として

11地獄の上層にして廣濶なる沸鷹よりの

17 religione 宗教的意義の規範をいよっ

彼がいかに私を益したか、云ふ術を知らず。

やがて賢き導者は「今こへに汝等を捉へる網と

さて汝は誰であつたか、願くは俺に知らせよまた何ゆゑに汝等の慶びあふかを俺は識る。

以してゐたかを汝の言葉にて俺に悟らせよ」。 ひまた何ゆゑに斯く數世紀の間汝がて、に

いと高き王の扶けによつて「デウダに賣られし血の注ぎいでし傷を

わが聲の靈はいとも甘美にて、ために 名によつて彼方に大いに名高かったが」と 名の靈が答へた「信仰は未だしであった。 との靈が答へた「信仰は未だしであった。」と

はる時本能的に天に登らんことを願ふ、即ち網は傑はる時本能的に天に登らんことを願ふ、即ち網は傑

かサレムを滅ぼしたりき。天、六の九三。 (録として紀元七十年に羅馬の將ティト(ティトゥス)エジイスカレォテのユダに寝られて磔殺されし基督の復

24 地上。

い Sazio, il dolce roeta。(いと甘美なる詩人スタッイナ)。 饗宴簿三の二五。

たの こゝは震ひ、また斯かる叫びが伴よ。 清めの證をするは只意志のみにて魂を驚かし、これを全く自由にして 庵を變へしめ、意志にて此を扶ける。 げに魂はまづ志すも本能これを容さず

うち臥してゐるが、今さき優れる閾に一神の正義はてれを苛責に向ける。

もの そこで汝は地震を覺え、山を通じてもの そこで汝は地震を覺え、山を通じて

主彼等を速かに上に召し給はんことを」。

2 convento

19 靈魂は善を志す、されど人の性向はこれに反して罪事る慕へり。

20スタツィオは紀元後九十六年頃に死したりし故煉獄20スタツィオは紀元後九十六年頃に死したりし故煉獄

「默せよ」と默して云へる目配をなさしめた。

然し意志の力は萬能ならず。

蓋し笑みと哭きは各その出で來たりし

その情の從者等にて、いよく「真なれば

いよく意志に從はない。

目配せする人のやうに私は微かに笑つた。

110 そこで影は默して、像の最も

定かなるところのわが眼を眺めた。

をして「かくも大なる勤勞の善さに終らんことを ないますない。

俺に示したのは何ゆゑか」と彼は云った。

今や私は此方彼方に捉へられた。

語れと希ふ。そこで私は嘆息した。

するとわが師は察して私に云つた

32 天上に登り得んことを

トロザ人なる俺を羅馬自らに引き寄せ

民はなほ彼方にて俺をスタッパオと呼ぶ。 たの そこにてわが顳顬はミルト樹の節をうけた。

テエベを歌ひ、後偉大なるアキュレを歌ったが

第二の荷を負ふて途上に俺は倒れた。

千餘のものを照らせし

天來の焔に俺を熱した火花こそ

わが熱誠の種であった。

俺はエネイダのことを云ふので

此なかりせば俺はドゥラムマの重みさへ保ち得なかった。此はわが詩の母であり乳母であった。

出づるに尚一太陽を諾つたであらう」。住み得たらんには、わが負へる禁よりがルデリオの住みし時に彼方に

00

この言葉はボルデリオを私に向けしめ

26スタツィオは羅馬にて三度詩人の賞を獲たりと云は

27 六五年頃ナポリに生まる。 トロザに生まれし同名の修解家あり。ダンテはこの阿人を混同せり。 の修解家あり。ダンテはこの阿人を混同せり。 Achilleide、遂に完成せず 第二篇四五二行にて突然終れり。

30 Enoide (Hネアの歌)。 スタツィオはこれを讃美して曰く

遠くに從ひ、常にその足跡を崇めよっ Nec (u divinam Aeneida tempta 汝神來のアエネイダに近よらず

ドゥラムマは一匁餘の 微量の窓の

31 尚

一年煉獄に止まるも落し。

影を堅含ものゝ如くに俺の扱ふを見て なに向かひて俺を熟する愛の

語るを恐れず、語つて斯く切に

三0彼の求めることを告げ知らせよ」。

優れる愕きに汝を捉へさすであらう。恐らく汝は怪しむ。しかし私は

汝が人と神々とを歌ふ力をわが眼を高さに導くての者こそ

汝もしわが微笑の原因が他にありと汲める彼のギルギリオである。

彼につき汝の語りし言葉こそ其原因なりしを思へ」。信じたとせば、真ならずとして其を棄て

1三0 この者は既に屈んでわが教師の足を

汝も影、なんぢの見る者も影なれば」。 抱からとしたが、彼は云つた「兄弟よ做す勿れ

そこで彼は起って「今我等の虚しきを打忘れ

五j。 ダンテはこれを忘れしならんか。33 然しソルデルロとギルヂリオとは相難せり(六の七

降り、そして我等のうちに

汝の情愛を俺に示した時より

然し告げよ、頼み過ぎてわが手綱をかくて諸の階も今や俺には短しと思はれる。本見の人に斯くまで人を結んだことが嘗てない。

10 弛めるとも友として俺を赦しなの駒のうちなる斯くも大なる智の間に汝の勵みによって汝を充たせし汝の勵みによって汝を充たせし

て、一言一句は俺を愛する貴い印である。まづ微笑ましめたが、やがて彼は答へたまって、まって、ないの言葉はスタッスを少しく動かして

けに真の理が敵されるため

6スタツィオは食婪の臺地に五百年を過ごせり。二一

第二十二曲

水の滴る奇しき樹を見、その中より靡いでゝ禁懲の模範を逃ぶ。てヸリヂリオの牧歌を讃称す。やがて饗食浮罪地に至れば質のりて福なり」の磨きこゆ。スタツィオ基督教徒となりし次第を詳しく語り第六臺地に登らんとして第五F字ダンテの額に消え「義に渇く者は

向けし天使は、わが顔より一撃を抹して天使すなはち我等を第六圓に

1第五卫字。

また彼は願望を正義に置く者は既にれわらの後にのこされた。

sitiuntにて彼の言葉を終った。

なりと我等に告げて又語らず

容易く進み、何の苦もなくかくて私が他の溝よりも

上にと迅き諸靈に從つてゐた時容易く進み、何の苦もなく

10 ボルデリオが始めた「徳に

燃える愛はその

がが外

12

現れだにせば常に他を燃やす。

C 漢名] 号くごとく 蓋をなる皆す所なり」 号た事も

(【饑ゑ】 渇くごとく義を慕ふ者は顧なり) 馬太傳五の六。括弧中の語は次の臺地にて述べらる。 二四の

4 ギルデリオとスタッイオの

諷刺」八二以下に賞證す。 年頃死せり。 - スタツィオの友人にして彼を「第七年頃死せり。 - スタツィオの友人にして彼を「第七年頃アク#ノに生まれ一三〇

生きる間または臨終に、無知のため * 等しくこの罪を俺は悔いた。

妨げられてこの罪を悔いず

巻も共に此處にその綠を なた一の罪の真裏にあたる なた一の罪の真裏にあたる

乾さ上げることを知れ。

吾

俺が身を潔めてゐたとしても、それはされば貪婪を哭く民のうちに

「おてデオカスタの二重の悲しみの牧歌の歌人が云つたりである」。その反罪の為斯かる目に遇ってゐたのである」。

11 濫費の罪なることを知らずして死するとも罰は死る

12地、七の五六、七。

「倫理」の基調的原則なり。

15 震復罪。

16 ギルデリオ。 彼の作 Bucolica (牧歌) によりて斯

18「テエペの歌」のうちに。 やの主権を争ひ共に死せり。地、二六の五二。 やの主権を争ひ共に死せり。地、二六の五二。

19スタツィオは「テエペの歌」の四一にQuem prius 新願を捧げたり。ダンテとれによりてスタツィオの 異数的證左となせるなり。然しダンテ自らも同じこ

物の姿が有らぬ疑ひの

恐らく彼の環に俺がゐたので

俺があの世にて貪婪であつたと

信ずるやうに汝の問が俺を思はしめる。

離れ過ぎ、この過ぎたるを

要干の月が罰したのである。 数千の月が罰したのである。

「おく黄金の聖き湯きよ、何ゆる

20 汝の叫ぶ句を悟ってわが念ひを

惨ましき試合を身におぼえたであらう。

正しくしなかったならば、俺は轉ばしつく

かの時手の浪費に翼を擴げ

7食が浮卵の凝地o

• Quil non mortalia pectora cogis, Auri sacra fames?

10地、七の五五。 の意味に變へて以上のごとく自由に翻譯せりのの意味に變へて以上のごとく自由に翻譯せりの「清貧」

既に全世界は永遠の王國の汝の尚も良く見得るやう、手を伸ばして彩らう。基督教徒となつた。さてわが描けるものを

上に觸れたなんぢの言葉が使者達により播かれての信仰に果を結んでゐた。

ドミツィアノが彼等を迫害した時には彼等を訪れることを慣ひとした。をはて彼等はいと聖く俺に見えて來

3

彼方に止まってゐた間俺は彼等の哭きは俺を涙なからざらしめた。

彼等を助け、彼等の正しい習は

詩のうちに希臘人をテエベの諸の流にんに他のすべての宗派を蔑ましめた。

25スタツィオが基督教徒なりしといふダンテの想像はころなし。

27 基督の使徒。

28七〇一七二行。

非難せり。但しその確證は當時の文書になし。 迫害者としてエウモビウス及びテルトウリアン共に29羅馬の皇帝(八一十九六年)。 基督教徒の殘忍なる

30地上。

まだ汝を忠信たらしめなかつたと見える。

「漁夫」の後に汝の帆をあげ得たのか」。 なかなる蠟燭が汝の闇を散らし、斯くて後 なりとすれば如何なる太陽または

ベルナンの方に遣してその窟に そこで此者は彼に「なんぢは先づ俺を

を登をうしろに携へゆきて 飲ましめ、後俺を照らして神に近づけた。

己を助けず、おのれの後の人々を

質からしめる人のごとく

その『世は更まり、正義は歸りて

天よりくだる」と汝は云つた。

汝によつて俺は詩人となり、汝によつて

21何の天啓(太陽)何の人智(蠟燭)がっ

22 聖彼得。 天、一八の一三六。

窓撮をいふ。 こゝにアポルロとムウゼ九女神住ま窓 北方希臘の連山の名にして特にデルフィの北數哩の

Magnus ab integro sacclorum nascitur ordo.

Jam redit et virgo, redeunt Saturnia regna;

Jam nova progenies caelo demittitur alto.

降誕の鎌音なりとせられたり。 とれは元來 Asinius Pollio の子の誕 生 を指すものなるが、舊約票書のメシアに闘する句殊に以饗重のそれに似る處よりして中世紀に於ては敷世主基督のとせられたり。

常に伴ふ山のことを語る。

そこにエウリビデとアンティフォッンテ、シモニデ アガトネその他嘗て額を月桂樹に飾りし

多くの希臘人が我等と共にゐる。

ディフィレとアルデア、また昔のごとく 汝の人々のうちアンティゴネ

悲しむイスメネが其處に見える。

そこにティレシアの娘とラティおよび・ ランデアを示した彼女が見える。

\$ のが姉妹等と共なるデイダミアがゐる」。

既にして詩人達ふたりとも

新たに心をとめて四邊を眺めた。 の侍婢の四人は既に後に残され 登りと城壁上りはなれ

日

43 ムウゼ九女神C

44 ベルナソっ

45 前四八〇一四四一年。

48 前四四八一四〇〇年頃® 47前五五六—四六七年頃° 希臘詩人等 o 劇詩人。 悲劇詩入o 希臘の抒情詩人の

5スタツィオがその「テエペ に歌ひし諸人物のうちの の歌」及び「アキュンの歌」

51 テエベ王エディホの娘。

53 デイフィレの姉妹にしてポリニチェ52 王アドゥラストの娘。 の妻の

55アドゥラスト王軍をテエベに進めし54エディポの娘にして夫は戰死せり。 アドゥラスト王軍をテエベに進めし時彼女は渇する 軍隊にランヂアの泉を数へたり。その間に子を蛇に 殺されたり。

マントの地、二〇の五四、ダンテは彼女を妖女と ことを忘れしものにやっ しながら煉獄に置くは如何なる故にや。妖女とせし

57ペレオと婚してアキルレを生めり。 アキルレの愛人。一以上はスタツィオの「アキルレの 歌」中の人物なり。

六十五行註

31「テェベの歌」を作らざりし前。

九の然し恐れて耐れた基督教徒となり 曳き行く前に俺は洗禮をうけたが

越して第四環をめぐらしめた。その微温が俺をして四世紀目をこの微温が俺をして四世紀目を

俺より厳せる葢を我ために擧げし者よさらば汝、わが云ふ斯く大なる寳を

私に語れ、我等の古きテレンツィオまれた登りを除す間、汝もし知らば

チェチリオ、ブラウト、及びザルロは何處ぞ。

わが導者は答へた「彼等とペルシオと俺と彼等は罰せらる」や否や、又何の小路にゐるや」。

00

官目の獄の第一帯にゐる。
多く乳を飲ました希臘人とともに
その他數多のものが、かのムウゼが他の誰によりも

32四世紀間。 二一の六九。

33 異本、友なる (amico)
34 カルタデネに生まれし羅馬の喜劇詩人(前一九五一五九年)。 36 喜劇詩人。 前二五四年一一八四年。37 同名の詩人二人あり。 テレンティオ・ヴァロは前一一六年に生まれたり。また史詩に秀てしヴァロ・アタチノあり。ダンテは恐らく陳者を混同せしならん。39 地獄の何環にありや。39 地獄の何環にありや。41 詩聖オメロ(ホメロス)。

此は下へと細くなつてゐたが

われらの路を鎖す側に 人を登らしめない為だと私はおもふ。

清らかな水が高い岩より落ち

葉を越えて上に散らばる。

すると葉蔭より一の聲が

四〇

「汝等ての糧に乏しかるべし」と呼び

答へる已が口よりもば筵をいかに奪くやがて云つた「マリアは今汝等の爲に

完からしむべきかを深く考へたり。 完からしむべきかを深く考へたり。

水にて足れりとし、またダニエルロはまた古の経馬の女等は飲料を

原始の世は黄金のでとく美はしく

糧を輕んじて智慧を獲たり。

て登るに由なし。 に 後歌り下にくだるに 從ひて疎らになりゆく。 從ひに を張り下にくだるに從ひて疎らになりゆく。 從ひ

63 山腹。

は汝等とれな食ふべからずっ

の範例として既にこれを用るたり。一三の二九っカナの婚筵。 約翰傳二の一十一一。ダンテは仁職

65

66 共和國時代に羅馬人は酒を飲まざりき。 たまの飲む酒とを以つて己の身を汚さじと心に思ひた 上の飲む酒とを以つて己の身を汚さじと心に思ひ定め」たり。

1三0燃える角を上に向けてゐた。

かく慣いが彼處にて我等の旗であり、一をめぐらねばならぬ」。

となってのなき魂の諸ひゆゑに なたこのなき魂の諸ひゆゑに

彼等の話に耳を傾けた。
ひとり進み、詩の知識を與へし

1月0 然し忽ち途の央に現れた一本の

樅の樹が枝より枝と高く細りゆく如く

彼等の美しい話が裂かれた。

57日輪の軸○

60日の出後四時過ぎ。

四時過ぎ。即ち午前十時過ぎ。一二の八

61 右方に廻りの

第二十三曲

語りやがてペアトゥリチェに選ぶ旨を告ぐ。「ロースリンツェの女達の風俗を叱責す、ダンテは三界過騰のことをいってフィレンツェの女達の風俗を叱責す、ダンテ進んで飢餓に憔悴せる饕食家を見る。その眼窩は寝石なき指

失ふ人の常にするやうに、 緑葉の蔭に私が注いでゐた 宛ら小鳥を追ふてその一生を 眼

父にも優る者が私に云った「子よ V ざ來たれ。當てがはれ た時を

割って尙よく用るねばならね」。

顔とこれに劣らず夙く歩みを私は

行くことが私に何の苦をも與へなかった。 賢者達の方に向けた。 彼等は語ってゐたので

すると見よ、Labia mea, Domineといふ 哭さと歌とが聞てえ

10

悦びと憂ひを生むさまであった。 ゝ慕はしき父よ、わが聞くは何だ」と

て此

一句は極めて妙なり。

1 ヸルヂリオ^O

3「主よわが唇をひらきたまへ」詩篇五一の 2被等の語るを聞くは嬉しく、 譯聖書にては胃頭の語によりてこの詩篇は Mi erere 苦な償ふて餘あり。 と稱せらる。變食即ち唇の誤用を暗示するものとし これを聞いて歩むは、

150 渇さにて凡ての小川を神酒とせり。

歌と蝗とは荒野に洗禮者を養へる 電音書のなんぢらに示すでとく 電音書のなんぢらに示すでとく

68「ヨハネは身に駱駝の毛衣を着腰に皮の帶をつかね蝗と野饗を食物とせり」馬太傳三の四。 像 11の11の

224

「見よ、デェルサレーメを失ひし民を

その時マリアは子に嘴を打ち込んだ」。 「臓窩は實石なき指輪のごとく 「臓窩は實石なき指輪のごとく 「臓窩は實石なき指輪のごとく 「臓窩は實石なき指輪のごとく 「臓窩は質石なき指輪のごとく 「臓窩は変石なき指輪のごとく

彼等の憔悴と彼等の悲しき鱗の原因がその譯知らずば誰が信じやう。

EO すると見よ、一つの影が頭の深處より 斯く飢えしめたのかと既に私は愕いてゐた。

顔にてはそれと見分くべくもなかつたが烈しく叫んだ「此は俺に何たる恩寵ぞ」。

6羅馬の軍將ティト(ティトロス)がエルサレムを包閣せ し時マリアと呼ぶ一婦人おのが子の半を食らひ半を 食を乞へる兵士に與へたりとo Josephus, Do Bello Jud., VI. 3. 「おのれの足の 間より出づる胞衣と已 の産むところの子を取りて密かにこれを食はん」 申命記二八の五七○

7神が人の顔面に OMO (HOMO=人) と記せりとの係説中世紀に行はれたり。前後二個のOは限を示し
が表しく認め得べし。

日撃せしならん。 (株なりのダンテは當時鎖々たりし飢饉にて良く此な (株なりのダンテは當時鎖々たりし飢饉にて良く此な

9路加傳一の四三。

結節を恐らく解さゆく影であらう。 私は始めた。すると彼は「ものが負債の

默して虔しき魂の群が 路にて見知らぬ民に追ひつき 路にて見知らぬ民に追ひつき

三0 迅さまさりて我等の後より

質は蒼白く、いかにも触れていづれも眼は暗く洞となり

皮は骨の形を成してゐた。

恐れた時も、そのため斯くエレシトネが食を斷つて基く

思ひに耽りつゝ私は自らの裏に云つた

皮ばかりに萎えたとは私は思は

AJ.

4 變食淨罪の徒の

「メタモルフォシ」八の七三八一八七九。 られし林の樫樹を伐り倒せしため罰として飽くなるられ、滲におのが肢盤に食ひ入りたり ちテッサリア王トゥリロバの子。 チェレレ女神に献げ

かく剝ぐのか。他の慾望に充つる者は

すると彼は私に「後にした水に がらいると彼は私に「後にした水に

突きつゝ歌ふ凡てこの民は いなれて永遠の聖旨より一の力が また木に永遠の聖旨より一の力が

を越えておのが食慾を追ふたので 度を越えておのが食慾を追ふたので

林檎より、また緑のうへに散る

水煙より發する香が

またこの床をめぐって一度ならずのならの慾を我等に燃やす。

たいまたこの床をめぐって一度ならず といまたこの床をめぐって一度ならず

蓋し己が脈にて我等を自由ならしめ給ふた時

12 gola. 咽喉o

13 spazzo. 馳場で

14樹が一本ならずとの意なりや(他の一本は次曲に出めか。

その聲が私に示した。 然し貌の自ら打ち消したものを

わが想出を悉く私に再び燃やしての火花は變はりし俤の

西 色を褪せさす乾ぴた痂や彼は乞ふた「あゝわが肌の

護衞者となれる彼方の二つの魂は対の眞相を俺に告げよ。また汝の

泣きし汝の顔の斯くも變はり果てたのを見て私は彼に答べた「その死せる時嘗て私の誰か、汝ためらはずに語れ」。

されば神ゆゑに私に語れ、何が汝を

今劣らず私を憂へしめて哭げかす。

10 類にては何人か不明なりしも摩がそれを示せりい

11有名なるコルソ・ドナティの兄弟にして黒癬の首領11有名なるコルソ・ドナティの兄弟にして且つ親屬なりの四方がンテの妻ヂェムマはドナティ家のものなりきの即ちがンテの妻ヂェムマはドナティの兄弟にして黒癬の首領

20 また他の諸の圓より俺を救ひだした。

俺のいたく愛せしわが可憐の寡婦は

いよく神に愛しまれ又悦ばれる。 善行に孤獨なればなるほど

蓋し俺が彼女を殘したパルバチアよりも

女達の方が遙かに貞節である。 サルディニアのパルパチアの

この時のいと古くならざるに おゝ優しき兄弟よ、わが何を云はんことを汝は願ふぞ。

一00胸の乳房も露はに行くことが フィレ ン ツェの厚顔な貴女達の

講壇より禁じられる未來の時が

身を厳ふて行くやう、何れの野量人 既にわが眺めのうちにある。

> 21 前煉嶽

22過ぎ來たりし五臺地。

23フィレンツェ人のことなり (とれを量人に比す)

24サルディニア地方の山の名。 一五の九九以下。 ンダル又はサラチノ人の後裔なりと想像されき。天 のどとく生活せりと聖グレゴリオ云へり。彼等はブ との地方の住民は歌

25 近き將來に於てこ

231

優れる生命に變へたその日より以來その意志が我等を木に導く」。その意志が我等を木に導く」。

我等を再び神に婚せしむる善き憂いが

犯す力が汝に盡きたとすれば、なほも罪を

70

時が時に償はれ下の低き處にて か。

すると彼は私に「わがネルラがそのなんだに遇ふてとゝ私は信じてゐた」。

苦難の甘き苦艾を飲ましめる。 とこれをする になれるする。

その敬虔な祈と嗟嘆にて彼女は苦難の甘き苦艾を飲ましめる。

17 現世より死して來世に入りし日より。 はかの聖旨の成らんことを願ふ意志。と云へるなり」馬太傳工七の四六。と云へるなり」馬太傳工七の四六。

15 基督十字架に懸り血を流して贖罪を果たせし時「三

18改版。

らずして此處本煉獄にゐるぞ。四の一三〇。. でぼす前に改物せざりしとせば、何故に前煉獄に居19罪を犯エカ(一一の九〇)ある時期即5現世を死が

20多分デオゾネルラの略。 フォレゼの妻。

立ち出でしめた。その時彼の」と私は太陽を指して

1三0「妹が彼方に圓い姿をしてゐた。

この者は彼に従ふこの真の

真の亡者より導き出した。 肉のまゝ深夜を貫いて私を

そこより彼の勵が私を曳きあげ

世の歪めたなんぢらを

でくする山を登り且つめぐる。

私をその伴侶にすると彼は云ふ。ベアトッリチェのゐる處に私が達するまで

彼處にて私は彼に別かれねばならね。

彼を指ざした「また他のひとりは

35スタツィオの

斯く私に語るはボルデリオである」とて

30

基のれより移すところの影である」。

34 淨罪山。

33 月。アポルロ(太陽)と共にレダの双兒。

いづれのサラチノ人の女が靈の訓

その他の訓を嘗て要したか。

然し耻づべき女達にして迅き天の

蓋し先見こゝに俺を欺かずば 風に口を開いて泣くべきである。

いま子守唄に賺される者の頰に髯の

011

あ、兄弟よ今、は既や汝は俺に隱れうる由もない。生えぬ前に、彼等は悲しむことであらう。

俺のみならず、この民が皆

そこで私は彼に「汝と私、私と汝の汝が太陽を蔽ふ處を眺めをるを汝は見る」。

わが前に行く者が、去る日私を彼の世より現在の記憶は一人惨ましくなるであらう。

56 清火天。

27 ammanare. 束につかねる。 二九の四九o

28 ダンテの投ずる陰影

31 altr ior. 字義 的には今日我等のいふ 一昨日なるの ギルヂリオ。

彼女は何れに優りしか俺は知らない」。 高さオリーポに凱旋し、美と善のうち

かく彼はまづ語り、やがて「定食のため

皆を名ざすてとが此處に禁じられてない。 われらの姿の斯くも搾り去られるゆる

この者は」とて彼は指さし「ボナデッンタ

即ちルッカのボナデッンタである。又その向かふに 衆に優つて縫ひ込まれたあの顔は

50

彼はトルソ人にて、断食により 聖き教會をおのが腕に抱いた。

その他多くの者を逐一彼は私に名ざしたが 71 ルセナの鰻とヹルナッチア酒を淨める。

ウバ かくて其爲一の暗い貌をも私は見なかった。 名指すや皆滿足氣に見え ルディノ・ダルル・ピラまた牧標にて

十字架ありの

7 dieta. 斷食

8彼等の羸痩甚だしく到底認識し難き故彼等は名ざい るを繰はずつ

9 獨創なき詩人にして南歐詩人の模倣家のトウンパドウル 年には尚生存しゐたり。

俗語篇一の一三〇。

10 憔悴甚しき顔。

11法王マルティノ第四世(一二八一一八五年)。 しめたりと。この葡萄酒は嚴冬を越せしものなりと れし白葡萄酒に溺死せしめ、かくて後これを料理せ rnaccia (西班牙語の garnacha) 即ち一種の精擬さ き變食家にして特にボルセナ湖の鰻を好み此を vo. 彼は佛蘭西トゥルヘトルソンの人なりき。

第二十四曲

話も歩みを、歩みも話を綴めず

さなが

ら順

風に追は

る

>船のごとく

語らひつく我等は勢ひょく歩んだ。

そこで私はわが話を續けて云つた眼の溝にて愕さつ、私に寄つて來た。諸の影が私の活きをるを識り

「恐らく彼は他のものゝため

10 さて汝知りをらば告げよ、ピッカルダは何處を。願ふよりも緩く登りゆく。

おが心を留めて見るべき人ありや」。 告げよ、斯く私を眺めるこの民のうちに

わが姉妹はおのが冠により既に

に感じて第六子字消え[義に飢らる者は脳なり]との麝を耳にす。シテは更に新たなる樹のもとに歪り鑒食戒の言葉を聞き、微風を類とすりが四世あり。フォレゼ更に諸鑑のことを述べ、やがて女鑒食淨顕者の中に鰻心白葡萄酒に溺死せしめて食らひしと云ふ法正

l rimorto 悲しく蒼白く羸痩しをりて二度死せる

2落ち窪める眼窩っ

4 ギルギリオの

緩(す。 スタツィオは彼と語らんため歩みな

5フォレゼとコルソ・ドナティの姉妹。 天、三の三四人

234

かが邑を汝に樂しきものとするであらう。被らぬ前に、彼女はいかに人が難ずるとも

假しわが囁きを汝が誤り採るとも、汝この覺悟を以つて行け

始まる新しき詩を起こした者であるか」。

そこで私は彼に「私はわが身を

汝等の筆が命ずる者のうしろに 愛がそくる時にしるし、またその衷に 愛がそくる時にしるし、またその衷に がまっトネと俺とにわが聞く甘美な清新體を がまったる時にしるし、またその衷に

21 rima. 汝が眞にかの淸新體の創始者ダンテたりや。23「愛を識れる貴女達よ」9「新生」第一の短詩の胃頭。

26.11 Notaro. シチリア派の詩人デヤコポ・ダ・レンティ 27 か #ットネ・ダレッツォ。 彼は喜樂僧の一人なりせる 一二九四年頃死の 二六の一三四。 28 dolce stil nuovo.

30 愛。戀。

アンニその他フィレンツェ派の詩人達。

MO 虚空に歯を掛けをるを私は見た。 多くの人を牧したボニファチオが共に飢ゑて

フォルリに飲みながら尚も飽くことを 渇き微かなるに嘗て悠々として

然し眺めて後他を措いて一人を識らなかつたメッセル・マルケゼを私は見た。

私を識ると見えしルッカの人を心に留めた。心に留める人がある。その如く私は

正義の傷を彼が感ずるところに彼は囁いた。そして彼等を甚く挘る」

BO 私は云つた「おく如何にも私と語らんと

何か知らずデェントゥカと私は聞いた。

彼は始めた「女が生まれてまだ頭巾を汝の言葉にて汝と私とを飽かしめよ」

る人あり(ペピスト)の

4多分ポニファチオ・アイ・フィエスキのことならん。

野にあり。

「俺は常に渴く」と云ひしと。 では常に渴く」と云ひしと。 では常に渴く」と云ひしと。 では常に渴く」と云ひしと。 では常に渴く」と云ひしと。 では常に渴く」と云ひしと。 では常に渴く」と云ひしと。

17ボナデウンタ0

18 piluocare. 元來は葡萄を摘むこと。

19神の正義が加へる飢渴をらくる咽喉乃至唇。 と云ふ美しき女にしてコスチオリノ・フォンドラのを云ふ美しき女にしてコスチオリノ・フォンドラの妻を指すとも称せられき。或はこれを固有名詞とせずして Bente(民)の指小名詞即ち卑賤なる民の意な

過ぎ行かしめ、わが後に來て云った。

私は彼に答へた「何日までわが身の 一億が汝を再び見るは何日のことか」

蓋し わが意が岸邊に到るに先んじ得ない。 わが住むべく定められた處は

生さるかを知らないがわが、歸還いかに迅くとも

日々善を挘りとられ、悲しさ

ろ

彼は云つた「さらば行け。蓋し此てとに 亡滅に定られるやうに見ゑる」。

谷の方へと獣の尾に曳かれゆくを俺は見る。 最も責ある者が、罪の除かれることなる

獣は一歩でとに迅さを増しゆき

いよく加へて遂に彼をうち

諸の輪が」と彼は眼を天に向けて その體をおぞましく毀ふて殘す。

34 浮騨山の。

フィレンツェ

35

36八の一三三。

37フォレゼ已が肉身の兄弟コルソの運命を躁言す。 彼は黒黨の首領にしてフィレンツェの禍の主囚たり 遂に殺さる。「谷」とは地獄のこと。 き。一三〇八年市民に追跡され、馬に曳きづられて

いかに迫りゆくかを良く俺は見る。

既に詩體と詩體の別を見ない人である」。 これを越えて切に眺めやうとするは はか

ニロ河に沿ひて冬でもる鳥が かくて滿足氣に彼は沈默した。

かくて风く急ぎ列をなして行くごとくしばしば室に隊を組み

顔をめぐらし歩みを迅めた。 羸痩のため意のため身も軽く

フォレゼはそのごとく聖き群を

31 真の詩人は内心真純の霊感にのみ耳傾けて他の思ひ

22 突及ナイル可で 達するの機なからん。

を好めり。 地、五の四六のダンテは壓鳥の引例32埃及ナイル河。

時であったので餘り距ってゐなかった。私に現れ、私が此方に廻った許りの

その下に民が手を擧げ、何か分からぬことを

葉に向かつて叫ぶを私は見た。

願ふも願はれる者が答へず、その切にその狀は宛ら求めて欺かる、子供等が

やがて迷びが醒めたやうに彼等は去つた。彼等の意をいと鋭くするのに似てゐた。

願ふ物を高く舉げて蔽さず

だけた大なる樹にわれらは 死た。 既にして斯く多くの祈と涙とを

エザの嚙みし木はなほ高くにあり。 「近寄らずに過ぎ越せ

かく誰か知らず枝の間に語った。

23餘程由を登りし故臺地彎曲の废急になれるなり。

43 果を摘み得ざることを知りての

は 智慧の樹は浮躍国の質なる地上樂園に**あり。三二の**

三八以下。

「多く廻らぬうちに、わが言葉の進んで

明かし得ねことが汝に明かにならう。

時を俺はうしない過ぎる」。 いと貴く、かく汝と相駢びゆきて さらば汝は止まれ。蓋し時はこの王國に

騎士が駛騙しいで、先陣の譽を

恰もしばしば乗馬の隊より

彼は大跨に我等を去り 獲んとして行くやうに

二人のものと共に道に残った。 私は世界の斯く大なる元帥なりし

00 やがて彼が我等の前に遠く

潜み入りわが眼が彼の言葉を

また一本の林檎樹の重く生をした枝が 追ふ心のごとく彼を追ふてゐた時は

39多年ならずしてコルソの死を目撃せん。

40 maliscalchi ギルデリオとスタツィオのこと。

11フォレゼの言葉の意味朦朧たりしが如く今や彼の姿 も微かになりめっ

誰であるかを見やうとし私は頭を擧げながに云つた。そこで私は愕いて

180 硝子や金屬も爐の中に管て此者程に廻れ。平安に到らんとする者が廻れ。平安に到らんとする者が

彼の貌はわが眼を眩ました。斯く灼いて赤くは見せなかった。

私は身をわが教師達の後に回した。

一陣の風のわが額の央を撃つを 売れて至み、搖いて薫ずるやうに と騙として草と花とに なっている。 たっている。 たっている。 たっている。 をかっている。 たっている。 をかっている。 たっている。 をかっている。 をかったいる。 をかっている。 をいる。 をいる。

48 第六臺地の天使の

9 眩暈して見るを得ず只耳を便りに

O 寄り添ひ、昂まる側を前へと進んだ。 そこでボルデリオとスタッィオと私は

飽きし時二重の胸にてテセオと闘ひしその聲が云った「雲の形をし、食らひ

呪はれし者等、また飲まんとて隋弱な

小山を降りし時、伴侶とせざりし姿をし、かくてザェデオンがマディアン人さして

伯希來の人々を想ひ起こせ」。

かく函端の一方に添ふて我等は

既に惨ましい獲物を受け嗣ける

三〇 やがて淋しい徑に脱けいで、いづれも饕食の罪に耳傾けつく過ぎ去つた。

瞑想に耽ってもの云はず

「何を思ひつ、斯く歩むぞ、汝等孤獨の三人」と千有餘の歩みが我等を前に運んだ時、一聲

お即ち樹と山腹の間を行けりの

46チェンタヴロ等。 彼等は雲の子にしてペリトネの好差に鯨飲し其ひとり新婦を奪ひ去らんとして雅典王テセオと戦ひたりでメタモルフォシ」一二の二一なり。 なり。

れによりて勝利を得たり。土師記七かり―七の台のを楽て、大の如く砥むるもの三百人を集め、こものを楽て、大の如く砥むるもの三百人を集め、これが強大の將ギデオンがミアアン人を撃ちし時エホバの

第二十五曲

沮むを容さず登るべき時であつた。 子午線の環を残してゐたので 太陽は金牛宮に、夜は天蝎宮に

何でとが現る」とも踏み止まらず やのが道を辿る人のでとく

そこで急迫の刺が貫けば

我等は狭に沿ふて入り

階を前後してのぼった。 狭うして登る者を分かっ

10 翅を擧げるが、敢て巢を さて雛の鸛が飛ぶ意より

私も訊ねんとの意に燃やされて 見楽てずに此を重れるやうに

> 靈體論に及ぶ。やがて第七臺地に入れば邪淫の徒灼熱中にありて聖スタツィオ發生と胎也に關して詳しくダンテに語り、吹いで死後の 歌を師唱し童貞マリアを讃美する

1太陽の正反對の點をいふ。 二の四の地、二四の三の

2午後二時頃3 ŋ 他の半球の子午線にある譯なりの る。天蝎宮は金牛宮より百八十度を距つ。即ち今や 金牛宮は白羊宮の次にあり。一宮は二時に當た 太陽は煉獄に於て正午に自羊宮にあ

11010

動物誌によれば鸛は服從の典型の は巣を去らずと傳へらる。 母の許しある迄

感じて、神膏の香を嗅がしめた。

一一の初の動きを鮮かにおぼへ またその語るを私は聞いた「いとも

過ぐる慾をその胸に燻らしめず 大なる恩龍に照らされて味覺の愛が

たえず義に飢うる者は福なるかない。

50一七の六七。 二二の五つ

51 馬太傳五の六0

いま汝の傷の癒者たらんことを俺は乞ふ」。見よ此處にスタッでオがゐる。彼を呼んで

증

かくして彼は始めた「わが言葉ををが永遠の眺を彼に説き明かすともなれば、俺を容せよ」。

汝の云ふ『如何に』の燈となるであらう。 子よ、なんぢの心が辨へて容れんか

食卓より汝の移す糧のやうに

0 心臓にて人の全肢體の形成力を

残される完き血は

肢體となる血におなじ。 はこと、諸の脈をめぐって

尚も消化せられて、語るよりも寧ろ

教徒なるギルデリオよりも良く説明し得べし。11 疑惑。

13 永遠の聖旨。 異本、神の審判 (venedotta)。
は以下ダンテはスタツィオの 口を借りて人體發生とその震魂との關係を逃ぶ。これはアリストテレス(「霊魂起原論」第一、二篇の結論)に基づけるトマス・ア・連起原論」第一、二篇の結論)に基づけるトマス・ア・連起原論」第一、一九、九。 饗宴篇四の二一。

お二〇、二一行を見よ。

16 血管

71 凡ての血は心臓にて身體形成の力を受く。 全身なを此處に獲、かくて現代の言葉にて云へば生殖細胞を此處に獲、かくて現代の言葉にて云へば生殖細胞を此處に獲、かくて現代の言葉にて云へば生殖細胞

語らんと構へる人の身振にまで

到りながら此を消してしまつた。

歩みは迅かったがわが柔しき父は

乳いた言葉の弓を放てよ」。

そこで安んじて私は口を開いて

何ゆゑに人は痩せうるのか」。

5

始めた「營養の要を覺えぬ處にて

火把の盡きると共に消えた狀を憶ひ起てせば。彼は云つた「汝もしメレアグロが

左程此は汝に澁くないであらう。 た程此は汝に澁くないであらう。

鏡のうちに揺ぐ狀を思へば

然し汝が意の衷より安んじうるやう

5暦までのぼらせながら0

?飲食する要なき霊體が何故に飢ゑて痩せるや。

8 メレアグロが母アテアの兄弟鑑を殺すや、母は復讎として火把を火に投ず。かくて強言に從ひ火把の燃がにては見えざる力が震體を燒く。 9 困難ならざるべし。 天、三〇の七九。 9 困難ならざるべし。 天、三〇の七九。 反映す。さればとムに食物を慕ふ徒らなる願望は痩せたる體形となりて寫象す。この事を考へんか汝の発症は解かるべし。

心臓よりいづる能が

然しその動物より人間に成る狀を

即ち彼は可能智性の占める機關を汝に優る智者を誤らした點である。

えれを魂より離した。 見なかったので、彼の教のうちに

次に來る眞理に胸を開けて

始記の5ちて記載するや否 知れ、脳の機闘が

斯かる工を悦び、能の充ちで 『原動力』は此に向かひ、自然の

での靈は其處にあって活きるもの**を**

20 形成力は今や感覺的靈魂 (amima sensitiva) となり

21 感覺的靈魂より更に智的(人間的)靈魂(anima inte-

22 Averoos (一一二〇乃至四九十一二〇〇年)。 有名なる正刺比亞の學者なり。彼はそのアリストテレスは能動的にして他は受動的なり。前者は個人を超越して永遠的のもの、後者は一時的にして能動的智性して永遠的のもの、後者は一時的にして能動的智性となる故にダンテは誤れりと云ひしなり。

3 bossipile intelletto. 駅には智性なる、人間の智性は活動するか或は活動せざる智性なる故に可能智性と云へるなり。天使の智性は常に全く活動す。天、と云へるなり。天使の智性は常に全く活動する天

Xi Motor Primo. 神。アリストテレスの dp Xi マブタ 25 Motor Primo. 神。アリストテレスの dp Xi マブタ

默すべき處にくだる。かくて其處より

自然の器にて他の血のうへに滴る。

そこにて此と彼とは共に結ばる。

一は受動となり他は能動となる。

彼と結ばるや此は働き始めて先づ疑り

吾のやがて形を成し、己が體として のに生命をあたふ。

をの異なるは彼は途上にあるに 能動の力は植物の魂のごとさ魂となる。

これは既に濱邊にある。

かくて此は働きて海綿のごとく

もろ~の器關をつくらうとする。 ・ なのとのというとする。

子よ、自然が全肢體を生む處の

18血のいづる源なる心臓の

19 この時胎兒は更に發達しゆく途上にあることな展せざるが胎兒は更に發達しゆく途上にあることな展せざるが胎兒は植物的靈魂は發展の絕頂に達してこの上進

活ける肢體とやなじ形を採る。

他よりの様々な光線を反射して また雨に充つる時

空氣が自らを飾るやうに

II è 隣接せる空氣は りし魂の能に

斯くて火の搖ぐまゝに從ふ 印せられて斯かる形をつくる。

小さき焔とおなじく

この新しき形は靈を追ふ。

00 されば此より其姿を採るゆる 靈は影と呼ばれる。斯くて又此により

此によつて我等は語り又此によつて笑ふ。 凡ゆる感覺の機關を獲、視ることさへする。

31太陽の光線の七色を反射して虹となるどとく。

30 靈魂は四圍の空氣より影なる體軀を形成す。

32それん、浮雕地と定められし處に止まる魂の。

33 ombra

この言葉の不思議さを減ずるため感じ、己れ自ら廻る一個の魂を造る。 おのが本體に攝收し、かくて生き

蔓より濾しいづる液汁と結んで

自ら人性神性を携へ行く。

記憶、智解、および意志は

止まらずして奇しくも魂は前よりも活動して遙かに鋭くなる。

自ら岸邊のいづれかに落ち

彼處に容れられるや直ちに其處にておのが途を初めて知る。

で自らを了解す」アポロエス。 一人間的 。 これ人間の鑑魂の三機能なり『智性のれど生き(植物的)感じ(感覺的)動物的)自ら廻る (智的

27人命を司るラケシスが生命の絲を巻き盡す時即ち人に振りダンテ獨特の記を述ぶ。 とを述ぶっ 繁體にかてはアクサナスの所説に從はず、プラトオンに據りダンテ獨特の記を述ぶ。 繁體

29 死後亡ぶべき霊魂は地獄へ向けてアケロンデ河への数理にあらずオリゲネスの説に基づく。 てテェレ河口へ(二の一〇〇)。 これはアクサデス の数理にあらずオリゲネスの説に基づく。

三0 町の手綱を堅く緊めねばならね」。過つ恐れあれば、この處を通るに

Summae Deus clementiae

大灼熱の胸にうたふを私は聞き

私は焔の中を行く諸の靈を見た。

此に劣らず振向く氣を私に起てさせた。

かくて私は絶えず眺めを分けて

をの聖歌を終へた後彼等は**聲高**

Virum non cognosco ション

三0 それが終るや又叫んだ「ディアナはかくて低く聖歌を再び始めた。

エリチで主處より追ひ出だせり。

かくて彼等は詠歌に歸り、かくて彼等は

55 邪淫は眼より人に入る。「凡を女を見て色情を起と

36「いと高き恵みの神」。 土曜日の朝藤に用ゐらる」

お眞中に。

32、われ未だ夫に適かざるに」路加傳一の三四。 受胎告示の天使ガブリエルに對する處女マリアの言葉な告示の天使がプリエルに對する處女マリアの言葉な

三〇。天、三一の三一、二。
いはディアナに追はれ、またヂウノは嫉妬の心よりして彼女を熊とせり。後母子共に天に登りて大小の熊星となれりでメタモルフォシ」二の四〇一一五の熊星となれりでメタモルフォシ」に対

39

山中に聞き得な差藁と後する。此によって凝し、またなんぢが

願望と他の愛慾が我等をなられる。

てれぞ汝の愕くもの、原因である」。 促すに從つて影は像を採る。

軒蛇腹は風を吹き上げて

そこで我等は塞がれざる側を 追い返し、道を此より離す。

ひとり宛行かねばならなかった。私はまた

此方に火を恐れ、彼方に墜落を恐れた。

わが導者は云った「少しのことにて

猪fortum: 邪淫淨罪の第七臺地。 或は ∞imentoC苛



徳と婚姻とが我等に負はすごとく

貞潔なりし貴女等と夫等を叫んだ。

この訳が彼等を充ち足らすと私は信ずる。また火に焦される問絶えず

最後の傷を縫ひあはすに

斯かる癒と斯かる糧とを要するのである。

40ダンテの額にある最後のP字o

第二十六曲

プログンスの詩を歌ふ。別は、傍にありしダニエル、アクナウは誘はれてりと戀の詩を語らへば、傍にありしダニエル、アクナウは誘はれて邪淫ハ範例を唱へ、慟哭をあぐ。やがてダンテ戀の詩人グ#ニチェル邪淫浮罪の徒ニ派に分かれて相會し火中に接吻しあひて過ぎ行き、邪淫浮罪の徒ニ派に分かれて相會し火中に接吻しあひて過ぎ行き、

かく前後して縁に沿ひ、我等が

「心をとめ、俺に教へられて益を得よ」。 歩んでゐた間、善き師は頻りに云つた

射て輝き、既に西方一面を

太陽はわが

右の

肩

の上を

またわが蔭にて焔を一際紅く見せたので青色より白に變へてゐた。

多くの影が歩みつく只管

この徴に心を留めをるを私は見た。

10 てのことが彼等に私のことを語らす

かくて彼等の幾人から「彼は假の身とも見えない」。

2 夕暮に近し。
2 夕暮に近し。
9 第七臺地へ登るに三時間を費せり。
1 二の八一駐
9 第七臺地へ登るに三時間を費せり。
1 一の八一駐
1 夕陽は右にあり、即ち彼等は西方を南に行く。
ダン

3 ダンテが肉身のましなる證據として。五の九。



私の眺めを宙にしたのであつた。

3

そこに各の影が双方にいそぎ

恐らく己が道と己が運命を探るかのやう短き應待に滿足するのを私は見る。互に接吻しあひて止まらず

顔をあはすのに似てもゐる。

第一歩を踏み出さいるに既や

◎ 新たなる民は「ソッドマとゴモラ」。

互に聲高く呼び疲かれる。

やがて此は霜を彼は太陽を厭ひて 斯くて牡牛を驅つて己が淫慾を滿たす」。

五曲)。此等の二派は反對の方向に歩む。 背きて色徳を充す者(創世記十八、十九章。地、第十7邪淫者は二派に分かたる。 (一)淫亂者(二)自然に

∞ festa. 六の八 lo

9ツドムとゴモラ。 共に邪淫罪のため火と確實の関リッドムとゴモラ。 共に邪淫罪のため火と確實の関シッドへとゴモラ。 共に邪淫罪のため火と確實の関

身を燃やさぬ處に出ぬやう

「おゝ汝、緩きためにあらず

恐らく敬ひて他の者等の後に行く者よ

オとスタツい オを敬ふ餘り静かに歩むダンテっ 4天に到る願望微かにして足緩きにあらず、 ギルヂり

蓋し印度人やエティオピア人が冷かな水に汝の答を要するは俺のみでない。...

5

喘ぐよりも强く此者等は皆てれに渴く。

俺に告げよ、宛ら死の網の中に

太陽に向かつて汝の身を障壁とするぞ」。 未だ入らぬかのやち、如何なれば

夙くにわが身を明かしたであらう。 新たに現れた者に心を留めなかつたならば

蓋し燃える道の真中を通う

5 ダンテの肉身に關る答を。

6詩人グポド・グサニッチェルリの 九二行を見よっ

『貴女』が上にゐて我ため思寵を獲たまふ。

さて汝等の大なる意の速かに充たされ なり、そのため朽つべき身を汝等の世界に私は齎らす。

乞ふ、尙紙に配し得るやうに私に告げよかくて愛に充ち、いと廣く擴がる

うしろに行く群は誰か」。

汝等は誰か、また汝等の背の

粗くむくつけき鄙びた山地の人々がいづれの靈も現した貌は

都に入る時、昏迷して默り

七の眺め廻すのに異ならない。

昏迷の荷を身より下ろした後 然し高さ心には速かに鎮まる

初め私に訊ねた者が再び始めた

チェ(地、二の五三以下)。 チェ(地、二の五三以下)。

或はベアトット

20清火天。 諸黌との天にて薔薇の形して永遠の座を といっ天、三〇の三九以下。

22 グサド・グサニチェルリッ 二五行。

一部はリフェ山に、一部は

この民は去り、彼の民は來たり 砂漠、方に飛びゆく鶴のごとく。

いとも適しき呼びに歸へる。 泣きつゝ初の歌、また彼等に

私に乞ふた其人々は

も いかにす聴きたげな親して

「おく何日にもあれ、平安の狀を彼等の願望を二度見た私は始めた前のごとく私に寄つて來た。

確かに受くる魂等よ

彼方に残さずして此處にその血とこれらずまた熟せざるわが肢體を

此より既早盲たらざらん為に私は登る。

11 中世紀の地理學者が漠然極北にある山に付せし名称

13リピアの砂漠の

で著に對して此例を用ゆ。

一八の七三。また地、五の四六には此處と同じく邪

がンテは鳥の例を屢引用せり。 二四の六四。天、

はが、一八の七三。また地、五の四六には此處と同じく邪

である。

15貞潔の模範を叫ぶこと。 二五の一二八つ14「いと高き恵み深き神よ」。 二五の一二一の

て方に壯华時代にありき。 17若からず又老いず。この時ダンテは三十五歳を過ぎ 16やがて薄罪を終へて天國に入るべき。

恐らく汝は我等の名の何であったかを知らうと願はんし

たり 語る時もなく、また語ることも能さない。

眞に悔いたので既に自らを消めてゐる」。 俺はグサド・グサニチェルリにて、臨終の前に 他に關る汝の意を俺は良く除かう。

優美な韻を用ゐた私とわが先輩の 彼が自ら嘗て愛の甘美にも

父であると名乘るを聞いた時

私は宛らリクルゴの悲しみに再び

たと彼等ほどに高く起ち上がらなかった。 己が母を見た時の二人の子のやうになり

31

長時彼を眺め造りつく私は進んだ。 聽かず、語らず、思ひに耽りつゝ

100

眺め飽いた時、人を信ぜしむる しかも火のため少しも其處に近寄れなかった。

> 29ボロニアの有名なる詩人にして一二七六年流竄の裡 30四の一三〇十二参照⁵ に死せりの ダンテは彼を賞讃せり。

32火のため起上りて近路リグポドを抱擁し得ざりき。 ネメア王リクルゴの妻イシフィレがテエベ征伐の七 女を救へり。「テエベの歌」四の七八五以下。 王怒りて彼女を殺さんとせしが彼女の二子現れて彼 行きしが、その間に野に置きし子は蛇に殺されたり 王の軍にランデアの泉を見せんとて(二二の一一二)

八の自らを責め『ソッドマ』と叫んで去り

そこで彼等は汝の聞きしごとく

愧ぢつし灼熱を煽る。

われらが人間の掟をまもらず

今投等の行と罪の何であつたかを汝は知る。

われらの汚辱として讀みあげた。

23 viver me_lio. 然し異本 morir meglio (優れる死)

24 死後救ひの生涯に入らん ため 煉獄の經驗を積みゆ

28 ビディニア王ニコメデと自然に背ける關係を結びし25 反對の方向に行く邪淫の徒。

27 ermafrodito. 元來はエルマとアフロディテの子の名がは、梁に一身に男女兩性を俱有するに至れりで「メかば、梁に一身に男女兩性を俱有するに至れりで「メかば、梁に一身に男女兩性を俱有するに至れりで「メ

28四一行註2

1三0 卓れると思ふ者には然語らしめよ。

人は我見を固めてしまふ。かくて技巧や理を聽さもせずに真理よりも聲に顔を向け

遂に真理が尚多くの人々を服して

多くの古人はグサーネに斯くなし

僧院に容されて行く鴻大なるさて基督を集團の僧院長とするこれがいれで只管彼を賞讃へた。

三の願くは罪を犯す力の既早我等になる特権を汝が有するとすれば

かくて彼は近くにゐた次の者に恐らく『主の派』を俺のため彼に一唱せよ」。

37 リモデュのデロウル・ドウ・プルネイ r(Girnult de

38 驗。

39アレッツオ・グサットネッ 二四の五六0

40 天國^o

43 アルナウ・ダニエル。 句は無用なり。 一一の二二一四。 句は無用なり。 一一の二二一四。

響を以つて私は身をさゝげ

なし得ないほどに輝く跡を俺に殘す。 なはレエテが除さも灰色にも なはれに「わが聞くことにより

をこで私は彼に「今様の存する限り話にあらはす原因は何ぞ」。 話にあらはす原因は何ぞ」。

さて汝の言葉が今誓つて真ならば

なんぢらの甘美な諸の詞」。 との墨すらを奪からしめる

一般の詩と琅漫の散文には萬人に 後に示すこの者は」とて前の一靈を 指ざし「母語の優れた治工であった。 なに示すこの者は」とて前の一靈を

以下。 以下。 二八の一三○ 二八の一三○

34 uso moderno. 第二十四曲五十六行の「清新體」のこと。

36 彼に散义を書きし跡なし。 これにては當時諸作家今日より見れば大なる作家にはあらず。今日より見れば大なる作家にはあらず。但してかりの詩人 Arnaut Daniel (アルナウ・ダニ

ギルデリオは王冠と法冠をダンテの頭上に載すと云ふ。 階に一夜を過し、ダンテ夢に美しきリアの花摘みつゝ野を行くを見る。醒めて名を呼ぶギルデリオの摩にダンテ猛然として火中に身を投ず。やがて三詩聖段日暮れんとして天使現はれ「心の尚きものは礪なりと」宣ぶ。ペアトウリチェの

太陽がその造主の血を注ぎ

給 ひし處に初光を顫はす時

ガ 1 ~ 2 ヂェの波は正午に燬ける。 17 は高き天秤宮の下に落ち

かく太陽は位してゐた。 即ち日

彼は焔を餘處にして堤の上に立 逝かんとして 神の悦べる天使が 我等に現れた。

我等の聲よりも遙か に活 なして

Beati mundo corde と歌った。

10 かくて「先づ火に嚙まれずしては 聖台魂等よ、 前 に行かれず。 とれに入り

彼方の誦唱に聾たるなか

彼 は我等が近づい た時 に云った。

> 1 萬有の造主なる基督の十字架に懸かりし處即ち サ 厶 0) 日の出っ 王

3 2 西班 没の頃なり。 上の波」即ち恒河によりて此を示す)は方に正午な 一班男天秤宮にありとは夜との意なり。 西方九十度にある印度 牙の河の名。 に今白羊宮にあり、 してエルサレ 二 の æ ルサレムより西方九十度を距つる こムにては西班牙國を指す。 0 ムの裏蹠點にある煉獄は今や日 地 而して天秤宮は白羊宮の 二〇の一二五註っとれ煉 (ダンテは此處に ルサ

4「心の清き者は福なり」馬太傅五の八。

處を譲るため、宛ら水中を底にゆく

魚のごとく火の中に消え失せた。

彼の示した者へと少しく私は前に進み

悲しさところを備ふと告げた。 その名を受けんとてわが願望が

彼は莞爾として語りはじめた

10 Tan m' ábellis vostre cortes deman,

44

Ieu sui Arnaut, que plor, e vau cantan, Que ieu no-m puese, ni-m voil a vos cobrire.

Consiros vei la passada folor,

E vei jauzen lo jorn qu'esper, denan

Ara vos prec per aquella valor,

Que vos guida al som de l'escalina,

Solvenha vos a temps de ma dolor

かくて彼等を淨める火に彼は蔽はれた。

以下アルナウのプロプンス語の詩なりの 2煉獄の階の 1異本、汝の見るごとく (come tu ves)。 導く力によりて汝に祈る 悶えてわが越方の愚かを見 われは哭き歌ひつい行くアルナウなれ 願くは折よくわが憂ひを憶へよか さらげ汝等を階の頂に わが身を汝に蔽し得ず、またかく願はしめず 汝の慇懃なる求めは甚く我を悦ばし 数びて前なる望みの日をのぞむ

これに近づき手づから

対の衣の端を試し見よ。

抛よ、今一切の恐れを抛よ。

しかも尚私は動かずして良心に背いた。
此方に向かひ安んじて進み行け」。

尚も私が踏み止まつて頑なるを見た時

ベアトゥリチェと汝の間にこの障壁がある」。 稍心を惱まして彼は云つた「子よ、いざ識れ

ティスペの名に瀕死のピラモが

その時柔の實が朱くなつたやうに験を開いて彼女を眺め

わが頑冥は柔かくなり

わが心に絶えず湧く名を聞いて

すると頭を振って彼は云った「いかに、賢さ導者に身を向けた。

7 巴比倫の處女。 情人ピラモに逢はんとて牝獅子現れたれば急ぎ逃げ衣を落せり。 歌これを血に染めしかば彼女殺されたりと思ひピラモ失謀の餘り自殺せり。 これを見たるティスペは 亦狂氣して自殺せしがその血桑の樹に迸りかくり て白き 果が紅くなれりとっ 「メタモルフォシ」四の五五十一六六つとっ 「メタモルフォシ」四の五五十一六六つ

かく彼の言葉を聞くや私は

突き出し、既にその燃えをるを見し火を眺め、双手を高らかに組んで整穴に埋められる者のやうになつた。

人體を鮮かに心に描いた。

善き護衞者達は私の方に向き

ボルデリオは私に云つた 一わが子よ

5

てゝに苛責はあらう。然し死はない。

乗つて汝を安らかに導いたとすれば。
想以起こせ、想以起こせ……又既にデ*リオネに

神に尚近さ今俺は何を做すべきぞ。

確かに信ぜよ、この焔の胎の中に

汝の一すぢの髪すらを禿げしめ得ないであらう。

或は俺が汝を欺くと思はい

6地、一七の七九0

世紀にありき。 地、一九の五一註。 5數犯の殺人者を倒にして土中に生埋めにする刑罰中

**0 私は壓せられて眺め得なかつた。

「太陽逝き」とその撃が加へた なんちら止まらずして歩みを迅めよう。 「夕來たる。西の空の黑くならぬ間に

道は既に低き太陽の光線を

わが前に遮つた方向に

階を試みること幾下ならずして 巖を穿って真直に登ってわた。

私と賢者達は影の消えたことにより

七のかくて地平線の無數の際涯が らしろに太陽の臥したのを識った。

全く一の面となり17

我等はあのく一の段を寢床とした。 また夜の分布を全うせざる前

> 11、光あるうちに 行きて暗きに 追ひ及かれざるやう為 よ」約翰傳一二の三五。

15 異本、疲れし (lasse)

16 東方。 前面即ち東万に投ず。 太陽は西方にあつて背後よりダンテの影を

19 dispense. 夜がその暗黑を到る處に分け擴げざる前 17日全く暮れて一面に暗くなりぬ。

Ko

林檎に負けた童にするやうに彼は微笑んだ。我等の此方に止まらんことを願ふか」。かくて

やがて彼は私に先立つて火中に投じ

後より來るやうに乞ふた。既に長い途わられを離れてゐたスタッパオに

五0 これに比べては煮える硝子も 私が中に入るや、灼熱はそこに量るべくもなく

わが柔しき父は私を勵まさんとして投げし身を冷やすであらう。

絶えずベアトッリチェのことを語って進み

一の聲が彼方に歌ひつく我等を導き「彼女の眼が既に見えるやうだ」と云つた。

わられは亦ひたすらてれに

心を留めつゝ登り道の處に出て來た。

9林檎を見せられて泣き止かし小見い

10スタッイオは長き間ダンテとギルデリオの中間にあ

13 「斯で王その右にをる者に云は入我父に恵まる」者と願を嗣げ」馬太傅二五の三四。

たの大なる星の敷々を私は見た。その隙間より常にも優つて輝く

眠りが私を襲ふた。事の起こる前に諸の星を斯く念ひ、斯く眺めつく

サテレアが東より山に愛の火に永久に燃えるといふしばし、その音を知る眠り。

照りそめたと思ふ頃

見るやうに覺え、花を摘みつく 私は夢に若く美しい貴女を

100「わが名を訊ねん人は知れ

野を歩み、歌ひながら彼女は云つた。

鏡にものれを樂しむため此處に我を飾るなれ

動かしゆくは花の冠をつくらんため

21高く浮罪山に登り空氣清澄なるにより星は地上に於

夢なり(地、二六の七。煉、九の一八)。 空前の夢は正

す。、(Cerigo)と呼ばる。この島名によりてエネレを指え)生まれ出でたり。 この島の近海よりエネレ(ギナス) 中間である島にして現今はチェ リゴ

24 舊約聖書のヤコアの第一妻。 創世記第二十九章な見よ。 夢の中のレアは灰曲にマテルダとして川現力。一般に齧約のラケレ(ラケル)とリア(レア)は新物のマリアとマルタに相當して失々瞑想と活動の典型とせらる。神曲に於てはペアトゥリチェとマテルダとれに相當す。evepyetat (徳)を用の私でに依e (實踐的)とりeのpytiket (瞑想的)に分類することはアリストテレス「倫理學」の一の五。一〇の七、八に論ぜらる。がシテは瞑想を以つて實踐よりも一層に論がらる。がシテは瞑想を以つて實踐よりも一層は認知して、

登る力を我等より奪ったからである。 物くらふ前は頂の上にて捷く

跨りがであつた山羊が 反芻しながら默り 太陽の熱する間、蔭にやとなしく、

への これを守る牧者は杖に凭れ もたれたま、番をする。

また外に宿る羊飼は

やのが静かな群の傍に夜を明かす。 野獣に散らされぬやう護りつく

高き窟は此方彼方に我等を園んだ。 私は牝牛のごとく、彼等は牧者のごとく この時我等凡て三人は斯くなり

そこより外は殆んど見えなかつたが

19七の四三以下。

20 queto を副詞として「おのが森の傍に静かに……」 とも譯すべし。

1三0 これに敵ふ嬉しい賜物とてはない。 ボルデリオが用ひたが

私に來たので、一歩でとに上に到らんとの意に意が

絶頂の段の上に我等が到るや 階をすべて脚下に馳せ了へて 身に羽が生えて飛ぶやうに覺えた。

汝は見終り、これより先俺自らの云つた「孁し火と永久の火とを新ルデリオはその眼を私に注いで

識らざるとてろに汝は來た。

1三0 俺は才と工とにて汝を此處に見よ。
これよりは汝の快樂を導者とせよ。
汝は嶮しき道をいで、狹き道より出でた。

29 煉獄の火および地獄の火。

30人間理性(ギルデリオ)はこれ以上に進む能はず、神の天啓と思寵(ペアトゥリチェ)ダンテの導者たらざるべからず。

31 ingegno e arte. 前者は案出を後者は應用をいふったの一二五)

終日やのが鏡より離るくことなし

彼女はおのが美しき眼を眺めて樂しむ。

さて曉に先き立ち

彼女は見われは働きて充ち足るなれ」。

程遠からず宿る巡禮

これと共に去つた。そこで大なる師等のは、だとしほ嬉しく昇る輝きに、わが眠りも、かとしほ嬉しく昇る輝きに

既に起きをるを見て私も起きた。

探りゆく甘き林檎が「多くの枝に人間の然が

私に向かひ斯かる言葉をけふ汝の飢を鎮めるであらう」。

25リアの妹の

の二八。 26或は「彼女はおのが眼にて見るを悦ぶ」。 天、三一

27家路に向かひて0

ダンテは今や地上樂園に入らんとす。 28 真の幸福の唯一の源泉たる最高差即ち神のこと。

第二十八曲

新しき日を眼に和らげし

私は既早俟たずに堤を去り、茂つて生々した神々しい林の茂のて生々した神々しい林の

自からむらなく快き微風は四方に香りする。土の上を踏んだ。野を緩やかに緩かに辿り

わが額をうち、うつこと

10枝はこれに既や顫ひて悉く

聖き山の初影を投げる方に

しかし頂にゐる小鳥等が向かつて皆靡いてゐた。

メテおよびエカノエの清流のことを語る。 ひ鳥の歌と葉の囁きを聞く。流の邊に美しき貴女歌ひつゝ花を摘むダンテた注ぎ彼の疑問に答へ、やがてレダンテ太陽を正面に浴びて地上樂園に入り、甘美なる軟風の香を披ダンテ太陽を正面に浴びて地上樂園に入り、甘美なる軟風の香を披

1朝日0

2今やダンテ先立ち雨詩聖彼に從ふ0

3 oliva. 橄欖

4 諸天の東より西にめぐる運行によりて起こる。

5 西方。

G cime. とゝにては稍のこと。

ころに地のひとり自ら生ずる。

美しい眼の悦びつく來る間 かの哭いて俺を汝に來たらしめた 若草、花また灌木を見よ。

既早わが言葉をも、わが相圖をも俟つ勿れ。 汝は坐するもよし、その間歩むもよし。

されば俺は汝の上に王冠と法冠とを被らす」。 また己が意のまゝに做さいるは咎である。 回

汝の判斷は自由にして正しく且つ康である。

36 意志。「靈魂が罪より出づる時その力潔く自由とな 35座して瞑想するも可、歩みて活動するも可。 34ペアトウリチェの0 る」饗宴篇二の一。 地、二の一一六つ

四の六七註。 とを受くるなり。ダンテの抱負と自覺を見よ。地三 たり。故にこの二大根本原理の表象たる王冠と法冠 るべしとはダンテの根本信念なりき。 今やダンテ 神意が帝國と教會の二大制度によりて地上に實現す は一切の罪惡より淨まりて宛らに神意を行ふ力を得

5 隣下を暗く暗く進みゆきながら 何ものをも秘されての流に比べては

内に物を混ふと見えるであらら この世のいと澄める水もすべて

足にては止まつたが眼にては

小川の彼方に渡り、新鮮な

すると忽ち物が現れて 五月の千紫萬紅を眺めた。

驚かし、ほかの思ひを

悉く除けるやうに

四 そこに貴女がひとり現れ ちのが道を彩る花より花を

摘みつく行つた。 私は彼女に云った「あ、愛の光線に

> 14 mai.「トスカナ人は緑の枝を mai と稱し、古き慣 ひにより五月の初め窓にこれを挿せしと」(ランディ

277

15第三十三曲の一一九行に名乗らる」如く、この貴女 と同一視さる。然し近代の註解者は十三世紀後中の ポルンのマテルダより出づるとせりつ 獨逸の尼僧即ちマグデブルヒのマテルダ或はハッケ トスカナの伯母夫人マテルダ(一〇四六一一一一五) はマテルダなり。 彼女は一般に法王の味方なりし

その真直な姿より離れず、彼等の凡ゆる巧の技を棄つるほどに

悦びに充ちて彼等は歌ひ

葉蔭に夙き微風を迎へ

キアッシの濱邊なる松林に発の調にあはせて荷を支ふ状葉が彼等の調にあはせて荷を支ふ状葉が彼等の調にあはせて荷を支ふ状葉が

5

古の林のうちに移しとなった。

了微風そよ吹くも小鳥等が歌をやむるほど木を描がき

80:e prime. 異本 ore prime 即ち[曜]? 或は auras の意に解して[蔭]と譯す人もあり。
(Grundlegleitung) と謬せり。
(Grundlegleitung) と謬せり。
は風神? 彼は風を巖窟に封じ趾(o 共利亜、マルタ局、シチリア島を製ふものo 大利亜、マルタ局、シチリア島を製ふものo 大利亜、マルタ局、シチリア島を製ふものo 大利亜、マルタ局、シチリア島を製ふものo 大利亜、マルタ局、シチリア島を製ふものo

13 レエテロ

いと近くに寄り、快き響きは

容

美しき流の波に草の旣に

17歌醉と詞とが聞こゆるやらになれり。

おのが子により全くその慣ひを超えてといいまのが子により全くその慣びを超れて思んだ。といいまする處に到るや直ちに彼女は

ての高地が種なしに生ずる多くのかく輝く光が照ったと私は思はない。 弱く貫かれたギネレの瞼の下にも

翼向ふの堤より彼女は微笑んでゐた。 色の花を尚もおのが手にて蒐めつゝ

うねつて、レアンドゥロより受けし憎しみも然し嘗てセルセが渡りし處、今尚人類の誇りの然し嘗てセルセが渡りし處、今尚人類の誇りの七0流は我等を三歩距てゝゐた。

18 無意識に 0

2)或は「多くの色の花をおのが手にて弄りつゝ向かふナスンは熱烈にアドニスを戀するに至れり。

21 波斯王クセルクセス(前四八五十六五)。 希臘に侵逃げ歸れり。この選命の變轉は人類を抑えて鬱虚た変りしもサラミスの戰に破れ、小さき漁船に乗じて渡りしもサラミスの職に破れ、小さき漁船に乗じて逃げ歸れり ……」。

逢はんとせしが遂に溺死せりっに渡り彼の情人にしてエネレ女神の巫女なるエロに22若き希臘人レアンドゥロ は海峡をアビドよりセスト

心の證人と云ひ做される貌に身を暖める美しき貴女よ

前に寄る意を起こし頼み得ば、願くはこの流の方へと

要のし時、何處に如何になりしかを母はプロセルピナを喪ひ、彼女は春を汝の歌ふことを私に聽かしめよ。

汝は私に想ひ起こさす」。

玉(

互に緊めて殆んど足を地につけ

後女は小さき朱き花また黄き花を踏み足の前に開かずに廻るがごとく

(はましき眼を垂れる處女に異ならなかった。 私の方へと身をめぐらし

かくわが願ひを叶へて自ら

16 デオエとチェレレ の娘。 野に花を摘みたりし時、光の四三。同、一〇の七九。 野と伴侶の眼前にてブルトに奪ひ去られ、地獄の女

ちのが原因より出づる由を告げて

妾は汝を襲ふ霧を拂ひさよめやう。

お

たべ自ら自らを楽しむ至高善は

此處を永遠の平安の質として此に賜ふた。 人を善に又善のために造り

おのが過により人はこゝに住むこと短く おのが過により邪氣なき笑ひと

樂しき戯を哭きと苦しみに換へた。

水より又地より出でく

蒸氣が下に起てす擾亂が 能ふかぎり熱を追ひゆく

人と少しも争ひ得ざるやう

100 この山は斯く天上に聳え 鎖さる、處より上は

これに煩はされず。

26种

27 アダムの不順の罪により。

28 煉獄の門。 九の七六、一三〇以下。二一の四六。

私より受けた憎悪には優らない。

彼女は始めた「汝等は新参者である。

されば人類のためその巣に撰ばれし

この處に姿が微笑むので

恐らく或る疑いが汝等を怪しますであらう。

他に聞かんと願ふてとあれば語れ前にゐる汝、妾に求めし者よ

汝の凡ての問ひを悉く充たさんとて妾は來た。

私は云つた「森の水と響さとが

すると彼女は「汝を怪までものが

逆つてわが衷に摑みあふ」。

24 ダンテは今や二詩聖の先驅たり。 四行註。 四行 はなんちのみ手の業を歡びほこらん」詩篇九二の四。

22第二十一曲四三一五七に於てス タッパオは浮耳山になりの 然るにとれた薬にそよぐ風と注ぐ水とあるは如何、これにない、一曲四三一五七に於てス タッパオは浮耳山に

彼方にては摘み採られぬ果の

33地上にては見られり果。

三 有ることを知らねばならい。 汝の見る水は、息きして切らす

流のごとく、寒さが還す水蒸氣に

兩側にむかひ、開いて注げば Penatu 補はれる脈より出でず。

注ぐほど神の聖旨によつて償はるく

後々として盡きざる泉より發する。

此 方にてれは罪の記憶を人より

除く力を以って降り、彼方には 凡ゆる善行の記憶を復する力を以つて注ぐ。

30 こゝにはレエテ、かくて向かふ側には

次 二 いで彼方を味はねば効目なし。 ウノエと呼ばれる。また先づ此方

34 氾濫涸渇する地上の河。

35水に0

36 河流

その環。碎かれぬかぎり

原轉と共に環をなして廻るゆゑ

生々たる空氣の中にある高さ處を撃ちその運動は、この全く解かれて

また繁るがゆゑに林を響かす。

撃たれし植物は能くちのが力を

軟風に孕ましめ、かくて軟風は

= 0

空によって、懐胎り、斯くてさまざまな力の他の地は自ら適するか、或は

さまざまな樹を生ずる。

このことを聞けば、明はな種なしに

怪しむに足らなくなるであらる。或る植物が彼方に根を下ろすとも

2) prima volta. 諸天體の運行の源たる Prium Mobile

20 浮罪山の上方。

31人類の住める北牛球の

種なしに生ずると見えて質は然らざるなり。 運行と共に絶えず東より西にめぐるが、この山の如っき隆起にあたるや微風として感ぜらる。斯くして種は樹や草より地に振り落とされて芽を出だす。即ちは一種なしに生ずると見えて質は然らざるなり。

これは他の凡ゆる味に優る。

この上妾が汝に示さなくも

汝に尊さ劣るとは妾は思はね。との約束の外に及ぶともわが言葉が汝との約束の外に及ぶともわが言葉が汝の謁さは良く充たされ得やうが

詩にした人々は恐らく

普黄金時代とその福なる既を

回

これ人皆の云ふ神酒である」。 これ人皆の云ふ神酒である。 これに人類の根が無垢であつた。 これに人類の根が無垢であつた。

終りの解則を聞きをる見た。全く振り向け、彼等が微笑んで全く振り向け、彼等が微笑んで

等の住處。即ち詩と音樂の座所たり。二二の六六註37雅典を去る八十二哩の峰。 アポルロとムウ ゼ女神

『わが兄弟よ、心して聞け』。

わが思ひのうちに云った「此は何ごとぞ」。これは存へていよく、耀いたので

0

貫いて馳せた。そこで善き熱誠がすると甘美なる旋律が輝く空を

像られた許りの只獨りの女なる彼女が地も諸の天も從順なりしところにて地の大膽を責めしめた。

何の面覆を被むることをしなかった。

| 関に永久に住みえしものを。| 関に永久に住みえしものをらば人類に斯くも美しき4 エデンの関なる禁制の樹の果を敢て食らひし。| エ

第二十九曲

なる。

戀の貴女のごとく歌ひつく彼女は

Beati, quorum tecta, sunt peccata.

かくて太陽をひとりは見んと願

林しく凶りしニュフォ客のごことなどもは避けんとして、林の蔭を

その時彼女は流に逆ひ堤に沿ひて淋しく辿りしニュフオ達のごとく

その細き歩みに細くあはせた。金上り、私はまた彼女と駢んで

雨岸が等しく彎曲つてゐた。 再び私を日の出づる方に向けしめるや5

り」詩籍三二の一の
「その愆をゆるされその罪をおほばれしものは腐な

2 彼等は今南に向かふ。 五十歩ならずして(一〇行2 彼等は今南に向かふ。 五十歩ならずして(一〇行)やがてグンテはマテルダに伴はれて流を渡るまで(三一の九五) そこに止まれり。

更に少しく進んだが、尚も我等と

彼等の間にあった長きに亘る隔に

然し我等が彼等に近づき、感覺を欺く 黄金の七つの樹の有らぬ姿を見せた。

普遍對象より少しく其態が

距離のために無くなった時

整へて理性に推し測らしめる力が

その燭臺であること、また歌の聲々に 月の中頃の澄める夜半の オザーナと叫ばるるを識った。

Œ.

月よりも遙かに輝く

美しき什器が上に燃えてゐた。

昏迷を負へる顔もて私に應へた。 身を向けたが、彼る劣らず そこで私は愕さに充ちて善きボルデリオに

> 13馬太傳二一の九。「新生」二三の時。 12約翰默示録ーの一二一二〇0 11 ammanua. 東につかねる。二三の一〇七。 10 obblietto comun. 術語にして事實相異なれる事物が **禮典乃至 聖鑑の七つの賜。** テは燭臺と樹と、また甘美な旋律の中にある詞な辨 遠距離の爲等しき物と見える場合に用ゆっ へ得ざりしが、近づきて今その相違を認め得たり。 ことにては敦會の七 初ダン 289

14 異教徒なるギルデリオは此奇しき光景に對してダン テ同様何等知る處なかりきの

もし彼女が虔しくして此を被つたならば

此等の云ひ難さ喜悦を私は夙に

・ 永遠の快樂の斯かる初穂の間を ・ 水 か と で あらう。

喜悦を願ひつゝ進んでゐた時 私が全く恍惚となり、尚多くの

我等の前の空が緑の枝の下に

快き響きが既や歌のやうに聞えた。

四のいまエリコナ。須くわがために注ぎいで

5 現世に於ても來世に於てもo

ベアトゥリチェに選はんとの願望。

六の四六ー八つ

一八の八一。 一つ「六。同、二の九。同、一、一、「一、一、一、一の一六。同、二の九。同、三二の一十、一、一、一、一、三二の一十、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一

9 ムウゼのひとりにして天體のことに嬲る者。 とムよりムウゼの有名なる二つの泉注ぎ出づ。メンテはこの連山を泉と間違へて斯(云へり。

其後の空を彩り殘しなが前に進んで

翻る幢幡に似るのを見た。

かくて太陽が弓とし、デリラがかくて太陽が弓とし、デリラが

越えて後におよび、

わが判じによれば

この諸の旗はわが眺めを

ろ

端のものは十歩を距てゝゐた。

鷲尾の花を冠とする二十四人の わが述べるごとさ美しき天の下を

告が歌つてゐた「アダモの長老達がふたりづゝ來た。

娘等のうちにて汝は福なり

15 pennalli. 或は、筆o

16虹の七色。 月の暈。天一〇の七一九。

17 li 異本になし。

13 兩端にあるもの人間が十歩。 十歩は十歳の表象かっ

20 谐約聖書の諸書の表象。 小預言者等を一書、列王19 こムにては純粋なる信仰を表象する色。

紀略上下を一書、撤母耳前後書、申命記と以士刺書

四の四。と尼希米亞記を一書として合計二十四書。約默示錄

いとも緩く我等に向かつて進むやがて新婦達にも負けるほど

かく活ける光の貌にのみ慕以焦がれて貴女は私に叫んだ「何ゆゑ汝は

從ふごとく、後より來る民を見た。その時私は白き衣を纏ふて、おのが導者にその後に來るものを顧みないのか」。

かゝる純白はこの世にては嘗て見られず。

水はわが左の脇に輝き

覗き見れば、なほ鏡のどとく

もの わが 提に 至って止まり

尚もよく見んとて歩みを止め

たゞ河のみが私を距てた時

約翰は私とおなじく彼と異なる。これに彼等はなしてゐた。たべ初に就さ

二輪の凱旋の車が容れられている。

このものは亦双翼を真中と左右のこれのがリフェネの頸に曳かれて來た。

いづれをも壁いて害うことがなかつた。

なの技體の鳥の分は金色であり 彼の技體の鳥の分は金色であり 後りは朱に交じへし白であつた。 という。 というでありない。 であります。 であります。 であります。 であります。

傳、馬可傳、路加傳、約翰傳を表象す。子、牡牛、驚い象より成りて、こゝにては夫々馬太・野以西結書一の四十一四。 四個の生物、即ち人、獅

示錄四の八には六とせり。 ダンテは後者に從ふっ 28 以西結書一の六にはこの怪物の翼を四とし、約翰默

32 翼は避所の表象。 詩篇三六の六。同五七の一。33 半獅半鷲の怪物。 神人両性の基督の表象。29 舊新雨約聖書の表象。

33「わが愛する者は白く且つ紅にして萬人の上に超ゆ、33「わが愛する者は白く且つ紅にして萬人の上に超ゆ、35種馬最初の皇帝。

また汝の美は永久に福なり」。

21

エリサベツの聖母マリアに對する言葉。

路加傳一

の四二つ

諸の花と他の鮮かな若草が した。 のかで できないない。

たの この選ばれし民より解かる」や

彼等のうしろに各線葉を 宛ら天に光が光についく如く

冠とする四つの活物が來た。

羽は眼に充ちてゐた。アルゴの眼もいづれも六つの翼を羽とし

彼等の形を述べんとて、讀者よ、この上もし活さしとせば、斯くあつたであらう。

私に迫り、此に寛かなるを得ざらしめる。私は韻を散らさない。蓋し他の費が

100 されば寒き方より風と雲と

22民が去りて野面が見ゆるや。

23星が星に續いて現れ來たるごとく。

24四福音の表象。 基督に對する希望の色(線)を冠り

公後は百服を有したりき。 デオエ神がイノを愛するの後は百服を有したりき。 デオエ神がイノを愛する なの尾に着けたりと。

20他に語りて費すべきこと多ければ。

撃動は對なる恭しくも儼かなる 述べし凡ての集の後に

ふたりの老人を私は見た。 ひとりは自然がいとも愛しむ者のために

族のものなることを示した。 他のひとりは此に反する配慮を示し 造りしいと高きイッポクラテの

0 輝く鋭い劒により

やがて謙虚れる貌の四人を見 河 の此方なる私を恐れしめた。

皆の後に敏き頭した翁の只獨り 睡みつく來るを私は見た。

纒ふてゐたが、百合花にあらで 此等の七人は初の一隊とおなじ衣を

40 使徒行傳と保羅の諸書翰の表象の

41人類

28學の鼻祖ヒポクラテス0

43路加っ 彼は醫者なりきつ「我等が愛する醫者ルカ」 哥羅西書四の一四。

44使徒保羅? 彼は醫癒と反對に殺戮の表象たる剱を 携ふの

45「聖墓の劔」以弗書六の一七。

47駅示録の著者としての約翰瞑想に耽るの 46小書翰の著者即ち雅各、 彼得、 約翰、 猫太の表象の

ゲオヹに『地』が度しく祈るや たれれても美しかりし

三つこれと馴んでは見窄らしくあらう。 道を外れて焼けた太陽の車――も

大の中にては辨へ難かるべく 郷ひつく來た。ひとりはいと赤うして 郷がまま

線柱玉にて造られしものへ如く いまひとりは宛ら肉も骨も

時には白きに、時には赤きに彼等は第三は降りしばかりの雪のやう。

他のものらは歩みを緩めまた迅めた。率ゐらると見え、彼女の歌にあはせて

そのうち頭に三つの眼ある者の状に左の輪には紫に纏ふ四人の貴女が

30フェトンテ繰り地に近く太陽の軍を驅りて此を焼きしため、「地」はデオゴに祈りてフェトンテを殺さしむ。

37信(白)、望(綠)、愛(赤)の三神徳の表象。

39 思慮。

38正義、

剛勇、節制、

思慮の四元德の表象。

リチェ 嚴然としてダンテの陰落を叱責す。 ペアトウのうちに ヸル デリオに寄添 にんとせしも既にその影なし。 ペアトウやがて天 使等の投ぐる花の雲の中に純白の面覆を被甲橄欖を冠とし尊を長老等「新婦よレバノンより我に伴へ」と唱へて花・潘・散らす

罪のほか霧の西覆を知らず 永久に没することも見ることも知らず

また尚低さ七星が揖を廻す者を

港に死たらすごとく。 彼處にて

凡ての者におのが務を識らす第一天の

北極星が踏みとじまつた時

初グ 眞の民は、 リフォネとこれとの間に來た あのが平安に

向か ふが如く、 身を山車に向けた。

斯くてその一人が天より遣されし者の如く Veni sponsa de Libano 人歌いへ

三度叫び、衆みな此に和した。

0

1 て船を港に導くが如く。 地上北华球より 見ゆる北極星が水大等の道標となり

2天上

3 七つの黄金の燭臺 (二九の五〇)。 天のことの 第 一天とは清火

見よ。 舊新約聖書を表象する二十四人の長老等。 前山

4

5 pace. 教會のこと。

6 「新婦よレ パ ノンより我に伴なへ」雅歌四の八

やがて山車が私に向かつた時

少しく距で、見んか、瞼より上は

進み行くを禁じらると見え

雷が聞こえ、奪き民は

初の旗とともに此處に踏み止まった。

48百合花は舊約の大精神たる信仰の表象。 約の大精神たる愛の表象。

薔薇は新

上がって再び内に外に

10 落つる花の雲のなかに

緑の外衣の下に燃ゆる畑の色を純白の面帕のうへを橄欖に帯し

わが靈は、彼女の姿に というない。 というない。 というない。

既に入しきも。

眼には尚よく識らずに16

昔ながらの愛の大なる力を覺えた。

既に私を貫いた高き力が

わが眼を撃つや直ちに

8

12 冠し

13ペアトゥリチェロ 三色は夫々信望愛を表象し極機に 平安と智慧の表象たりロフィレンツェ Bargollo の 中安と智慧の表象たりロフィレンツェ Bargollo の 本この三色に彩られしが、後伊太利亞統一の旗の色 に選ばれたしため政治的理由によつて變色せしめら に選ばれたしため政治的理由によって變色せしめら

15ペアトゥリチェ死 して後今日 に至るまで長く彼女の14「新生」二九、一四。二四参照。

17九歳の折。

16面覆を被りしための

宛ら最後の召集に祝福まれし者等

再び受けし聲にてアルレイアを唱へつく

各ちのが洞より速かに甦るごとく

ad vocem tanti senis 神の車の上に

使者等が立ちあがった。

音 Benedictus, qui venis みた

Maribus o date lilia plenis と云ひつい

嘗て日の始に東方一帶は

5

薔薇色に、残りの天は

美しく澄める空に飾られ

眼の此に長い間堪へるを私は見た。

7最後の審判の日。

8 ハレルヤロ

9「かくも大なる長者の際に」

298

こゝに止むを得ず録したわが名の

*O 宛ら他の船に務める民を見響さに身をめぐらした時

心を失すして善く働かすため、心を励まして善く働かる民を見

艫や舳に來る提督のごとく

彼女は初め天使の祭のもとに貴女が車の左の端の上にゐるのを私は見た。

面帕を被り、眼を河の此方なる

私の方に向けて現れた。

頭より垂れてるた面帕がないない。

明らかに見せなかつたのにも關らず

語るもいと熱き言葉をさし控える

人のやうに彼女はついけた

23智慧の女神ミネルアに献げられし葉即ち橄欖。

私はボルデリオに向いて

一頭はぬ血とては一ドッラムマも私に 「頭はぬ血とては一ドッラムマも私に

畑の徴を識る」と云はうとした。

然しボルデリオは自ら退いて我等より

古の母の失いし凡てのものもかがなったして身を委ねしギルデリオ。

五〇

露に淨められしわが頰を再び

「ダンテよ、ボルヂリオが去つたとて源に黑からしめざる由もなかつた。

他の劒の爲に汝は泣くべきである」。まだ哭く勿れ、まだ哭く勿れ。蓋しまだ哭く勿れ。蓋し

18二一の九九。

19 日本アの歌」四の日日 Agnosco veteries vestigia

liammae より翻譯。

22 昔の母即ちエアが失ひて今ダンテが眼のありり見る地上樂園の一切の喜悅も美も、以つてギルデリオを失ひし髪ひを鎭むるに足らず、嘗て拭はれしダンテの類(一の九五一九)を再び涙に汚しめたり。「新生」「甕回のみなり。(天、二六の一〇四寒照)。「新生」「甕宮」「帝政論」何れにもダンテの名は記されず。「止むを得ざる理由なくして己がことを語るは修辭家になを得ざる理由なくして己がことを語るは修辭家になるれず」 饗宴篇一の二。但し書翰に於てはダンテをされず」 饗宴篇一の二。但し書翰に於てはダンテをされず」 饗宴篇一の二。但し書翰に於てはダンテとの法則に從はず。

直ちに水となつて自ら滴る状やがて蔭を失ふ大陸が風を吹けば

その如く永遠の諸の環の節に

20

宛ら火の蠟燭を解かすやうである。

然し「貴女よ、何ゆゑ彼を亂すぞ」と私は涙も嗟嘆もなくなつたが恒に節あはす歌の前に

彼等の甘美な調のうちに聴きとるや云ひしにも優つて深く私を憐む心を

息吹となり水となり、苦悶とともにればいる。

彼女は山車の前に云つた側に尚も堅く眼を通り口を通り胸より出でた。

立つてゐたが、やがて諸の

100

28アペンニノ山上の雪は北風をうけて先づ凍るもの

が頂點に達し直立せる者をして蔭を失はしむ。 29 阿弗利加。 阿弗利加にては一年に二度正午に太陽

30 賭天の階調。 天、七六一人四。

31左側(六十三行)。

「妾を善く見よ。けに妾は、けに妾はペアトゥリチェである。

人の此處に福なるを汝は知らなかつたのか」。いかなれば汝は敢て山に近づいたのか。

子に母の豪く見えるやうにその中に自からを見るや、大なる耻がその中に自からを見るや、大なる耻がるのが眼は清らかな泉に落ちたが

憐憫の味は味苦さものである。 彼女は私に見えた。蓋し嚴しき

八 〇

然し pedes meos を越えて過ぎなかつた。 然し pedes meos を越えて過ぎなかつた。

だける木の間 で♪**

スキアザニアの風に

24「主よ我なんぢに依りたのむ」で詩篇三一の一つ

だ。これとの場合に不適當なるものなりしならん。25「わが足を」。同上八節。 天使等は九節以下を歌は

26 vive travi. 活ける 桂 o

27ダルマティア山脈より吹く北東の風。

奇しき證をなすよと見えた。

然し悪しら種が蒔かれて耕される地は

地の善き生を多く有てば有つほど

暫しの間わが貌により彼を支へ

若々しい眼を彼に示して

わが第二の時期の関に到って世を變へるや妾とともに彼を正しき方に向けしめた。

忽ちての者は妾より離れ

他のものに身を委ねた。

わが衷に増さるや、彼にとりて まが肉より靈にのぼり、美と德とが

妾は貴さと悦ばしさとを減じ

高の虚しき像にしたがい。 なば何の約束をも完く果され

の一四一。 39 一切の徳と技能とがダンテに現れて見えたり。天、八

りっ 「若しこのもの(心)が良く耕され又は善き習ひによつて支へられずば、種は益なく寧ろ播かれざりによつてすべられずば、種は益なく寧ろ播かれざり

红second)etade. ペアトゥリチェは一二九〇年六月九日即ち二十五歳にして世を去れり(「新生」三〇)。 始まる。饗宴第四の二四。

としきものらに斯く其言葉を向けた。まして

でない。 でも睡眠も汝より盗むことがない。 されば彼方に泣く者のわが意を悟り かくて罪と憂いの量が等しかるやう。

大なる諸の輪の業のみならず 一切の種を一定の目的に向ける

10

われらの眼の近づき難さ

雨降らす神の恩龍により高さ彼方より水蒸氣を

あらゆる正しき慣が彼のうちに るの者はその若き目に甚く力を受け

33 sustanzie (本體)。 こゝにては天使のこと。22 pie. 或は、憐みふかき。

34天使等は永遠に於て生き神の光を眺めて一切を見る故に、世界が代々に 辿り行く、時間々々を見て智悉す。 さればダンテ叱責の理由を天使等に殊更述ぶる要なし。然もペアトウリチェの此を語るはダンテに聞かして改悔の涙を注がしめんためなり。

36睹天と結ばりて諸の下界に及ぼす感化。

37直接神より來たる大たる賜物。

の作はこの語を附して「新生」と云はる。 33 vita nuova. 新しき生涯―若き日。 ダンテの最初

第三十一曲

「おゝ汝聖き流の彼方にゐる者よ」と

その端すらも鋭く見えし

言葉の実を私に向け

躊躇ふことなく續けて再び彼女は始めた な。

「語れ、語れ、これは異であるか。

またこの糺彈に汝の懺悔を結ばねばならね」。

わが力はいたく観れ

聲は動きしも、その器闘より

解かれる前に潰えた。

00 暫く待ち、やがて彼女は云つた

何を考へるか。水にて汝の悲しき記憶が

混亂と恐怖が共に交つてわが口より まだ害はれない故、私に答へよ」。

1

レエテ河

(三八の一二八。本曲九四一一〇二)の水

を飲みて罪の記憶まだ失はざればの

ペアトゥリチェの眼には基督の神性と人性とが交々映ずの人の貴女の舞踏のうちに入れ、ペアトゥリチェの眼前に導かしむの改悔の涙を注ぐ。マテルダ即ち彼を伴ひてレエテの清流に浸し、四改年の涙を注ぐ。マテルダルテの堕落を責む。ダンテ滂沱としてペアトゥリチェ儼然としてダンテの墮落を責む。ダンテ滂沱として

靈感を希ふて夢および其他により 真ならぬ道へとその足を向けた。

斯く彼は此を意に掛けなかつた。

亡滅の民を示すほか

足らなかつた程に彼は沈淪した。

ての爲妄は死者の門を訪れ

IEO こくまで彼を導き登りし此者に

涙を注ぐ改悔の何の税もなしに

神の高き定を破ることであるぞうない。

21 古来議論のある句なり。 解釋如何によりてはダンテの性行に重大なる影響を及ぼすものなればなり。 この議論は 選に登入せしことを責むるものか、それとも一層個人的にペアトゥリチェの死後他の女に心を寄せ、 登落的生涯を送りしことを責むるものか。この議論は ダンテ評博に譲る。 解釋如何によりてはダン

3「新生」四○、四三。「新生」に於てダンテは屢夢を見

4地獄の亡滅者の

むリムボロ

46 ギルデリオ。

47地、二の五二以下。

3 その前に汝は過ぎ行くやうになったのか」。 苦し い嗟嘆を吐い た後

漸く答への聲をいだし

居は辛うじて此を纒めた。

泣きながら私は云つた「汝の貌の蔽れるや

快樂によってわが歩みを回へらしめた。 直ちに現世のものが其虚妄の

すると彼女は「汝の告白するところを

たとへ默し又は否むとも、汝の罪はひとしく

然し罪の糺彈が自らの類より

知られる。斯かる「審判者」が此を知り給ふ。

さりながら尚汝の過に向かつて 輪は自ら双に逆つてめぐり戻る。 破れ出でんか、 我等の法廷にて

> 6 他の快樂

7 ち 難解の 或は慇懃を通ぜんとて情人の前に行く意なりとす。 仕へるの意なりとも、或は、さすらふ意なりとも、 何〇 主人に先立ちゆく僕の如く行くこと即

8 全智全能の神。

9 告白懺悔は神の忿怒を和げ、正義の劔を鈍らす。八

「然り」を押し出させ

宛ら張り過ぎて射られる時をの意味を識るに眼を要した。

箭が勢ひ弱く的に觸れるやうに

涙と嗟嘆を吐さいだし この重き荷の下に挫がれて

10

そこで彼女は私に「これに優って聲はその徑に沿ひて沮んだ。

次を導きしわが願望のうちに 人の憧るべきものなき「善」を愛するやう

いかなる溝が貫き、又はいかなる

鎖があつて斯くなんぢは

又いかなる誘惑、又はいかなる利益が前に過ぎ行く望を奪はるくに至ったのか。

2頭える唇を見ざるべからず。

3 呐喉

4神3

5若き日ペアトゥリチェに對して抱きし憧れっ

網を張り矢を射るは徒らである」。 然し羽の生えたもの、まへに 然し羽の生えたもの、まへに

私も立つてゐた。すると彼は云つた地に落とし、聽きながら立ち地に落とし、聽きながら立ち

つければ見て尚憂ひを増すであらう。

弱き抵抗によって我等の國の風

4

彼女の命令に私が顎を擧けしよりも

風が勁き檞を根こぎにする。またはイアルバの地より吹く

14二寧三擊0

とあり。 の一七。 拉甸膠聖書に pennatorn用(羽の生えし)15「すべて鳥の眼の前にて網を張るは徒勞なり」箴言一

ダンテの子供ならざるを示すためo

16

17 伊太利亞を含む歐羅巴大陸より吹く風即ち北風。 地域は mastral (北西の風) と讀むべきにあらずやと のでは、イアルバとはリビア のニムフォの生み し恵弗利加北部の王の名なり(「エネアの歌」四の一 し恵・利力の風。 イアルバとはリビア のニムフォの生み

いま耻を覺え、また何日かシレナ等を

要を包み、やがて土に散らされし なってもなった。 期くてわが葬られし肉が汝を 相反する方に動かすべかりしを聞け。 の種を棄てく耳を傾け

美しい肢體ほど大なる楽しみを

多

さてこの至高の樂しみすら我死により 自然も藝術も汝に示したことがなかった。

虚しきもの、初の箭に汝の願望を牽きし朽つべきものは何ものぞ。汝の願望を牽きし朽つべきものは何ものぞ。

斯くあらざりし妾に從ふべきであつた。けに汝は立ちあがり、既早

乙女または他のいと暫しの用の

11世の虚しき快樂の表象。 一九の二〇。

12 異本、「土なれば散らされし Ke che son terra)o

13天上の榮光に登りて既早死ねことなき。

さ 原因を私に與へた彼女ぞ知る。

曩にその獨りゐたのを見た貴女が私の上にて やがてわが心が外への力を回復した時

彼女は流に私を咽喉まで 一接に摑まれ、妾に摑まれ」と云ふのを見た。

浸して己が後に率る

水の上を梭のやうに軽らかに行つた。

Aspergas me と想ひ起てしる

祝福すれし場に近づいた時

尚更記しも能きぬほどいと快く私は聞いた。

美しき貴女は腕を開いて わが頭を抱き、わが水を

00

やがて引き出して浴びし私を 春むべき處を沈めた。

> 22 マテルグロ

23 レエテの流

24 異本、長音衣、袈裟 (stoIa)

25 Z ん」詩篇五一の七°これは洗禮式の際合唱除の唱へ 「ヒソアをもて我をきよめ給へ、さらば我きよまら る聖歌なり。 我を洗ひたまへ、さらば我雪よりよも白から

また鬚に言寄せてわが顔を求めた時

言葉のうちの毒を能く私は識 つ な。

廢めてゐたのを識つた。 限は原初の被造物らが蒔き散らすことを やがてわが顔を差し伸べるや

兩性にして只一身なる獸の上に また尚も定かならぬわが眼光は

70

面帕を被つて河の彼方に彼女はたのなが トッリチの向きをるを見た。

優つて、 この世にあつ 昔の ちのが身に優れて見えた。 た時諸の女に優れたのにも

改悔の蕁麻が弦にいたく私を刺し

最もわが憎むべきものとなった。 凡てのものゝ中私を誘ふて最も愛せしめたものが

かく自覺がわが心を嚙み、私は

0 0 地七、九五。煉、一

2011001100

19

prime creatura. 天使のこと。

21基督の人性神性を表現するグリフォネロ

100 灼く眼にひたすら結んだ。

或は此或は彼と態を映つして そのうちに二重の獣が

その像を變へたものを見た時 宛ら鏡に於ける太陽に異ならなかった。 讀者よ、自らは静止しながら

いかに私が怪んだかを思へ。

自ら飽かして自ら飢ゑしめる 恍惚に充ちて悦び、わが魂が

糧を味ってるた時

他の三人は尚も高き族を 姿に示しつく、その天使の節に

「向けよべアトッリチで、汝を見んとて

踊りつい前にすっんだ。

ベアトゥリチェの眼につ

32 re、gimento・一六の一二八に「政」と譯せし語と同 なりつ チェの眼に基督の人性神が交互に反映すとも解すべ ての二職能が相結ばる。或はこの一句はベアトウリ 基督に於て王(帝國)及び祭司(教會)とし

33グリフォネの像つ

34 四元徳よりもの

35 caribo. 舞曲。 田舎の踊。

いづれもその腕にて私を蔽ふた。

ベアトゥリチェの世に降りたまはざる前一われらは此處にニンフォ達、天にては星。

定められてその侍婢とならね。

汝の眼を裏なる歡びの光に研がん」。彼女の眼に我等なんぢを導かん。

かく彼等は歌ひはじめた。

かくて彼等は私をグリフォネの胸にて

彼等は云つた「よく汝の眼を惜しむなかれ

我等の方に向かへるベアトゥリチでに件ひ行つた。

愛が嘗て汝にその武器を投げし

緑柱玉のまへに我等は汝を置く」。

わが眼は縮よりな熱き千の願望を

四元徳。 二九の一三〇。八の九一。一の二四。

27

28 「こゝに智の眼は彼女の瞪であり……また彼女の微笑はその説服である」饗宴篇三の一五。 ダンテはかれ訓へらる。天、一の九四、一〇二。二の五二、かれ訓へらる。天、一の九四、一〇二。二の五二、四の一四〇。三〇の二六等。

30ペアトゥリチェの眼の

第三十二曲

下の場合に包含さらない。

十年の渇きを飽き足らざんと

かが眼は堅く注がれ

他の感覺は悉く壓し鎮められた。

また眼は此方にも彼方にも城壁を

築きて他を思はず、聖き微笑は

その時「注ぎ過ぎる」と女神等の云ふを書ながらの網にて此を目に牽き寄せた。

聞いたので、わが眼はそのため强いてるの間、沿き遊ぎる」と女神等の云よを

わが左の方に向けられた。

10 限のうちの物を見る装置が

暫く私を見えなくせしめた。

然しやがて眼に小さき物の形が見き出した時

極めて詳細なり。更に魔女と互人の表象によりて再びとれを示する善悪を知る樹と山車との表象によりて帝國と敦會の關係を說くことダンテ天使の調に歩を合せて森を行くほどにベアトッリチェ降る。

1ベアトゥリチェ 死してより弦に十年。

2ダンテの眼を

3三神徳を実象する。

れに面するダンテより見れば左方にゐたりしなり。三女神は車の右側にゐたりし故(二九八一二一)と

かく多くの歩みを運びし汝の忠信なる者に

聖さ眼を向けよ。恩龍により我等を惠み

16微笑。

四元徳はベアトッリチェの眼にダンテを導

き、三神徳は微笑に導く。

彼が認め得るやう、彼に汝の日の磁ひを

除さたまへ」。これ彼等の歌であつた。

現れし汝の姿をつたへんと試み
、別れし汝の姿をつたへんと試み
、別なるところに別なるところに

回回

何人が斯くバルナンの蔭下に

着白め、またその池に飲みしぞ。

7

37 異本、神聖なる。

38二八の一四10

39何人か響でダンテの如く詩作に熱心なりし。

三の小さき弧を描いた輪に從つた。

空しき 尊き林を斯く過ぎゆけば 整を信じた彼女の罪のため

放たれた箭が三度飛んで

天使の節が我等の歩みの拍子を採った。

葉なさ一本の木を取り圍んだ。 進んだ頃、ベアトゥリチェが降つた。 進んだ頃、ベアトゥリチェが降つた。 変するほどの距離を我等が

その高さてと、ものが森に住むその枝は上に行けば行くほど擴がり

「グリフォネよ、味ふに甘きこの木を

印度人も愕くであらう。

13方向轉換の際内側となる車輪の描く軌道は小なり。この時車は右方 に廻りし故 に右側 の車輪 のことなり。この時で三女神あり。ダンテこれに從ふ。

15箭の投射距離の三倍。

16神の命令に背きて樹の果を食らひしアダムを責むる整。「さればとれ一人より罪の世に入り罪より死の来たり人皆罪を犯せば死の凡ての人に及びたるが如し」羅馬書五の一二。

「小さ」きと云ふは、私が强いて身を

離した感覺のいとも大なる對象に比べていある)

太陽と七つの焔とを眼前にして

その右腕にあたり築光の軍勢が廻り

歸り行くを私は見た。

宛ら楯の下に身を蔽はんとして

110 軍隊が廻り、自ら凡て能く向き變はる前に

車の真先の木が廻る前にその王國の軍勢の先陣も

すべて我等を過ぎた。

グリフォネは崇むべき荷を運びやがて貴女達は輪にかへり

後瀬にわが手を引きし美しき貴女と斯くてその独一っ震はさなかった。

6ベアトウリチェロ

7七つの燭盛o

り返り原來たりし方向に進む。

9 ダンテは自ら戦場に出で展斯かる数減を受けて親しく識り居りしなるべし。

318

10 豫言者等。

11 軸。

12

大の重よりは濃い色にひらいた。

その時この民の歌った聖歌は

終りまでその節に私は追いても行けなかった。私に分からず、またこの世に歌はれるせず

聞きつゝ眠つた狀を若し私が述べ得んかいと難かりし眼が、シリンガのことを無慈悲な眼、尚も醒めをることの

私が睡んだ狀をも表し得たであらう。羅型を描く書家のやうに

然し眠を良く描く者に描かしめよ。

1の灼きがわが睡眠の面帕を引き裂きも されば私が醒めた時に移つて云ふ

恰も天使等にその果を貧らし

また「起きよ、汝は何をなすだ」と呼んだ。

24種々なる解釋あり。 基督の贖罪に神と人とを和合

25 デオエ神がイオを愛するを鰈みヂウノはイヨを牝牛なデオエ神がイオを愛するを鰈みヂウノはイヨを牝牛の九五。

蓋し所くなさず夏ま局で吐して 嘴にて裂かざりし汝は福なるかな

すると兩性の活物は「斯くして」 斯くこの勁き樹の周圍に彼等が叫んだ。 蓋し斯くなさば腹は禍に扭れん」。

凡ての正義の種が保たる」と叫んだ。

これに此より出でしるのを結へつけた。 寡婦となれる枝のもとに引摺り行きかくて彼は曳き來たりし軸に向かひ

五〇

大なる光が天上の大なる光が天上の

われらの草木が膨み、やがて太陽が

初め枝のいとも寂しかりしこの木がその駿馬を他の星の下に駢べる前。

19俗權と法權利目さずば0

20葉なき枝。

知は太陽が自羊宮にある時即ち春の意なり。 整會と帝國の一致提携を示すものとも解せらる。 教會と帝國の一致提携を示すものとも解せらる。 は此一句に

23太陽が自羊宮の次の金牛宮にある前。

他の者等は尚も甘美にして奥妙なる

私を塞いで他のことを聞かざらしめたものがれの歌もてグリフォネの後にのぼり行く」。

既にわが眼の前にゐたので

たて獨り彼女は直に地に坐して彼女の言葉が尚も注がれたか否やを私は知らない

とまりでである。 最に私が兩性の獣が結ぶのを見た輪車の

彼女の園となり、手にはアク#ロネにも ないないない。 またはアク#ロネにも

アウストゥロにも目されぬ燈を携へてゐた。

100

・やがて汝は妾と共に限りなく、基督も

されば悪に活きる世界を益するため一羅馬人たり給ふ羅馬の一市民となるであらう。

33天國の一員。

31ベアトゥリチェロ

類らはされざる燈の かんこ 即ち地上の風に32 北風にも南風にも煩らはされざる、即ち地上の風に

天に永久の婚筵を催さすといふ

彼得と約翰と雅各とが伴れ行かれていますが、まずが、さればいかの林檎の樹の小さき花を少しく見せんため

うち倒れ、言葉を聞いて

尚も大なる眠が破られ 20

我に歸り、その群より

たい「主」の衣の變はるを彼等が見たごとく

わが歩みの導者たりし憐み深き者の私は我に歸り、また曩に流に沿ひて

すると彼女は「新しき簇葉の下にあたりそこで全く惑ひつ、「ベアトゥリチェは何處ぞ」と私に云え、わが上に立ちをるを私は見た。

彼女を取繞る伴侶らを見よい根のうへに彼女の坐するを見よ。

26「わが愛する者の男子等の中にあるは林の樹の中に林檎のあるがどとし。 我深く喜びてその隣にすわれり、その實はわが口に甘かりき」雅歌二の三。林檎は基督、花は基督の禁光の襲覺、質は天に於ての結實。羔の婚宴(默示録一九の九)。 ス。

28死の眠より基督醒ましたまふ。

29マテルダ0

教會の象徴として残る。30基督昇天後神學の典型たるベアトゥリチェは地上の

然しその醜き罪を責めて 然既へ飛び入るのを私は見た。

わが貴女はこれをその肉塊なき骨の

車の匣にくだり、ものが羽を次で初めに來たところより鷲がはへらる限り速かに遁げ歸らしめた。

これに着けて去るのを私は見た。

また嘆く心より出づるごとき

『なくわが小艇よ、何ぞ積荷の悪しる」。聲が天より出で、斯く云つた

三のその時地が二つの輪の間に開けたやうに

高く尾を車に刺したのを私は見た。 高く尾を車に刺したのを私は見た。

86 異端の表象。

れしが次の世紀に Valla によつて覆されたり。 改宗し大なる寄與物を敎會に致せりとのこと。 こ

今汝の眼を車に向けて汝の見るものを

彼處に歸らん時、心して記せよ」。

かくベアトゥリチェが云つた。そこで全く

心と限とを彼女の意ふ處に向けた。

いと遠くにおよぶ涯より降る時の

110 濃き雲よりくだる火も

もろともに木の皮を挫くのを本に落下して花と若葉

私が見たヂャヹの鳥ほどに

斯く迅くは動かなかつた。

すると車は、彼のため或は右舷に或は左舷に彼はその全力をもつて車を撃つた。

やがて凡ての善さ糧を斷つよと 打たれる嵐のうちの船のやうに傾いた。

ず。故にとれは雲の最も遠き涯なり。に近き雲のうちに電發生す。火圏を越えて雲は登らず。改田を越えて雲は登ら

33神の鳥。 驚。以下初代羅馬皇帝の数會迫害を逃ぶ

折々接吻しあふのを私は見た。奪はれぬやらにとて彼女の側に直立しまたひとりの巨人が恰も彼女が彼より

かくて疑いに充ち念つて酷く彼女を頭より蹠まで答った。

私に向けたので、この猛き情人は然し彼女の食淫なさすらへる眼を

これを曳き行き、遂に只林を賣女彼は怪物を解き、林の中に遠く

一点のいよび新たな獣と私の間の楯とした。

41法王ボニファチオ第八世の地、

一九の一〇六記。

43佛蘭西フィリップ第四世の

廳を羅馬よりアギニオンへ遷せしことを示す。ボニファチオとフィリップの關係及び一三○五年法王

43

毒性な尾を身にひらいれ

残りしものは、嗟聲が口を底を少し取つてのたくり行つた。

開け置くよりも短き間に

恐らく康かな仁慈の意より献げられしずに茂げる沃地のごとく

和もこれに再び蔽はれた。 ない、また兩輪と

三四

頭をその肢體の上に出し

かく變はつて聖き造物は

初の者等には牡牛のやうに角があつたが三つを軸の上に一つを各の隅に付けた。

かゝる怪物は嘗て見られなかつた。四つの頭には只一つの角が額にあつた。

泰然として宛ら高き山の巖のごとく

39教會は諸王その他の人々の喜捨によりて富めり。

38紀元七二八年東西南教會の分雕っ

40 像慢、嫉妬、忿怒、懶惰、貪婪、鍌物、邪淫の七罪

て示され、後の四つは自己に對するものなる故に各前三者は他人に對する罪なる故に各二個の角により

個の角によりて表はさる。

また立ち止まってゐた私と貴女と賢者とを

たい観いて己がうしろに移した。

かくして彼女は行き、その第十歩が

地に置かれたとは思へぬ頃

そして朝かな顔して私に云った

よく妾に聴き得るところにねよ」。

io「少しく早く來たり、汝と語る時

彼女は私に云つた「兄弟よ、今妾と共に爲すべかりしごとく、彼女に寄り添ふた時

おのが身上の者の前に語らんとして 行きながら、何故汝は妾に訊ねやうとしないのか」。 彼女は私に云った「兄弟よ」今妾と共に

敬ひの極、聲を活きて

歯はで引き出し得ない人のやうに

私はなつて、完き響きを出さずに

7三一の七

6 スタツイオO

第三十三曲

Deus, venerunt gentes 心気々

貴女達は甘美な詩歌を始めた。

また嵯峨して憐ぶかく彼等に

耳傾けてゐたベアトッリチは、十字架のもとに

然し處女達が彼女に處を讓るや

變はりしマリアにも劣らぬほどになった。

真直に起って語り

火のごとき色して彼女は答へた

10 Modicum et non videbitis me,

et iterum, わが悦ぶ姉妹等よ modicum, et vos videbitis me.

かくて七人を凡てその前にならべ

ら若葉に粧ひ新なる若木の如く清くなり、方に星にまで登らんとすって世人に傳へよと命ず。やがてエウノエの清池に更生の力を獲、宛に帝國の救濟者出現を預言し、且つ彼の見聞せし凡てのことを歸り七聖女の交唱終るやベアトウリチェ立ちてダンテに向かひ教會並び

3愛の色。 一九の一五。

が必ずその本来の栄光な回復する確信を示せり。 の弟子に云ひし言葉なり。ダンテはこれにより教會 の弟子に云ひし言葉なり。ダンテはこれにより教會 を見じ又暫くして我を見るべし」

巨人を戮すであらう。

また恐らくわが述べる言はテエミや

てれ彼等の様に習ひて智性を止めるからである。 スフィンデの如く朧にで、汝を說くに足らぬてあらう。

西 年をも穀物をも害はずに 然し直ちに事がナイアデとなって

この難き謎を解くであらう。

傳へられた儘に此等の言葉を

汝、記し、かくて妾より

また汝これを書く時、今二度 死さしての駛驅なる生涯を送くる者等に示せ。

こゝに掠められし樹を汝が

見たことを隱さざるやうに心せよ。

これを掠め又は折る者は

17或は、穂。 二の一二四。

19 現世に住める人々。 18 スフィンヂェ(スフィンクス) の有名なる謎をオディポ りつ「メタモルフォシ」七の七五九つ が解きし時、託宣にて有名なりしテエミ大いに怒り アデといふはライアデの誤りにてオディボのことな 野獣を放ちてテエベ人の羊群と畑とを荒せり。ナイ

20初めはアダムにより次に皇帝により掠められし智慧

の樹。三二の五」。

33**I**

まると彼女は私に「今より身を恐れとなると彼女は私に「今より身を恐れと

奏汁を恐れないことを悟らしめよ。 蛇が挫いた器は昔にありしが、今はなきことを 蛇が挫いた器は昔にありしが、今はなきことを がといた器は昔にありしが、今はなきことを

次で餌食とした鷲に 率に羽を残し、かくて此を怪物とし

永久に後嗣なさにあらず。

星が既に近づいて時を我等に齎らしれての抵抗と凡ての防遏に胃されずに確かに姿に見きるゆゑに述べる。

190

前より遣されし「五百十五」が

8龍のことの

10「汝が見し獣は昔にはありしが今はなし」約翰默示

11フィリップ美王

12 殺人者が九日以内に被害者の慈の上にて葡萄酒に浸せる麵麭の美汁を食せば、遺族の復讎を免れ得べしとの注信フィレンツェにありしと。 この一句の意味は、如何なる手段をめぐらすも神の復讎を免れ得べしとなり。

15 意義明白ならず。 一般に此は「五百十五」の拉何字の一〇一註。

更に妾は、よし汝が書かなくも巡禮の杖に わが言葉の光が汝を眩すを見るゆゑ

機相を密いて歸ることもあればい せめて汝の身に描いて携へ歸らんことを願ふ。

そこで私は「封印された蠟が

る 捺された像を變へぬやうに 今わが脳はなんぢに即せられた。

何ゆゑわが眺を超えて斯く翔り 然し俟ち焦れし汝の言葉が

いよく一努むればいよく此を失ふのか」

彼女は云つた「これ汝の從ひ來し 學派を汝が識り、その敎の如何ばかり

能くわが言葉に從ふかを見 また汝の道が神の道を遠く距つること

> 27「新生」四〇。 椶櫚を付けし杖、海 扇 なつけし精 28 明かに記し得ずば、少くども巡禮が記念にとて杖に 櫻櫚を結びて歸るどとく、受けし印象を携へ行け。 子、これに草鞋が雲地への巡禮の印なりき。

29 これダンテの好んで用ぬし引例にしてアリストテレ スより借りしものなり。 一〇の四三〇一八の三八〇

3汝へ(地上の)教理の如何ばかりわが教より雕れをる

されを嚙みしため初の魂は苦と なり神はたで己が用のために此を造り給ふた。

自ら受け給ふ者を俟ち焦れた。 この嚙みし罰を

特種の原因によることを悟り得ずばその高くまた斯く頂の倒なるは

なんぢの才は匪ってゐる。

エルサの水とならず、又その意がなた虚しい思ひが汝の心の周園に

かく多くの事情のみよりしても 薬の質に染みしピラモともなりをらずば

禁制の神の正義の寓意を

しかし汝の智性が石となり 樹のうちに認め得たであらう。

21 アグム0

22 ダンテは教會歴史家エウセピウスの年表に從ひアダ生り、天に入る迄に總計五千二百三十二年を經たりまり、天に入る迄に總計五千二百三十二年を經たりとせり。天二六の一二〇―二〇

23 贖罪者基督。

24二二の一三五。 木の高きは帝國の廣大を、上に擴がるは帝國の神聖にして侵すべからざることを示す

25トスカナ州にある河の名。

その水は物を化石せし

むる力ありしと。

神の禁制を犯すこととなることを知るべきなり。を快樂により汝の心が固くならず、又その純潔を失むこれの三七註。 と、數行の意味は、世の思ひ煩ひ

歩みは遅く太易が辿ってなる。 子午線の圏を、灼きは强く

との寺合も獲新者として己の方に 歩みは遅く太陽が辿ってゐた。

七人の貴女達は、緑の葉と黒き枝の下にその痕ある物を見れば、立ち止せるやうにその時恰も護衞者として民の前に

たら友の如く別かれんとして躊躇ふよと見えた。 での泉より湧きいづるものゝごとく での泉より湧きいづるものゝごとく

この求めに向かつて斯く私に云ったことに一の源よりあらはれて、に一の源よりあらはれ

35太陽。緯度によりて位置異なる。

お異本、in sue とありて「その徑にて目新らしきもの

33アルブス0

39創地配二の一〇以下。 但しダンテはベティカスの「哲學慰安論」五の一にある
Tigris et Euphrates uno se fonte resolvunt,
Et mox abjunctis dissociantur aquis,
より飜譯せしものならん。

いと高く急ぐ天の地より

0離るゝに等しいのを見得んが爲である」。

私が汝より離れた覺えもなく

その覺えがないと云ふが、今日レエラの飲笑みつゝ彼女は答へた「汝になた良心もこれを責めない」。

水を飲んだことを今想ひむこせよ。

この忘却こそ明かに汝が他にまた烟より火を推しはかり得るとせば

心いかれて罪を犯したことを證する。

露にせねばならね」。 ないは、と、ない鈍き眼にものれを 100 げに今よりわが言葉は裸となり

見る處により此方彼方に移る

31「エホバ宣給はくわが思ひは汝の思と異なり、わが遺はなんぢの道よりも高く、わが思ひは汝の思わが道はなんぢの道よりも高く、わが思ひは汝の思と異なり、わが

32レエテ河は罪の記憶を除いて忘却せしむ⁵

33レエテの水を飲むべかりし事が既に忘れらるべき扉

34言葉の意味。



「その事を汝に語るやうマテルダに求めよ」。

Matelda. 始めて此處にこの貴女の名器げらる。

1三0 すると自ら責を解かんとする人のやうに

他のことを彼に妾は告げた。またレエテの水も美しき貴女は玆に答へた「この事及び

そこでベアトゥリチは「しばしば記憶を此等を彼より隱さなかつたと信ずる」。

奪ふ大なる配慮が、恐らく彼の心の

眼を暗くしたのであらう。

そこに彼を伴れゆき、汝の慣のごとく然し彼處に注ぐエウノエを見よ。

彼の衰へる力を復活らしめよ」。

1三0外の相圖にて現る」や、云ひのがれをせず

直ちに他人の意志を

なのが意志とする優しき魂のごとく

美しき貴女は私を捉へて後すくみ

41二八の一二七以下。

Euroos、希臘語のNoros(厚情)の窓にして、登められし靈魂に美行の記憶を回復す。二八の一二九

42

43 顔色を見しのみにて

「彼とともに來たれ」と云つた。

讀者よ、尚も餘白があつて記し得んか

私を飽かすべかりし甘さ水のことを

150 凡て充ちたので、藝術の手綱は然しての第二の歌に定められし紅數が

私は生まれ更つていと聖されば全私の行くをゆるさない。

方に星にまで登らうとする。独い新なる若木のごとく清くなり彼よりかへり、宛ら若葉に

40 rdire. 佛蘭西語の ourdir にして機織に 經をか

お神曲の總序たる地獄篇第一曲を除いて地獄煉獄天國 地獄篇は四七二〇行、煉獄篇は四七五五行、天國篇 地獄篇は四七二〇行、煉獄篇は四七五五行、天國篇

46神曲各篇は皆星 (stelle) の語を以つて終結す。



	1				
發行所	7	篇稿	大 煉	¥*	大正六年一月
振替東京二〇九一四電話番町四二五八番	印刷	印刷者	發行者	著	一日 發 行 刷
洛 東京市麴町區	東京市麹町區麴町二丁目九番地	河本俊二	東京市麴町區平河町五丁目三十六番地	中山昌樹	【定價金臺圓九拾錢】





旣 刊 刊 旣 發 ウ 神ダ 神ダ 行 ル ッシジの聖フランチェス + 所 ティ 曲テ 曲テ 振東 替京 Z 地 原著 口座東京市麴町 京區 中 獄 山 昌 四丁番目 樹 譯 洛 コ 送定總掃菊 料價 版 布畫四 送定天菊 近 陽 們金馬 八九製二八九製二十 拾壹製

刊

拾竹 頁 錢錢入枚餘

拾箱六

錢錢入頁

中

Ш

昌

樹

譯



DATE DUE							
,							
,							
4							
GAYLORD			PRINTED IN U.S.A.				
王			THE IN O.S.A.				
9							

1 2 18

GTU Library 2400 Ridge Road Berkeley, CA 94709 For renewals call (510) 649-2500

All items are subject to recall.

